第15回　2023（令和５）年度

子どもノンフィクション文学賞

～見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう～

受賞作品集

もくじ

ごあいさつ　北九州市長　武内　和久　2

選考講評　あさのあつこ／最相　葉月／リリー・フランキー　4

小学生の部

大賞　ある少女の記録　能美（のうみ）　にな　10

優秀賞　ブタはなんのために生きるのか　高橋（たかはし）　杏（あん）　20

わたしといたずらっ子　田之上（たのうえ）　心乃花（このか）　23

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　よっちゃんの居場所～治せない病気～　小川（おがわ）　彩有里（さゆり）　25

最相葉月賞　災害後の人の「心の輪」の再構築について　中川（なかがわ）　瑞祥（よしひろ）　35

リリー・フランキー賞　だから、反抗期なんだってば　川口（かわぐち）　颯（そう）　45

中学生の部

大賞

継承 ～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ～　野田（のだ）　真秀（まさひで）　51

優秀賞

隼は征く雲の果て～おじさんの人生を探して～　内田（うちだ）　博仁（はくと）　75

シュトルパーシュタイン　チャケ・レオン　96

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　人生作家　林（はやし）　翠恋（すいれん）　108

最相葉月賞　失敗を乗り越えて　宮﨑（みやざき）　大輔（だいすけ）　131

リリー・フランキー賞　ありがとう、ベイリー　清武（きよたけ）　琳（りん）　143

資料　小学生の部　受賞作品・学校団体賞・最終候補作品　158

資料　中学生の部　受賞作品・学校団体賞・最終候補作品　159

資料　応募結果　160

ごあいさつ

北九州市長　武内　和久

第15回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

選考にあたり、多大なるご尽力を賜りました選考委員の皆様、そして、学校関係の皆様を始め、ご協力いただいた全ての皆様に深く感謝を申し上げます。

この文学賞は、子どもたちが体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」として書くことで、人々や社会への関心を持つきっかけとなること、そして北九州市ゆかりの文学者たちが築いてきた豊かな文芸の土壌を継承していくことを願って、２００９年度から開催しています。

15回目を迎える今回は、国内外から、小学生の部２１４編、中学生の部２５１編の合計４６５編もの力作が届きました。多くの素晴らしい作品が集まり、選考には、委員の皆様も大変ご苦労されたことと思います。

応募された作品の中から、大賞は小学生の部は能美になさんの「ある少女の記

録」、中学生の部は野田真秀さんの「継承～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ～」に決定しました。このほか10名の方の作品が優秀賞、選考委員特別賞に選ばれました。

併せて、この文学賞に特に熱心に取り組んでいただいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、「西武学園文理小学校」、「さいたま市立浦和中学校」、「淑徳巣鴨中学校」、「和歌山県立桐蔭中学校」に決定しました。受賞された皆さん、誠におめでとうございます。

当文学賞の応募作品には、子どもたちの日々の出来事や体験したこと、また、根気強く調べたことなどが、自分の言葉で自由闊達（じゆうかったつ）に綴られています。こうした子どもたちの素直で率直な思いが皆様の心にストレートに響くことを期待します。

この文学賞に応募された皆様が、今後も、知的好奇心を失わず、自分と自分をとりまく周囲を凝視しつつ、自己を発信する場として、作品の創作を続けていかれることを願っています。

北九州市では、今後も次世代を担う子どもたちのために、文学をはじめとした文化芸術を生かした「彩りあるまちづくり」を進めてまいります。引き続き皆様のお力添えをお願い申し上げ上げます。

卓越した作品たち

児童文学作家　あさの　あつこ

1954年岡山県美作市生まれ。青山学院大学卒業。岡山市にて小学校の臨時教諭を勤めたのち、作家デビュー。「バッテリー」で第35回野間児童文芸賞受賞。「バッテリー」全6巻で第54回小学館児童出版文化賞受賞。「たまゆら」で島清恋愛文学賞受賞。著書に「NO. 6」シリーズ、「THE MANZAI」シリーズ、「グリーン・グリーン」「烈風ただなか」「白兎」シリーズなど多数。

毎年のことですが、今年も選考には悩まされました。最終候補のどの作品も味わいがあり見事な表現があり、深いテーマの掘り下げがありました。みなさんの底力に唸る思いです。

小学生の部の大賞は能美になさんの『ある少女の記録』に決まりました。あのコロナの日々を2020年から2023年まで、少女の視点から書き記した作品です。

これは未知のウイルスと戦いながら生活した、一人の少女の記録である。

この一文で締めくくられた作品を読み終えたとき、わたしは、とても貴重な記録を読ませてもらったという感動に震えました。わたしたちの暮らしを揺るがせたコロナの日々がリアルに細やかに記されています。大げさでなく、後世に読み継がれてほしいと心底から願った作品でした。優秀賞の『ブタはなんのために生きるのか』と『わたしといたずらっ子』は、どちらも個性的で愉快な作品でした。『ブタはー』はまず、そのタイトルに惹かれました。「人は」でも「きみは」でも「わたしは」でもなくも「ブタは」なのですから、わたしでなくても惹かれてしまうでしょう。内容も秀逸でした。作者の高橋杏さんは、肉を食べるという行為からブタの命について考え始めます。トサツの現実を調べたり、生産者たちにまで心を向け、自分で、ブタの命について考え続けるのです。そして、「かしこい人間」というキーワードに辿り着きます。あなたはかしこい人として生きているか。そんな問いを突き付けられた気がします。田之上心乃花さんの『わたしとー』は本当に楽しい、想像力に満ち溢れた作品でした。どうしてこんなステキな発想ができるのか不思議です。読んでいる間中、小さな男の子が走ったり、跳んだりしているようで、この作品自体がスケルツィーノそのもののように感じました。見事です。

あさのあつこ賞は小川彩有里さんの『よっちゃんの居場所』を選ばせていただきました。看護という重い問題を小学生の立場から、とても正直に、リアルに示してく

れました。ここには綺麗ごとも、ごまかしもありません。嫌なことも、辛いこともきちんと書き込まれています。だから、読み手の心に真っ直ぐに届いてくるのです。同時に、これからのこの国の行く末までも問うていると感じました。選にはもれましたが、わたしは川名岳大くんの『おれの取りあつかい説明書』が大好きでした。本音が弾ける作品は本当に愉快です。

中学生の部大賞の野田真秀さん『継承　戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ』には、ただただ圧倒されました。曾祖父の戦地での経験を調べ、ここまでリアルな作品に仕上げた作者の力に脱帽です。わたしたちが知っているつもりになっていた〝戦争の悲惨〟など吹き飛ぶような生々しい事実。これを中学生が書き上げたことに驚嘆するしかありませんでした。資料を丹念に読み込んだのでしょうが、ここには戦地に赴いた者にしかわからない現実があるのです。臭い、匂い、喜びや苦しみ。一日一日の生き延び方。ジャングルの闇の深さと傷の痛み。どれもこれも、圧し掛かってくるリアルさがありました。これぞ、まさに、戦争を記録した一作です。広く読まれてほしい。この世界を知ってもらいたい。強く思います。優秀賞のチャケ・レオンさんの『シュトルパーシュタイン』も戦争にまつわる記録でした。作者本人が過去と深く関わり、そこから思考していく。その過程がとても鮮やかで、歴史を知ることの意味と価値をしっかりと感じさせてくれました。内田博仁さんの『隼は征く雲の果て　おじさんの人生を探して』もまた、あの戦争を掘り起こそうとした作品です。加藤隼戦闘隊の一員であった大伯父について調べ、記した力作でした。戦争賛美に繋がってはいないかという危惧の思いもあったのですが、読み進めていくと、作者の深い洞察力が戦争の無意味さを浮き彫りにしていること、懸命に生きた人々から勇気を受け取り明日を生きる力にしていることが伝わってきます。こんな若者が増えれば、いつかこの世界から戦争をなくせるのではと、わたしも希望をもらいました。

あさのあつこ賞に選ばせてもらったのは林翠恋さんの『人生作家』。重い、暗い作品です。けれど、その暗さの底にきらりと光る美しさが存在します。自分の人生を冷静に見つめ、きちんと肯定できる。そこに辿り着くまでの作者の闘いの軌跡は見事としか言いようがない。これから、作者がどんな風に人生を書き続けていくのか。いつか、この続きを読んでみたいと、せつに望んでいます。

優等生にならなくていい

ノンフィクションライター　最相　葉月

©新潮社

1963年生まれ。「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、「星新一 一〇〇話をつくった人」で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に「青いバラ」「ビヨンド・エジソン」「セラピスト」「れるられる」「ナグネ　中国朝鮮族の友と日本」「理系という生き方」「証し 日本のキリスト者」「胎児のはなし」（共著）、当賞受賞者への取材を含む「調べてみよう、書いてみよう」（講談社）など。主なテーマは科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

いったい何が起きているのだろう。いつも心に響く作品はあるのですが、今回はとくにテーマの見つけ方や表現力にこれまでにないものを感じました。ただ残念なのはいつもと同じ、最後の最後に優等生になってしまうこと。複雑なまま筆をおくのはむずかしいけれど、答えは簡単に出せるものではありません。揺れていてもいいのです。

小学生の部大賞「ある少女の記録」はとても大切な記録です。子どもたちの日常にパンデミックがどんな影響を与えていたかがよくわかりました。言葉を交わさず折り紙を見せ合ったり、一人ずつのシートで弁当を食べたりと、大人とは異なる自粛の日々が描かれます。自分が感染して日記が終わるのも興味深い。得体の知れないものを恐れ、正体を知ってほっとする。人間っておもしろいですね。

優秀作「ブタはなんのために生きるのか」は、なぜ私たちは動物を食べるのかという問いに向き合った作品です。幼稚園で演じた劇や兄が教えてくれた絵本を通じて、なぜ食べるために命を奪うのか、肉になるならせめて生きているうちは幸せな環境をつくってあげられないか、自分のできることは何なのかと考えます。大人でも答えが見つけられないむずかしい問い。逃げずによく考えましたね。

優秀作「わたしといたずらっ子」を読みながら、ピアノの鍵盤を男の子が駆け回る様子が目に浮かびました。ピアノを題材にした作品はこれまでにもたくさんありましたが、この作品のよいところは、観客に演奏が届くとはどういうことかを素直な言葉で表現しているところです。拍手が聞こえてきました。

最相賞の「災害後の人の「心の輪」の再構築について」

は、九州北部豪雨の被災地のその後を転入者の視点で記録した作品です。転出者が増えて町がさみしくなるなか、パンデミックが襲います。二度の天災がいかに人と人のつながりを揺るがしたか。若者や子どもや新しい住民の考えを受け入れない町の閉塞性への警鐘もあります。作者はもっと書ける人。次作も期待しています。

中学生の部大賞「継承～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ」は大変優れた作品です。鳥取出身の兵隊としてビルマで戦い、右腕を失ってもその経験を手記に残した作者の曾祖父に敬意を表します。その手記を発見し、関連史料と共に深く読み込み、文章で再現する。細部が丁寧に書き込まれているため、私までその凄惨な現場に立ち会っているようでした。斉木軍医の自決や祖母の自死を知った曾祖父の無念はいかばかりだったか。決して忘れてはいけない、人間の記録です。

優秀作「シュトルパーシュタイン」はホロコーストの犠牲者を記憶するプレート「躓（つまず）きの石」と偶然出会った作者が、その由来と犠牲者の来歴を探る旅です。ナチスはユダヤ人だけでなく犯罪者や障害者らを強制収容し、過酷な労働を強いたり人体実験の被験者にしたりしました。プレートに名前が刻まれたザッティンガーさんも窃盗などの罪を犯した一人でしたが、強制労働後に腸チフスで亡くなります。作者は彼が収容されていたダッハウ強制収容所を訪れ、国家の罪と向き合う覚悟を決めます。旅はまだ始まったばかりです。

優秀作「隼は征く雲の果て～おじさんの人生を探して」は、祖父の兄が加藤隼飛行隊の隊員だったと知った作者が手記や記念館の取材、親族への聞き取りを通して、シンガポール作戦を戦い、後輩を守るため戦死した大伯父の生涯をたどった作品です。人となりを知れば知るほど、なぜ死なねばならなかったか、戦争とは何かという問いは深まります。

最相賞「失敗を乗り越えて」は作者とその仲間による〈コロナ下のロボコン青春記〉。ロボット作りも興味深いですが、仲間が感染したり、学級閉鎖があったりとたびたびトラブルが発生、それでも乗り越えようともがく様子が生き生きと描かれておもしろい。文章はもう少しうまくなるはず。応援したくなる作品です。

それぞれの思い　届きました

イラストレーター・作家・俳優　リリー・フランキー

© HIROSHI NOMURA

1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説「東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン」は06年本屋大賞を受賞、220万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本「おでんくん」はアニメ化され、オリジナルグッズも性別・世代を超え幅広い人気を集めている。

小学生の部

大賞「ある少女の記録」は、小学四年生の作者が、子どもの目から見たコロナ禍の記録をつづった作品です。子ども視点の記憶が新鮮で、すごくおもしろかったです。成長とともに、平仮名から漢字へと変わっていきながらも、ドラマチックで、すぐれた文章力を感じました。

優秀賞「ブタはなんのために生きるのか」は、ブタ肉を食べている日常から、なぜ自分たちはそれを食べ、食べられているブタは何のために生まれてきたのかを考えるという作品です。何か新しい発見や見え方が書かれているわけではないけれども、子どものなぜなんだろうという気持ちや、みんなが忘れてしまっている初期衝動など、みずみずしさを感じました。

優秀賞「わたしといたずらっ子」は、ピアノコンクールに挑戦する小学二年生の作品で、文章から胸躍る感じがしました。「ソミドドドドド、ラファドドドドド」など、音だけで終わらず、ピアノを弾くうちに自分の中に小さな男の子が出てくるあたり、映像的でかわいい気がしました。

リリー・フランキー賞「だから、反抗期なんだってば」は、小学六年生という反抗期の時期に差し掛かった作者が、自分の中のモヤモヤについて調べた作品です。今の状態をなぜなんだろうと悩み、真剣に向き合い、考えているところが、とても好きな作品でした。

中学生の部

大賞「継承～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを

残せ～」は、曾祖父が残した日記、手記などを基にした作品です。五十枚という長さの大作でしたが、大変引き込まれました。日記を見たり、聞いたりしながら書いたとは思えないほどの臨場感がありました。まるで映画の原作を読んでいるかのようでした。すごい取材量だと思うし、香りがするようなディテールで、よくここまで集めたなと感心しました。

優秀賞「隼は征く雲の果て～おじさんの人生を探して～」は、隼戦闘隊に所属していた、おじさんのことを書いた作品です。とても読ませる力がある文章で、身内のことをここまで書けるのはすごい。次の世代の語り部になると思いました。

優秀賞「シュトルパーシュタイン」は、道端でつまずき転びそうになったことから始まる作品です。「躓(つまず)きの石」と分かり、そこに込められた思いに迫ります。僕自身、この石のことは知りませんでした。教えてもらいました。様々な出来事をしっかりと文章にする力は素晴らしいと思います。他の子どもたちにもぜひ読んでほしい作品です。

リリー・フランキー賞「ありがとう、ベイリー」は、病院で働く犬・ベイリーについて書いた作品です。病院や高齢者施設などで犬を見かけますが、単純に何のためにいるのか、僕自身もよく分かっていませんでした。その意味もよく分かったし、何年にもわたる長い取材も素晴らしい。映画の原作になりそうな作品でした。

この文学賞には、たくさんの子どもたちに挑戦してほしいと願っています。自分でこの賞を見つけて応募する子もいるでしょうし、学校で書かされて応募する子もいるかもしれませんが、感じたまま、思ったままをぶつけてください。粗削りの、ありのままの原石に出会えることを楽しみに待っています。（談）

小学生の部
大賞

ある少女の記録

明治学園小学校　四年
能美　にな

世界中にひろがった新型コロナウイルス感染症。現在私たちはウィズコロナ、アフターコロナともいわれる世界を生きている。ワクチンや治療薬が開発された今、『あの頃』のことをどれくらい覚えているだろうか。ウイルスにまだ名前のついていなかった頃、私は幼稚園児だった。書きとめていた、当時の様子をここに記す。

〜〜〜〜〜

《二〇二〇年》

〈三月〉そつえんしきえんきについてのはなしがあった。ママから、ようちえんにいくときにはかぜがはやっているからマスクをつけようねといわれた。おともだちもマスクをしているひとがふえた。ちょっとかわった、とくべつなかぜなのよとママはいっていた。ディズニーランドもおやすみになった。そつえんとおたんじょうびのおいわいにいくはずだったからとてもざんねんだ。ほかのおともだちもりょこうがちゅうしになっていて、みんなでざんねんざんねんとはなしていた。ざんねんまつりみたいだ。でも、そつえんしきのひはえんきで、わたしのおたんじょうびのひにかわったから、おいわいしようねとみんなでいった。たのしみだな。そつえんしきは、ひとりずつ、えんちょうせんせいがいすのところにそつえんしょうしょをもってきてくれた。きょねんはねんちょうさんをおくるうたをうたったけれど、ことしはちいさいひとたちはいなくて、ねんちょうさんだけだった。いつものように、なかよしのおともだちとおはなししよう

としたら、ママたちに「おかおがちかい。」とおこられた。おたんじょうびだったので、おめでとうをたくさんいってもらえるとおもっていたのに、そつえんしきのあとはすぐにかいさんでかえらないといけなくなってしまった。わたしたちはかぜをひいていないのに、どうしてすぐにかえらないといけないんだろう。とくべつなかぜだからかな。

ちょっとかわった、とくべつなかぜはしんがたコロナウイルスだとおしえてもらった。しんでしまうかもしれないからマスクをしないといけないということがニュースでわかった。たいおんけいはうりきれているので、いえにあるのをこわさないようにきをつけてつかってねとママにいわれた。マスクはねだんがたかくなっているし、こどもようのマスクはほとんどうられていないからなかなかそとにでられない。いえでマスクをつくろうとしたけれど、マスクのゴムもうりきれているみたいだ。だからぬのでマスクをつくってもらった。ふるいヒートテックのそでをきってマスクゴムにした。しょうがくせいになるために、まちにまったランドセルのうけとりにいくことはできた。がっこうのマークがついた、くろくてつやつやでぴかぴかのランドセルだ。ランドセルのカバーもすすめられたけれど、ことわった。ランドセルもマスクをしているみたいでかわいそうだとおもったからだ。

〈四月〉『きんきゅうじたいせんげん』がでた。にほんじゅうのがっこうがやすみになった。にゅうがくしきもえんきになった。どうしてもとママにおねがいして、きょうかしょをうけとりにいくのに、ランドセルをせおって、せいふくをきてついていった。クラスわけもはっぴょうされていたが、こどもはだれもきていなかった。かえりみちに、せっかくかっていたバスのていきけんのはらいもどしをした。だれもいないこうていのさくらのしたで、ひとりでしゃしんをとった。すこしずついえでかん字のべんきょうをはじめた。入学しきのなん日かあと、しごと中のママに先生からでんわがあった。クラスの人みんなに、入学しきにあえるのをたのしみにしているよとでんわしているみたいだ。わたしはでんわに出られず、先

生とはなせなくてざんねんだったので、手がみをかいた。ランドセルと、さくらのえもかいた。するとへんじがきた！学校で先生にあうのがたのしみだな。やさしい先生なんだろうな。ずっといえにいるので、ママにおしえてもらって、さく文をかくことにした。まずは先生から手がみのおへんじがきたことをかいてみようかな。ホームページも見ながら、学校のこともそうぞうする。うたが少しにが手なので、どうがを見ながら校かもれんしゅうしてみた。

〈五月〉きんきゅうじたいせんげんはかいじょされず、入学しきはまたえんきになった。ふようふきゅうのがい出自しゅくなので、ゴールデンウィークにもどこにも行けない。人のいないあさ七じからこうえんで自てん車にのるれんしゅうをすることにした。八じには家にかえる。のれるようになると、もうそとに出るのはやめようねといわれた。家でフラフープをすることにする。かいものに行くと、ハンドソープがうりきれていた。学校からメールがきて、十九日から分さんとう校がはじまるというおしらせをもらった。出せきばんごうでクラスを二つにわけてぜんはんとこうはんに分かれる。ふゆふくではあつかったので、あいふくをきた。でも、はじめてのとう校は、中みの入ったランドセルでうれしい。おもかったけれど、小学生のおもさだとおもってはりきってもった。でも、小学生がはじまった気がしなくて、なんだかコスプレみたいだなぁとおもった。おべんとうもきゅうしょくもたべずにすぐにかえったし、まえにもうしろにも、となりのせきにもだれもいなかったし、おしゃべりもきんしだったけれど、はじめてクラスの人ににあえてうれしかった。オンラインでもじゅぎょうがあるので、くにからのほじょ金でタブレットをかってもらった。学校にいったとき、アサガオのたねをうえた。あったことのないクラスメイトのなまえがかかれたうえきばちがあって、ふしぎな気分だった。五月のおわりにするよていだったうんどうかいの中しのおしらせと、六月に入学しきをしましょうというおしらせがあった。ついに入学しきだ！たのしみだな！

〈六月〉よるにちかくのビルを見たら、へやのでん気で『アリガトウ』とかいてあった。ぜんこくの一せい休校がかいじょになってきた。こんどこそ入学しきだとわくわくしていたら、なんときた九しゅうしに日本一早いだい三ぱがやってきた。また入学しきはえんき。家ではニュースをつけていることがおおくなった。テレビではまい日、日本ちずでかんせんしゃのかずがはっぴょうされている。いわ手けんはまだ一人もかんせんしていなくて、とても目立っているのでおぼえてしまった。ママが、「いわ手けんはげん気もりもりね。けんちょうしょざいちは『げん気もりもりもりおかし』だよ。」といっていた。学校は、分さんとう校がおわり、二十二日、ついにクラスぜんいんがそろった。ひろかったきょうしつがすこしせまくかんじた。なかよくなれるのかな。休みじかんのおしゃべりと外あそびはきんしだけれど、どくしょとあやとりとおりがみはしていいといわれた。ママは「かんがえたもんだね。」といっていた。あやとりでじぶんがかんがえたわざをだまって見せあったりして、すこしずつなかよくなってきた気がする。でも、みんなマスクをしているので、かおがよくわからない。ふしぎなかんじだ。

〈七月〉四日、とうとう入学式があった。一年生だけでこうどういっぱいにひろがってすわった。きているのはなつふくだ。ステージにはひまわりがかざられていた。一人一人名まえをよばれて「はい。」とへんじをして立ち上がったとき、はじめて『小学生』になった気がした。つかいはじめているランドセルには小キズがついているし、なんとせみがないていたけれど、やっとコロナとたたかって、かった気がした。学校は、きょうしつのかん気をするまで、あさはきょうしつに入れず外で待つ。いつも上の学年のお姉さんたちと、だまってダンゴムシをさがしている。みつけたら、そっとみぶりでおしえてくれる。『ダンゴムシの会』と名まえもついた。十九日、お母さんとえいがを見に行った。えいがはしゃべらないからいいかもとはなしあったのだ。こうやってすこしずつたのしいこともしていきたいな。『風の谷のナウシカ』を見にいった。お母さんは小学生の時、すごく好きだっ

たらしい。ポスターをみてダンゴムシと小人のはなしだと思っていたが、ちがった。いわ手けんでついにはじめてのコロナかんせんが出たとニュースになっていた。おどろくことはなかったけど、すこしざんねんなきがした。

〈八月〉あっというまに一学きがおわってなつ休みになった。ほとんどとう校していないので、つうちひょうはつくられない。たった二しゅうかんのなつ休みだけれど、さく文やあさがおのかんさつなど、しゅくだいはたっぷりだ。

〈九月〉二学きがはじまり、マスクの上だけでほかのクラスの友だちも見分けられるようになってきた。もうすぐ入学まえからたのしみにしていた文化さいがある。きょねんはたくさん小学生にあそんでもらったから、今年はわたしが小さい子をあん内したいな。はじめて書いた作文が入しょうしたというでんわがあった。やった！でもコロナでひょうしょうしきは中し。ざんねんだ。コロナのせいでざんねんなことばかりだ。ごほうびにはほしかった国語じてんをちかくの本やさんにかいにいった。

〈十月〉ふゆにむけてかんせんしゃがふえそうだと毎日ニュースで言っている。マスクも手に入るようになってきているが、また不足するのではとしんぱいだ。母がまたそとに出られなくなった時のためにと中古のゲームをかってきた。月のおわりごろ、文化さい中しとおしらせがあった。がっかりだ。学校では、六年生が日がえりでしゅう学りょこうにいったらしい。お母さんは「だんだんね、元に戻るといいね。」と言っていた。わたしのたのしみは来月のえん足だ。

〈十一月〉はじめてのえん足。マスクをしたままだけれどみんなでこうえんに行って『あき』をみつけた。どんぐりやおちばをひろって、ともだちとみせあった。おべんとうは、それぞれシートをひろげて、一人ずつ食べた。十五日には七五三をした。きれいなきものをきたけれど、マスクをしているので台なしな気がする。しゃしんをとる時だけマスクを外したが、ほかの人にすごく見られている気がして、すぐにマスクをつけた。

〈十二月〉マスクをしているすがたにももうすっかりな

れてしまった。ゆきがふっているけれど、マスクをしているからそんなにさむくない。年こしのために市ばにかいものに行った。みんなで密をさけていた一年間だったけれど、年末の市ばは密だった。「来年もがんばろうね、生きていかないといけないからね。」とお兄さんが田作りをおまけしてくれた。

《二〇二一年》

〈一月〉テレビはコロナのニュースばかりなので、ほかのニュースを知るために、しん聞をとることにした。はじめての学しゅうはっぴょう会では音読をした。一言だけだったけれど、ステージの上でマスクを外してセリフを言った。ぶたいで話すことよりも、おおぜいのまえでマスクを外すことの方がきんちょうした。母が新がたコロナのワクチンをうった。今までなかったくすりだから心ぱいだったけれど、けろりとしていた。

〈三月〉母は二回目のワクチンちゅうしゃ。つぎの日はつねつして一日うごけなくなった。ふくはんのうとよぶらしい。あたまは元気なのに体がだるいらしく、母はずっと「役立たずでごめん。」と言っていた。

〈四月〜〉春休みにディズニーランドに行った。入場せいげんが二万人だ。多いと思ったけれど、じっさい行ってみるとガラガラだった。ふだんはどれくらい人がいるのだろう。人気のアトラクションもすぐにのれて、ぜんぜん密になるところがなかった。アルコールしょうどくえきが、いろいろなところにせっちされていて、手がカピカピになった。

二年生になった。今年の一年生はふつうに入学式ができたらしい。うらやましい。でも夏に入学式があったのも、めずらしいけいけんだと母は言う。そうかもしれない。またきん急事たいせん言が出た。コロナのニュースにもなれてきたけれど、げいのう人がコロナにかかったというニュースがふえてきた気がする。みんなコロナにかかってごめんなさいと言っているが、母は「いつかはきっとかかるんだよ。早いかおそいかだよきっと。」と言っている。花ふんしょうの時きがきた。花ふんしょうの鼻水がコロナとまちがえられてつらいという人がテレ

ビに出ていた。ごかいされないように、『花ふん症です』と書かれたバッジをマスクにつけているらしい。新聞には新がたコロナワクチンのよやくが取れない人がふえていると書いてあった。学校でもお休みの人がぽつりぽつりでてきた。休みだった友だちがとう校した時に「大じょうぶだった?」「どうしたの。」と聞くと、先生に「お休みの人にそんなこと聞いてはいけない。」とおこられてしまった。コロナで休んだことを知られたくない人がいるからかもしれないけれど、心ぱいする気持ちもいけないことなのかな。コロナはかくさないといけないことなのかな。心配する気持ちは当然のことだし、心配されないのもわたしだったらさみしい。家で母にそうだんした。すると母は「さみしかったよ。」という声かけを教えてくれた。でも、相手が返事に困ってしまうことがあるなら、やっぱり言えないかもしれない。今年は学校に毎日行っているので、マスクやけしないように、しっかり日やけ止めをぬっている。マスクだけではなく、人が多いところでは花ふんしょう用のめがねもかけることにした。きん急事たいせん言で夏休みがのびたので、母が都道府県パズルを買ってくれた。毎日ニュースで見ているので、すぐに覚えてできるようになった。ほかにもかぎ針を使ったアクリルたわしを作れるようになった。おしゃべりしなくてもいいので、学校でもできればいいのにな。今年は文化さいが行われた。はりきってれん習していたフエルトペンもかざってあった。図工や国語でつくったものを、いろんな人に見てもらえてうれしい。コロナの前は、子どもたちだけで自由に見て回れていたんだよと聞いて、うらやましくなった。

《二〇二二年》

　お正月をいとこと、タブレットごしではなく一しょにすごすことができた。久しぶりに会った学年が二つ下のいとこは、わたしよりも背が高くなっていた。春休み、私ははじめて新がたコロナウイルスワクチンを打つことにした。母のふく反応をみていたので、とてもこわかった。ワクチンを打つかどうか、母とたくさん話し合った。最後は打つことを自分で決めた。打ち終わった後は母と

二人で『密』になって待ち、かんさつの時間を終えることができた。それでも不安で一日中母の近くにいた。マスクの生活にもなれてきたが、今度は少しずつインフルエンザが流行してきた。新がたコロナが流行してから、少しでも体ちょうがわるければ休むようにいわれているので、クラスには欠せき者が多い。なんと、三学期のしゅうりょう式の直前で学級へいさになってしまった。ほかの学年が春休みになってから教室に荷物をとりに行った。がらんとしていて、また分さん登校の時のようだった。友だちがまだできていなかったあの時とはちがう。今分さん登校になってしまったら、もっとさみしくなるのではないかなと思った。

三年生になった。もうマスクをするのがふ通だ。布マスクをしている人はほとんどいない。効果が低いらしい。テレビや新聞を見てもコロナ以外のニュースが多くなってきたように思う。これが『新しい生活様式』というものなのだろう。体育の時間はもうマスクなしで過ごしているし、運動会も二学年ずつだが行えるようになった。夏休みには、旅行をする人たちのニュースも多く流れていた。マスクさえしていれば、ふっうの生活ができるようになってきていると母は言う。しかし、物心ついた時にはマスクが生活必じゅ品になっていたわたしにとって、『ふつうの生活』はマスクありの生活だ。前の生活に『戻る』という表現にも違和感がある。三年生の重ような行事であるダンスの発表会は、本番だけマスクを外して行うことになった。でも全クラス合同のフィナーレは今年も中止。楽しみにしていたのに残念だ。本番ではいつもとかみがたも違うし、友人のマスクなしの顔を見ることにもなれていないので、みんな無言で、照れくさそうに笑っていた。三年目で初めて、友達の左のほほにえくぼができることを知った。

《二〇二三年》

三月ごろからマスク着用自由化についての話が聞かれ始めた。卒業式は、卒業生はマスクなし、保護者はマスクありでの開さいだそうだ。在校生は三学期、つまり今年度いっぱいはマスク着用とのお知らせが来た。私たち

と同じ年に入学した中学生や高校生が卒業していく。私たちが卒業するときにはどんな生活になっているのだろう。マスク着用自由化になった三月十三日。周りを注意して見ていたがマスクを外している人はほとんどいなかった。公共交通機関の中だからかもしれないと思ったが、帰って母と買い物に行った時にもほとんどみんなマスクをしていた。

春休み中、母が仕事の間は祖母の家で過ごした。もうすぐ、新型コロナは五類感染症に変更されるらしい。それでも、得体の知れない不気味なウイルスという印象は変わらない。マスク自由化後、コロナ感染者は少しずつ増えていたので、念のため祖母の家の中でもマスクをしていた。

三日後、祖母から母に電話がかかってきた。少しだるいので念のためコロナの検査を受けたという。その後、祖母のコロナ陽性が確認された。数日後、私も抗原検査で陽性。四年生の最初の始業式の直前、数か月前から練習を重ねてきたバレエの発表会の直前でもあった。隔離期間は始業式の日を含んでしまうことが決定、バレエも直前練習には出られないことになってしまった。祖母は泣いた。泣いて私と母に謝った。母は怒っていた。祖母が何度も謝ることに対して怒っていた。みんないつかはかかる。そう言っていた母の姿を思い出した。悩んだが、友人にはコロナ陽性であることを、母を通して連絡してもらった。私は自宅内で隔離生活を始めながら、隔離期間が明けたときの友人たちの反応を想像した。得体の知れない感染症にかかった私を友達は今まで通り受け入れてくれるのだろうか。新しいクラス初日に登校できない不安や、発表会のリハーサルに出られない後ろめたさもあったかもしれない。ぐるぐるとよくない方向に気持ちが向いているまま、同じ家の中で母とタブレット越しに会話していると、動画が送られてきた。バレエの練習をしている友人が集まってメッセージをくれたのだ。

「になちゃんがいないと、さみしいよ。
早く良くなってね。
待ってるよ。」

〜〜〜〜〜

私が感染した約一か月後、新型コロナウイルス感染症はインフルエンザと同じ五類感染症になった。私のコロナ記録も、自分の感染時に終了している。今思えば、言い表せない不安や恐怖を『記録』という形で紛らわせていたのかもしれない。初期にはカレンダーを見ることしかできず、時期まで詳しく記録しているが、『新しい生活様式』に移行するにつれ、コロナ禍での日常生活の記録となっている。

新型コロナウイルスに対し、世界中の人が自分なりに戦ってきた。医療関係者をはじめ、あらゆる立場の大人、そして子供…。

これは未知のウイルスと戦いながら生活した、一人の少女の記録である。

小学生の部
優秀賞

ブタはなんのために生きるのか

日本女子大学附属豊明小学校　二年
高橋　杏

きのう、兄と母とレストランにやき肉を食べに行きました。わたしは、ずっとやき肉がにが手です。ブタを食べていると思うと、気もちがわるくなってくるからです。ジュージューやける肉にしみ出る、ちを見ていたら、ふと、ブタはどうして生まれてきたのかと思って、かなしくなりました。そこで母に小さいこえで、

「ブタは、食べられるために生まれてきたのかな。」と聞いてみました。母は、「むずかしいしつ問だね。杏はどう思う?」とこたえました。

ブタのいのちがむだなのかを考えたのは、ようちえんで、「シャーロットのおくりもの」というお話のげきをやった時からです。このお話はのう家で生まれて、小さいからおのでころされそうになったブタ、ウィルバーが大きくなるお話です。さいしょは、なにも知らないですくすく大きくなっていたのに、ある日、自分がいつかころされ、肉にされてしまうことがわかってしまいます。雪を見る前にころされてしまうとかかなしんでいたら、シャーロットというクモがなぐさめてくれ、クモのすに「さいこう」「てんさい」とかかいて、ウィルバーがころされないようにしてくれます。さいごにウィルバーはブタコンテストでゆうしょうして、ブタ肉にはならずにすんだという友じょうのおはなしです。わたしは、テンプルトンというシャーロットの言ばえらびを手つだう、どぶネズミのやくでした。

ネズミやクモがブタのいのちを大じにするのに、どうして人はいのちをうばわなければならないのか。同じどうぶつでも、ネコや犬は食べないのに人は鳥や牛、ブタはなんで食べてもよいときめているのかわからないと思いました。ブタはドロまみれでネコや犬みたいにかわいくないからかわいがらないのか。しかも、たまごやミルクがとれないのでブタは肉だけのためにころされてしまいます。

ブタはどうやってころされるのかを母と一しょにインターネットでしらべました。ブタがころされることを「とさつ」というそうです。まずブタをでん気ショックで気ぜつさせて、首のけっかんをきると、出けつ多りょうでしんでしまうらしいです。わたしは、ますいもしないでいたくないのか、ざんこくなとさつの方ほうにびっくりして、かなしくなりました。しかも日本のブタの多くが、せまいこやでたくさんのブタをかっているみたいで、たのしそうでもかいてきでもなさそう。

兄がブタ肉をほおばりながら、「ブタを売って生かつしている人がいるし、いのちをくれてありがとうって、のこさず食べたらいいんじゃない?」となぐさめるように言ってくれた。だから、二口ブタ肉を食べてみた。でも、やっぱりおいしいと思えなかった。ちのイメージがつよくて、気もちわるくなってしまった。兄は、「いのちをいただく、みいちゃんがお肉になる日」という絵本で肉を食べるときに思うことを話してくれた。このお話はじつ話を元にしています。食肉かい体ぎょうにたずさわってきた人に話を聞きながら書いたそうです。わたしたちは、毎日色色ないのちをいただいて生きています。たくさんのいのちをいただかなければ生きていくことができない人間といういきものなんだ。母がわたしに読みきかせをしてくれた。あいされてそだてた、いのちを生かつのために手ばなさなければならないのは、大へんなことだと思う。かい体ぎょうがいやになる人も多いらしい。本を読みながら、母もわたしも、かわいがっていた牛がとさつされる場めんで牛やかわいがっていた家ぞくがかわいそうで、ないてしまいました。家ぞくの人たち

が、牛かい体ぎょうをしてくれている人にかんしゃする場めんで、わたしもかんしゃしながら自分のいのちをつなぐためにいのちをくれた生きものをいただくことにしようと心にきめました。

わたしは、ブタは、何のために生まれてくるのか、肉になるためではないりゆうを考えました。もしも人間が、ほかの生きものにブタみたいにころされることがあったら生きるのがとてもつらいと思います。せめてブタが生きているあいだはしあわせに生きられるかんきょうを作ってあげたいと思いました。そのためにわたしは、何ができるのか。しらべてみたら、アニマルウェルフェアという「どうぶつは生まれてからしぬまで、どうぶつ本らいの行どうをとることができ、しあわせでなければならない」考えかたを広めようとしている生さんしゃがふえていることを知って安心しました。そういう生さんしゃの人たちも、そだてる楽しみがふえたりするみたいでうれしかった。わたしもネコ三びきと鳥一ぴきを小さいころからそだてているけれど、やっぱりブタをかっている人たちにも心があって、かわいがって大じにそだてていることがわかって、これからは肉を食べたり、スーパーでかったりする時は、そういう生さんしゃのそだてたものをえらぼうと思いました。

いのちには、どっちがえらいとかないと思う。しんかの本で、今の人間はホモ・サピエンスとよばれているのは、「かしこい人間」といういみがあるかららしい。だけど、今まで、多くのいのちをうばいながら人は生きてきた。ぜつめつしてしまった生きものもいる。わたしには、そんな人間が「かしこい」とは思うことができません。本当に「かしこい」人間になるにはどうしたらいいんだろう。しょうらい、じゅういさんになって、多くのいのちをみまもりながら考えたいと思います。

小学生の部 優秀賞

わたしといたずらっ子

南九州市立宮脇小学校　二年
田之上　心乃花

「ソミドドドドド、ラファドドドドド」

これは、ピアノコンクールの本せんきょくをれんしゅうしているところです。きょく名は「スケルツィーノ」。

「小さないたずらっていみだよ。」

と、ママが教えてくれました。それを聞いて、わたしの中に小さな男の子が生まれました。はじめは、いたずらを思いついて、十六分音ぷで男の子がはしりだすところ。ピアノでしのび足。クレッシェンドでだんだん近づいて、「ばあっ」とおどかす。いたずらしてはにげてまわり、さいごのさいごでピョンッとはねていたずら大せいこう。これがわたしのスケルツィーノです。

でも、わたしの男の子はよくころんでしまいます。十六分音ぷのれんだがむずかしいのです。音がころばないようにわたしは何どもリズムれんしゅうをします。一日五十回、いや百回。何ども何どもれんしゅうしていると手がいたくなります。まるでほねがおれたみたい。それでも男の子がころばないようにと、わたしはじぶんの手をマッサージしながられんしゅうします。大すきなドッジボールもがまんがまん。わたしがゆびをけがしたら、男の子もいたずらができません。

そして、まちにまった本せんの日です。かぞくもピアノの先生もおうえんしに来てくれました。わたしのミッションは、とにかくまちがえないように、ころばないように、男の子とさくせんじっこうするだけです。

「ソミドドドドド、ラファドドドドド」

男の子がはしりだしました。
「やった。ころばなかった。」
ちかづいて、ばあっ。さいごに大きくはねてみごとなちゃくち。やったぁ。今日の男の子は、ピースまでしているみたい。
えんそうがおわると、かぞくも先生もすごくほめてくれました。わたしも今日が一ばん楽しく男の子といたずらができました。
コンクールのけっかは、なんと入せん。わたしの中の男の子が、みんなにも見えていたんだと思うと、とてもうれしかったです。つぎはどんなきょくで、どんなものがたりをひけるかな。わたしはわくわくしました。

小学生の部
選考委員特別賞
あさのあつこ賞

よっちゃんの居場所
～治せない病気～

高槻市立大冠小学校　五年
小川　彩有里

私のおばあちゃんは、「よしみ」という名前です。家族はいつも、「よっちゃん」とよんでいます。

よっちゃんは病気です。多系統萎縮症（たけいとういしゅくしょう）という、治す方法がまだ見つかっていない、難病です。しかもその病気は、のうの一部がちぢんでしまう、こわい病気です。

よっちゃんは私がまだようち園の時は元気でした。料理がとびきり上手で、買い物にも連れて行ってくれました。でも、私が一年生の時に、病気だとわかりました。私は心配でむねがいっぱいでした。ただ、その病気になっても、読み・書き・話すということはできます。なので、よっちゃんは一人ぐらしをしていました。でもある時、ころんでけがをして長い間、入院をしてから、家に来ました。

よっちゃんの日常生活

よっちゃんはのみこむ力がふつうの人よりも弱いです。なので、みんなと食事ができません。ただ、水ようかんや、なし、りんごなどは自分の力で食べられます。よっちゃんのおなかには七ミリメートルほどの小さな穴があいています。そこから、お母さんがごはんの代わりの、栄養ゼリーみたいなのが入っているパックを入れます。少しだけなめてみると、キャンディーよりも少しすっぱかったけど、あまい味がしました。よっちゃんはみんなといっしょに食事ができるように、いろいろな食べ物を食べる事にちょうせんしています。

よっちゃんは、ふだんは車いすに乗っていどうします。ただ、手すりにつかまってなら、一人で歩けます。よっちゃんはお母さんと、毎日のように手すりにつかまり、歩く練習をしています。一、二、一、二とリズムに合わせて足ぶみをするその様子を見ていると、つい、応えんしたくなります。よっちゃん、いつか一人で歩けるようになったら、またいっしょにお出かけしようね。

よっちゃんはいつも笑顔が絶えません。車いすに乗って出かける時、みんなの様子を見ている時、話している時…。よっちゃんは、私の全ては、笑顔だ!!と、体全体で表現しているみたいです。よっちゃんの顔のまわりには、いつもきれいなピンク色をした、笑顔のもとになるちょうちょが飛んでいるように思えて、こっちまで自然と笑顔になります。

よっちゃんと話す時は、目を見つめて、よく耳をこらして、話の内容を聞き取ります。よっちゃんは一応、話すことはできますが、のどのきん肉が弱いため、早口でしゃべったり、はっきりと話すことが苦手です。そのため、集中せずに聞くと、一言ひとことが別の国の単語のようにきこえます。ただ、十分に話せなくても、相手に一しょうけんめい、自分の思ったことを伝えようとしています。私はよっちゃんのそういう気持ちが大好きです。今では、入院していた時よりも、だいぶ会話が上手くなり、笑顔もふえています。

家族はどう思っているか

よっちゃんは、私のお母さんのお母さんです。お母さんは、よっちゃんによく似ていて、たいていのお世話はお母さんがします。お母さんは、みんなのことが大好きで、一人ひとりを大切にしてくれます。よっちゃんもふくめて、家族の中でだれが一番好きかきいてみたところ、返ってきた言葉は「決められない」でした。だれに対しても平等で、良いお母さんです。

お父さんは、よっちゃんのことをそんけいしていて、よっちゃんに会ったら必ずあいさつをします。よっちゃんは、それに対して必ず返事（あいさつ）を返します。私も、部屋に入る時や出かける時はあいさつをします。

弟は、まだよっちゃんに慣れていないみたいで、口げんかになりがちです。そこをお母さんはいつも注意しています。私はそろそろ仲良く接してくれないかな、と心のおくで苦笑いして、見守っています。口げんかはするけれども、よっちゃんは弟と仲良くしようとするし、いつも花のようせいみたいなとてもやさしい顔でかわいがります。あれだけ口げんかしていても弟に対してとびきりやさしい笑顔と愛を持てるよっちゃんは、とても心が強くて、やさしい人だなあと思いました。私もよっちゃんのように心が強い人になりたいです。

私とよっちゃん

まだ私が四年生だった時、それも十一月ごろに、よっちゃんがろう下で足をすべらせてころんでしまった、今すぐ来てほしい、と、よっちゃんがお母さんに電話しました。ころぶ前、よっちゃんはスマホを持っていなかったうえ、あまりのいたさに自分で歩けない状たいでした。なので、うつぶせになったまま、ゆかをはうようにして進み、スマホをつかみ、電話をかけたということです。ころんだよっちゃんは、すぐに病院に連れて行かれました。今まで行っていたデイサービスもリハビリも、全て行けなくなりました。これからはベッドの上での生活になります。よっちゃんの生活はガラリと、まるで北海道の気温から一しゅんで沖縄の気温に変わるぐらい、変化してしまいました。

リハビリに行けない。

好きなように、立ったり歩いたりできない。

朝から夜まで、ずっとねたきり。

気軽に家族と話せない。

よっちゃんは、これからの入院生活を思うと、むねがはりさけそうなくらいつらくなったと言います。私だったら、絶対にがまんできないと思いました。私はお母さんとたまに市の図書館に行きます。ある時、図書館に行っている途中、病院から電話がかかってきました。よっちゃんです。お母さんが電話に出ました。少し音モレがあったので、どんな内容かききとることができました。電話の内容は、病院での生活でのことでした、ただ、よっ

ちゃんの声は、何とも弱々しく、まるで小犬が助けを求めるような声でした。一生けんめいにしゃべっています。なんだかその声に私の心はきゅうっとしめられて、思わずなみだが出そうになりました。お母さんは、とても心配そうな顔をして、うなずきながらよっちゃんの話をきいていました。

そんなある日、よっちゃんはしゅじゅつをすることになりました。けがを治すしゅじゅつです。私はあまり口には出さなかったけれど、心はものすごくドキドキしていました。成功するかな。失敗したらどうしよう。私は手をにぎりしめ、結果を今かいまかと待っていました。そして、ついにしゅじゅつがおわりました。結果は、成功したとのことです。私は小さく、「やったあ！」と言いました。しかし、安心したのもつかの間。こんどはちがうしゅじゅつを受けることになりました。それは、おなかに穴をあけるしゅじゅつです。おなかにあける穴は、七ミリメートルくらいです。なぜ穴をあけるかというと、よっちゃんはものを飲みこむ力が弱いため、十分な栄養がとれていないことが分かったからです。この穴から、栄養ゼリーみたいなのがつまったパックの中身を入れるのです。

そうすると、十分な栄養がとれます。入院してから二回目のしゅじゅつです。私はおなかに穴をあけるなんて、こわいな。やってほしくないな。と思っていました。でも、よっちゃんの体重はみるみるへっていくばかり。ついに二十キロ台までおちてしまいました。このままではよっちゃんがあぶない！きんちょうの空気がはりつめる中、よっちゃんのしゅじゅつはスタートしました。

私はその日、学校に行っていました。時々よっちゃんのことが頭をよぎります。

大じょう夫かな。

いたくないかな。

心配で心配で頭がいっぱいでした。

学校から帰ってくると、お母さんがしゅじゅつが成功したとの連絡があったと言いました。私は二回目のしゅじゅつの結果を聞いて、固くこおっていた氷がゆっくりと

とけていくように、とてもホッとしました。これでもうしゅじゅつは無いだろう。その思いでむねがいっぱいでした。この後、よっちゃんはしばらく入院をするとのことです。そうしたら、じきに退院できるだろうとのことでした。だけれど、まだ、退院した後の行き先が決まっていません。かといって、もう一人ぐらしはできないのです。なぜなら、よっちゃんは入院していて、自由にリハビリも食事もできていません。そのせいで、きたえていたきん肉が弱ってしまったのです。そのため、車いすでのいどうになりました。食事も口から十分にとれなく、おなかにあけた穴はというと自分で栄養をいれようと思ったら、かなり大変な作業になります。

よっちゃんは、うちへ来てもらうことになりました。

よっちゃんが来ることを知った私は、落ち着かなくなりました。なぜなら、よっちゃんの来る部屋が、一階のたたみの部屋だったからです。その部屋は、私のお気に入りの部屋でした。自分の部屋ではないけれど、いつもふとんをしいてねていた部屋です。一人になりたい時は、たたみの部屋に行き、おし入れに入って遊んだり…あるいは、その部屋のかべで、逆立ちをしたこともありました。このたたみの部屋は、私にとって思い入れのある場所でした。でも…よっちゃんがこの家に来たら。

大きな電動ベッドがたたみの部屋の半分に置かれ、タンスやらトイレやらで部屋がうめつくされます。今までふかふかのふとんをしまっていたおし入れが、よっちゃんのものでいっぱいになって、もう登れなくなります。そして、あのたたみの良い香りも、部屋に置かれた香水などの香りで、かき消されます。もう、たたみの部屋では二度とねれなくなります。あの、ねっころがると電気が四角いため、天上一面がホットケーキに見えてくるという私の好きなことも、楽しかったことも、おもしろかったことも、ぜんぶ、ぜーんぶできなくなるのです。そう。よっちゃんのせいで。お母さんも、よっちゃんのお世話でいそがしくなり、私と話す時間がへります。私は、どうしても、どうしてもそこがゆるせませんでした。でも、もうどれだけいやといっても、どれだけ泣いても、よっ

ちゃんは家に来ることになります。
決まってしまったのです。
あのたたみの部屋は、あと少しでよっちゃんの部屋になります。もう、その事実だけは変えようがありません。
とても、今までに無いような　いろんな気持ちが入り組んだ、複雑な気持ちになりました。
それにしても、人ってとっても不思議だなと思いました。
いつもはそんなに思っていなかった（気にしていなかった）ことでも、いざ、それが無くなったりしてしまうと、「今まで過ごしてきて、こんな思い出があったのに。」と思ってしまいます。それが、私にとって、とても不思議で不思議で、一生解けないなぞのように、頭中をぐるぐると新幹線みたいにかけめぐりました。
それから一か月ほどが経ちました。私はこのごろ、気持ちがやじろべえのようにぐらぐら、ゆらゆらしていました。ある時は、「絶対いや！」そしてまたある時は「まあ、いいかな」。そう考えているうちに月日（つきひ）は過ぎて、ついに、よっちゃんが来る日が決定しました。私はもう、これ以上、気持ちをがまんするのがたえきれなくなりました。たたみの部屋にお母さんを連れてきて、泣きました。
今までがまんしてきた分のなみだも、そこで一気に出てきました。でも、そのなみだが、たたみをとられるのがいやなのか、お母さんと話す時間がへるのがつらいのか、ただ単によっちゃんが来るのがいやなのか、私には分かりませんでした。でも、とにかく、悲しかったのです。
お母さんにしがみつき、わけもなく、泣いていました。ひとしきり泣き終えると、お母さんはなみだを流していました。きっと、私が泣いているのを見て、ついにたえきれなくなったのでしょう。そして、お母さんが次に発した声は、私の予想以上に深く、そしてゆっくりと、そしてはっきりとしていました。
「よっちゃんは、居場所がないんだよ」
その声と言葉が、私の心に、矢のように深くささりました。そして、トンネルでさけんだ声のように、何度も何度も、頭、心、そして体中を、ゆっくりか、すさまじいスピードか分からない速さで、かけめぐりました。

たたみの部屋の空気が、気のせいか、さっきより冷たくなった気がしました。
お母さんに心配かけちゃってたなあ。
居場所がない…とってもつらいことだったんだなあ。
そのとたん、心のおく深くにしまっていたあふれんばかりの感情が、ぶわっと一気に飛び出してきました。
もう、がまんできないよ。
なみだであふれかえりそうだよ。
お母さん、よっちゃんのことをひどく思って、ごめんね。
ぐにゃりとゆがんでいく視界の中、私は、しばらくむせび泣きつづけました。
そんな私をお母さんは温かく、そしてやさしい手でつつみこんでくれたのでした。

笑う門には福来る

よっちゃんが、家にやってきました。まだ、桜のひらひらまいちる四月ごろ、家にやってきました。よっちゃんが来る前日は、とってもドキドキしました。自分がよっちゃんと仲良くなれるか、とても心配だったのです。私がこっそりたたみの部屋をのぞくと、お医者さんがお母さんに、ベッドの使い方や薬の説明をしていました。私はまた、そっととびらをしめると、自分の部屋へと向かいました。今日から、よっちゃんといっしょに過ごします。素直になれるでしょうか。けんかはしないでしょうか。少し心配な気持ちが残っていました。
よっちゃんが家に来てからは、思った通り、おし入れは物がいっぱいで登れなくなり、部屋は香水などの香りが鼻をしげきします。私は今までと、少しちがう環境に、一しゅん、頭がくらっとしました。
でも、これからのことを考えると、よっちゃんと話す時間がふえると思い、少しだけうれしく思いました。
よっちゃんは家に来てから、私達と顔を合わせる時、いつも満面の笑顔でいてくれます。ちょっとのことでも笑うので、弟はたまにムカッとくるようですが、そのようなことはころりとわすれてしまうので、そんなに気にしていないようです。よっちゃんと弟が話していて、笑ったりおこったり、ふざけたり、笑わせようとしていたり

するところを見ると、思わず自然とにこっと笑ってしまいます。そんなこんなで、よっちゃんが来てからは、食事をする時、みんなの笑顔がふえて、楽しくなったような気がしました。

そこまでは良いのです。でも、どうしても、私はよっちゃんに少し、素直になれません。なぜだか、自分でも理由が分からないのです。よっちゃんが顔をこっちに向けると、思わずちがう方向を向いて、目をそらせようとしてしまったり、たまによっちゃんに対して、冷たい態度をとってしまったり…なぜだか、自分の心のおく深くに、「えんりょしてしまう気持ち」があって、それが、体にのしかかってくるようにずっしりと重く、自分で自分をいやになったり、本当にこのままでいいのか、なやまされた時もありました。好きときらいという気持ちが上皿てんびんにのせられたみたいに、ゆらゆらしています。

よっちゃんが家に来る前の日の気持ちがみるみるよみがえってきました。そのような日がまたくり返し、何日も何日も続きました。

十一月もそろそろ終わるころかなというところで、私はいきなり熱を出しました。三十八度の熱です。私は、立っていられないぐらい頭がくらくらしました。

よっちゃんはしんどそうな私をとっても心配そうな、守ってあげたいというような目で、見つめてきました。私はその目を見て、はっとしました。

よっちゃんは私のことが大好き。

早く元気になってほしい。

そんな強い意思(いし)が、すごく伝わって、それは意識がもうろうとしている私でも、はっきりとわかりました。心の上皿てんびんが「キィ」と軽い音を立ててかた向きかけました。

次の日、早くねたかいもあって、熱がおさまりました。元気がもどった私を見ると、よっちゃんはほっとしたような、安心したような、この世のものとは思えないやさしい目をこちらに向けてきました。

治ってよかったね。

元気になってくれてうれしいよ。

そのとたん、私の心の上皿てんびんが大きな音を立てて、「好き」の方にかたむきました。

心配してくれてありがとう！

おかげで、すっかり元気になったよ！

とってもうれしい！

よっちゃんのこと、大好きだよ！

これからもずっと、ずーっと、元気で、長生きしてね！

私は、言葉で表せないほどうれしくなりました。今まで、なかなか素直になれなかったけれど、今、素直になれた。心のバリアが、あやとりの糸をほどいていくように、とけていきます。私は、よっちゃんの笑顔を思いうかべました。とてもやさしい、花のようせいみたいな笑顔。その笑顔をみると、だれもがいっしょに笑いたくなります。私はそこで、あることわざを思いうかべました。

「笑う門には福来る」

うん。これがぴったり。よっちゃんには、このことわざが一番似合っている！

いつも笑顔で、こんなにすてきな人に私はめぐまれているんだなと改めて思いました。これからも、よっちゃんと楽しく、そして、笑顔で過ごせそうです。

こんなことがあって、今ではよっちゃんと楽しく、毎日を過ごせています。思い返してみると、オセロのように、例えば一つ楽しいことがあって、そのあと、ブラックな日々が続いていたとします。けれど、また何か、良いことがあると、ブラックな日々を楽しいことがはさむことになるので、今までのブラックな部分が、全てハッピー（白）に変わります。それもこれも全て、よっちゃんのおかげです。

よっちゃんは、私にとって、とっても大切で、良い人で、血のつながっているという関係です。

今回のような、いわゆる「心のぼうけん」があったからこそ、おたがい、仲を深め合えたのかなと思いました。

これからは、まだよっちゃんに慣れていない弟にも、よっちゃんに仲良くなってもらって、もっと食事のふんいきを良くしたり、よっちゃんと、いろいろなことをしゃべったりしたいです。

よっちゃん、ありがとう。
よっちゃんのおかげで、
私は変わることができた。
これからも、この先も、いつまでも、ずーっと、よろしくね！
大好きだよ！

こうして私は、よっちゃんとうちとけることができました。よっちゃんには、本当に感謝の気持ちで、いっぱいです。
今、とっても気分がいいです。
今回、この「心のぼうけん」で学んだこと、大切だと思ったことは、絶対にこれから生きていく上で役に立ちます。
よっちゃんには、お礼したいことが山のようにあります。
本当に最後の一言。　言わせてください。

よっちゃん、ありがとう！

小学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

災害後の人の「心の輪」の再構築について

朝倉市立杷木小学校　六年
中川　瑞祥

私の住む朝倉市杷木町松末地区は、二〇一七年七月五日、九州北部豪雨に襲われ、あたり一面に広がっていた豊かな自然や、秋になると金色の穂を実らせていて田園、そして絶対に破壊されてはならない人々の「心の輪」まで破壊されてしまったのです。

私は二歳の時、両親の都合で杷木町に引っ越してきました。ですから、私は松末地区の豊かな自然に抱かれて育ってきたのです。だからこそ、松末地区皆さんの「心の輪」は、私にとって非常に温かいもので、幼い私を、地域ぐるみで育ててくれました。

私は、この頃、強く思うことがあります。人の「心の輪」とは、何なのかを。そして、その答えは、人々の「心の輪」は、松末地区に生まれ育った人々が、郷土を愛し、郷土を誇りに思う気持ちを、延々と受け継いできたものではないのか。それは、松末に人が住む限り、絶対に壊れないものなのではないかと。

ですが、私は、いつも現実から、その答えを否定されます。なぜなら、その「心の輪」がたった一回の豪雨災害によって、見るも無残に打ち壊されてしまったのです。それも破壊された輪は、松末地区だけではなく、杷木町、そして朝倉市と、水面に生じた波紋のように広がり、そして災害から六年たった今なお、多くの人々に消すことのできない記憶を刻みつけています。

私は、今年で小学校六年生になりました。この六年間、

多くの同級生が学校を後にし、新しい場所に移住していきました。彼らも新しい学校での心配はあったでしょう。でも、残された私たちの心の悲しみもまた、癒されることはありませんでした。

今回、私は災害により、なぜ人口が増えたり減ったりするのか、その理由を地域経済の観点からアプローチしようと考えたのです。

最初に「九州北部豪雨」によってもたらされた被害は、福岡・大分県を合わせた死者は三十五人、行方不明者は両県合わせて六名でした。災害が発生した時点で、すでに四十一人もの大切な命が失われました。彼らが抜けた穴は、誰にも埋めることができません。それこそが人の「心の輪」であり、一度壊れた輪は、修復が難しいという現実を、まざまざと見せつけているのです。そして、一度壊れた人の「心の輪」は、その求心力を失い、外側へと引っ張られ、その輪が大きければ大きいほど、遠心力は強くなり、破損部分が大きくなっていきます。そこには、崩壊した故郷を見るに忍びない愛着心と、そして実際に生活ができない現実的困窮、これからの要素が連動して、私たちをより外側へと引っ張っていきました。

災害前、私の家の二階からは、ビニールハウスや田圃が広がっており、ホタルや赤トンボが飛び交い、カエルやスズムシの声の大合唱が聞こえる、自然豊かな地域でした。

ですが、現在はどうでしょう。今年の四月に赤谷川の河川工事が終わりましたが、ビニールハウスはおろか、田圃すらありません。ホタルは数匹みかけましたが、カエルの鳴き声は聞くことができませんでした。多くの人々が、農業をあきらめ、他の生活手段を模索し、転居していったのでしょう。または、高齢の農業従事者が多かったため、転居せずとも、生活の再建をあきらめたのかもしれません。

このことから疑問に思うことは、災害が発生した場合、「心の輪」は経済的にも壊される、言葉を代えれば後天的な要因だと言えます。

では、実際に人口が、増えたり減ったりしたら、「そ

の地域の経済力は、どのように変化するのか」、との疑問を提示しました。そして、私は「人口が減るとその地域の経済力は、衰え続ける一方だ」との仮説を立てました。

まず、ハードウェア面から考えてみます。

住居が泥流につかり、居住が不可能となったことにより、転居せざるを得なくなった場合です。

この場合、従業員が減少することにより、残った従業員の負担が多くなり、業務縮小を迫られることになります。もちろん、募集して従業員を増やすこともできます。ですが、新規労働者と熟練労働者では作業効率が異なり、すぐに生産力の再興は難しいでしょう。

その結果、企業から支払われる地方税が減少し、国税から復興費用は支払われますが、窮迫している地方公共団体の地方税をますます逼迫させ、災害により損壊した道路や建物の復興が遅れてしまいます。

次に、ソフトウェア面から考えてみます。

現在の松末地区でもそうですが、水害の被害にあった地区では、それぞれの近所同士の繋がりが、これまで以上に強くなっていることを、肌身で感じています。

この背景として、災害を共にのりきり、そして復興しようとする、同調観が生じたためと思われます。ですから、地域の有力者が方向性を提示し、それに従うという同調的圧力も働くことで、息苦しく思うこともあります。

もちろん、地域住民全員の意思統一は、復興のために必要ではありますが、同じ松末地区でも、災害の被害状況には大小の差があり、全てが同じ温度ではなく、そこには温度差があることも事実なのです。

このように、被災地に住んでいた人々の間でも温度差があるならば、被災後に転居してきた人々との間の温度差は被災前から住んでいた人々との温度差は比べものにならないほど大きいことは、自明の理でしょう。

それでなくても、田舎の人々は、転居してきた人々を「余所者」として警戒する風潮があります。実際、両親の話によると、転居した私たちが地区に同化したなと思えたのは、二〇一七年七月の水害からで、それまでは腫

物に触るような扱いだったとのことです。

このときほど、人の「心の輪」が、悪い影響を与えることはないと思います。新しい住民を寄せ付けまいとする、古くから住む人々の連帯感が作用したからでしょう。

私は、この地域の連帯感を「近所づきあいの壁」と考えています。良くいえば、地域の伝統文化（風習など）を守る強い要素となりますが、現代のように、インターネット環境が張り巡らされた世界のなかで、地域のみに固執することは、新しい外部の風を阻害すると同時に、地域の発展性を失うことにもなりかねません。

この外部からの風を阻害し、嫌悪している限り、地域住民たちが得られるものは何もなく、地域の経済力を衰えさせる、より確かなものだと考えています。

今回、私は本稿を検討するうえで参考にした、苅谷剛彦氏の「地元の文化力―地域の未来の作り方―」では、次のように述べられています。

「そもそも異なる文化的背景を持つ二つの地域のあいだには、複雑な感情が横たわっていることも多い。自分たちが長年培ってきた文化には絶対的な自信や誇りがある。その一方で、お隣で努力や工夫を積み重ねる地域に対しては、心の奥底で羨望（せんぼう）や焦りを感じることもあれば、率直な敬意を感じることもある」

また、「ただひとついえるのは、過去のしがらみにとらわれることもない若者などにとってみれば、対照的で個性的な異なる文化を往復し、同時に享受できるのは、地域に暮らすことの大きな魅力になるということだ」とも記されていました。

だからこそ、私は災害による地域経済の衰退は、自然災害のみならず、人間的要素も関係していると考えたのです。

では、地域的経済の衰退は、大人のみならず、児童や幼児などの災害弱者にまで及びます。これは、私が通っている朝倉市立杷木小学校の転入学数から、見ることができます。

今回、私は草場校長先生の了承の下、私が一年生の時分から現在までの転入学数を教えていただきました。ち

なみに、私は四校を統合した杷木小学校の一期生で、旧杷木町全体を含んでおり、松末地区のみに限定したものではありません。

また、今回の数値は、九州北部豪雨の翌年に小学校に入学したので、二〇一八年からの転居戸数と児童数になります。全て年度末の数字で、二〇二三年度のみ十一月の数字です。

年度	全生徒	戸数	転入（戸）	転出（戸）
十八	二五四	一八一	二（二）	六（五）
十九	二四四	一八二	三（三）	二（一）
二〇	二二八	一六九	二（一）	四（一）
二一	二〇九	一五四	二（二）	五（一）
二二	二〇八	一五〇	二（一）	二（一）
二三	二〇一	一四七	一（一）	四（四）

このように、六年間で転入した戸数は一〇戸、転入生は十二人。転出した戸数は一三戸、転出生は二十三人。合計、転入出戸数はマイナス三、転入出人数はマイナス十一人となる。

ちなみに、二〇一八年から二〇二二年までの卒業生と新入生の数を提示したい。

年度	卒業生	新入生	人数差（人）
一八	四二	三六	－六
一九	五一	三四	－一七
二〇	五二	三四	－一八
二一	三四	三八	＋四
二二	三八	三四	－四
二三	三〇		

この表から見ると、マイナス四十一人と、全校児童の減少は、歯止めがかかっていないことがわかります。これは、何を意味してるのでしょうか。

杷木町の過疎化が進展している。その結果、卒業生より新入生が少ないことは、説明するまでもありません。二〇一八年から二〇二二年までの卒業生は計二一七人、新入生は一七六人と、四十一人も減少しています。とくに、二〇二〇年度の五十二人を最高に、翌年から卒業生は三十四人と激減しています。逆に、新入生は三十人台

と、大きな変動はありません。来年度の入学生は解(わか)りませんが、三十人台だと思われますので、もしかしたら、私たち卒業生より、若干名多いかもしれません。

ですが、問題は転出生の多さです。

豪雨災害から六年の年月が経過しましたが、転出生は転入生の約二倍と多く、いまだに転出生の数に歯止めがかかっておりません。

この場合、小学生が自ら望んで転校することは考えられず、ほぼ全てが保護者の都合で転校したものと思われます。したがって、小学生の転校は、保護者の生活基盤にかかっています。

既述しましたが、私が住む松末地区は、豪雨災害により農就労をあきらめ、耕作放棄地が目に見えて増加しています。

また、近所にあった醤油や味噌を生産、販売していた個人商店や、酢を生産し販売していたレストランも撤退するなど、経済的損失は計り知れない情況になっています。

たとえば、私は大根やキュウリの酢漬けが好きで、よく両親と御酢屋さんに行っていました。店員さんとは顔見知りで、いつもレストランで提供していた野菜の酢漬けや、御酢のジュースを試飲し、感想を聞かれていました。そして、そのレストランは、いつも予約が満席で、店員さんは忙しそうに動きまわっており、活気があったのです。駐車場には、県外ナンバーの車が停まっており、遠くは愛知や長野、東北地方の県名までありました。また、数回しか見かけてはいませんが、外国人の御客さんもいたことを覚えております。

ですが、その御酢屋さんも、今年の八月一杯で店舗を閉店し、今は建物だけが残っています。人気はなく、明かりもついておらず、真夜中になれば、月明かりしかない寂しい場所です。

そして、このような人気のない住居や建物が、松末地区には数多くあるのです。否、松末地区だけではなく、杷木町全体が同じような情況と言えるでしょう。

洪水災害前から、杷木町の主要産業は、柿やブドウな

どのフルーツ生産が中心でした。それらの木が洪水で流されるか、損傷を受けてしまいました。樹木は、果実をつけるのに時間がかかります。「桃栗三年、柿八年」とは良く言ったもので、出荷できるまでには数年の年月が必要なのです。

でも、生活は待ってくれません。とくに、二〇二〇年に新型コロナが蔓延(まんえん)していこう、空気感染によるコロナ罹患者の拡大を警戒して、多くの飲食店に時短営業や消毒などのコンプライアンスがかけられました。また、消費者もコロナ感染を警戒して、自宅で過ごす日々が多くなり、フルーツはもちろん、飲食店も大きな損害をこうむったことは、記憶に新しいと思います。

ようするに、杷木町は、二〇一七年に降雨災害を、二〇二〇年から二〇二三年にかけては新型コロナ災害と、二度にわたる天災を蒙(こうむ)り、そのダメージからの回復が間に合っていないのです。

だからこそ、保護者の方々は家族を守るため、より生活のしやすい場所へ、また家族の生命や財産を守るため、杷木町から他所の場所へと転出されていくのです。残念ながら、子供は保護者についていくしかなく、転校を余儀なくされてしまいます。

ですが、私には、納得できないことがあります。三十代、四十代の働きざかりの現役世代と、二十年後、三十年後の未来を担う若年層が転出し、高齢者のみが地域に残った場合、どのような結果がもたらされるかを、考えているのかということです。

これは、転出されていった方々に言っているのではありません。ましてや、地元に残られている方々でもありません。また、地域の復興に尽力されてきた市役所の方々に言っているわけでもありません。ただただ自問自答するだけです。しかし、私が考えても今の私では答えを見つけることができませんでした。

このように、九州北部豪雨により大きな被害をうけた朝倉市杷木町は、経済能力が低下の道をたどっているということです。それは、他の過疎地域の低下とは異なり、急激な下降線をたどっているということです。

私が思うに、いくら町の景観が災害前の姿に戻り、豊かな自然が復元しても、本当の町の再興とはいえないのではないでしょうか。

私が考える一番大切な復興とは、本稿冒頭に書いたように、人々の「心の輪」が復活したときでしょう。しかし、人々の「心の輪」が回復するためには、長い年月が必要です。

よく、「時間が傷を治癒してくれる」と聞きます。たしかに、時間は必要です。ですが、ただ時間に身を任せていなければいけないだけでは、とても残酷な事だと思えてなりません。逆に、「人事を尽くして天命を待つ」との成語もありますように、時間だけではなく、私たちも努力する必要があるでしょう。

私の両親が経験したように、他所の地域から転入してきた人々を排除するのではなく、彼らの意見を聞いて、他所の地域の長所を積極的に取り入れ、そして地域が守ってきた伝統文化を融合させつつ、新しい地域づくりをすべきではないでしょうか。

もちろん、近所付き合いの難しさは、学校の人間関係の難しさからも理解できます。しかし、学校では他人の意見を尊重し、理解することで、人間関係は改善することを学んできました。近所付き合いも同じです。その地域の魅力や長所を、転入されてきた人々が補い助け合うことで、地域の柔軟さが向上します。そして、その地域の魅力や長所が、近所付き合いの困難さに勝っていれば、多くの人々が、その地域の魅力に惹(ひ)かれ、移住してくるのではないでしょうか。

そのためには、地域の魅力をどんどん発信する必要があります。たとえば、ＳＮＳなどのＩＴを使うことです。

私たち小学生は、学校の授業でタブレットなどを使って授業しています。その一環として、私たちが杷木町の観光紹介をするホームページを開設し、同年代の小学生と交流することを考えてみました。そうすれば、大人の目線だけではなく、子供しか気づけない杷木町の魅力が発信でき、またＩＴ教育の増進にも繋がります。

私たち小学生は、保護者や先生、大人の意見に左右さ

れ、考えや思いを否定されることがあります。その結果、視野が狭くなり、自身の保護者や大人たちの意見と異なる児童をバカにし、排除することがあります。それは、悲しいことだと思えてなりません。

世の中は広いです。私は、この世のなかに、「死は平等に訪れる」以外に、正しい答えはないと考えています。ニュースを見ていても、毎日のように新しい事柄（事件など）が報道されています。全ての価値観が、毎日のように更新されているのです。今日、私は百の知識を持っていたとしても、明日には私の知識は三十になっているかも知れないのです。そのような現実世界の流れのなかで、従来の文化や慣習に固執し、新しい流れや風潮を他所事として排除することは、非常に愚かなことではないでしょうか。

多くの人材の流出、そして過疎化の進展、これこそが大きな経済的損失であり、復興を妨げる最大の要因でしょう。これを防ぐには、生活基盤としての産業復興はもちろんですが、それ以上に人の「心の輪」を再構築、それも余所者と排除することなく、どんどん「輪」を拡大することを前提に、再構築することだと思います。

最後に、私の考える「心の輪」づくりを書かせていただきます。

私が在籍する小学校の草場校長先生は、よく「いいかげんは、良いかげん」と言われます。これは、近所付き合いでもよく活かすことのできる名言だと思います。近からず、遠からず、自分と相手のちょうど良い位置関係を築きあげるコツではないでしょうか。

けれども、これが難しいのです。やはり、自分と感覚の合わない、生理的に受けつけない人がいるからです。私のような子供でもそうあるならば、大人の世界になるとなおさらでしょう。

ですから、私は毎日、自分から大声で挨拶することを心がけています。それは、顔見知りも知らない人でも同様です。挨拶を続けていけば、いつか必ず自分だけではなく、相手も心を開いてくれて「ああ、ほんとうはとってもいい人なんだな」と思える日がくるはずだからです。

なぜ、それが言えるかと言いますと、私は知らない人に会ったら、まず自分から「こんにちは」と挨拶をします。そうすれば相手もにっこり笑って、「こんにちは」と挨拶を返してくれるからです。ですから、私は常に自分から挨拶することを心がけています。もちろん、私が挨拶をしても、返してくれない人もいます。そういう時、私は、よく悲しい気持ちになります。だからこそ、私が相手から先に挨拶をされた場合は、絶対に挨拶を返しています。

これを半年間続けてきました。なぜなら、私は現在小学校に通っておらず、父の職場についていっているからです。父の職場で、私は一人で勉強しておりますが、父の同僚の方々は私をみると、関係者ではないのに、笑いながら、丁寧に挨拶をしてくれます。顔色が悪いと、本当に心配してくれます。また、私の元気のよい挨拶の声が、一日の元気を出させてくれるとも言ってくれます。私は、小学校で築けなかった人の「心の輪」を、父の職場で見つけることができました。

だからこそ、私は人の「心の輪」は、世代を越えて築くことが可能であり、年代や性別関係なく、共通理解で築くことが可能なのだと考えているのです。

小学生の部
選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

だから、反抗期なんだってば

西武学園文理小学校　六年
川口　颯

「もう起きなー！バス、行っちゃうよ！」
お母さんの声でぼくの一日が始まる。　なぜだろう。低学年の頃は「はーい！今、下行くね」と素直に答えていたはずなのに。六年生になった今は「うるさっ……毎日毎日同じこと言うなよ。言わなくてもわかってるんだよ。そんなこと！」と思ってしまう。その気持ちはもちろん顔面にハッキリと出てしまっているのだろう。「出てしまっている」というよりは意識して「出している」部分もあるかもしれない。

そんなぼくの顔を見たからか、それともお見通しなのか、「毎日毎日同じことを言わせんじゃないよ！何度言ったらわかるの！一度で起きなさいよ！こっちだって忙しいんだよ!!」お母さんの声もどんどん荒くなる。さわやかな朝の始まりなんて、小説やドラマの中の出来事。少なくとも最近のぼくには、ほぼ訪れてなんかいない。

「あぁ……。確かに。毎日同じこと言われてるよな。明日は気をつけよう。」とか、「ママも仕事行くのに、バタバタさせて申し訳なかったな。」といった、反省めいた気持ちがないわけではない。けれど、かろうじてわき上がってくるそんな気持ちをお母さんの恐ろしい目つきがものすごい勢いで封じ込めてくる。そして、「はぁ？ゴメンと思ってるのになんだよ。そんなにらんで。眠いんだからしょうがないじゃん。」と開き直った気持ちになる。もちろん、その気持ちは顔に出る。ブスッとした顔のまま、ぼくは送りの車に乗り込む。毎日がそんな

ことのくり返しだ。　駅までの間必要な会話以外しないこともあるし、その時間がお説教タイムとなってしまうことさえある。

どうしてこんなふうになってしまったのだろう。小さい頃に比べて素直ではなくなった。いろいろなことに、いちいち言い訳をしたり無視をしたりしているという自覚はある。お母さんからの言いつけに「はーい」と明るくかわいい返事をしていたのはいつまでだっただろう。洋服だってそうだ。少し前までは、お母さんが選んだものを着ていた。シャンプーだって、用意されているものをただ使っていた。髪型なんて全く気にしたこともなかった。休みの日のスケジュールも言われたとおりにしていた。

しかし、今は違う。　好きな色、カッコいいデザイン、お気に入りの香り、自分のやりたいこと、友達との約束……　あらゆることがらに「自分の意思」がある。これって成長?それとも何?と思ったとき、ある言葉がぼくの頭の中をかけめぐった。

「反抗期」

お母さんが誰かと話していたときに言ってたあの言葉。え?オレ、反抗期?

やっぱり、自分のことは自分で知っておいた方がいい。その方が今後のお母さんとのバトルにおいても有利に働いたりもするんじゃないかな。少しズルい考えも持ちながら「反抗期」とやらを調べてみた。

〈反抗期〉

精神発達の過程で他人の指示に対して拒否、抵抗、反抗的な行動をとることの多い期間のこと。子供から大人へと成長する中で誰もが通るもの。

中間反抗期…五才～十才　身の周りのことを自分で行うようになったり、周りの環境が変化することをきっかけとしてストレスが増え、反抗期が起こること。

第二反抗期…十一才～十七才　反抗期の期間はだいぶ個人差が出てくる。精神的な自立の手がかりを得るとされている中二の頃と定義している。さらに

中学校では先輩後輩といった上下関係など、学校での生活環境などからもストレスを感じ反抗期が起きる。

（ウィキペディアより引用）

第二反抗期は、小学校高学年頃から始まり、自立の心が芽生えて自分で物事を判断しようとするため、周りからの助言や指示を疎ましく思い、態度や行動でそれを示してくるのです。

（ベネッセサイトより引用）

どうやら、ぼくは年齢的に第二反抗期の入り口ぐらいで、「自立」しようと無意識のうちにがんばってしまっているようだ。それが周りの大人たちからは「反抗」ととらえられてしまうのだろう。けれど「子供から大人へと成長する中で誰もが通るもの」という部分には安心した。ぼくの「ムカつく」といった感情は異常ではないらしい。

次にぼくは、おばあちゃんにインタビューをした。反抗期は「誰もが通るもの」であるとすれば、ぼくに毎日、口うるさいことを言ってくるお母さんにも、その時期はあったはずだ。

おばあちゃんはこう言った。

「ママの反抗期ねえ。もちろんあったよ。　中一の頃だったかな。おだやかに注意しても、すごい勢いで言い返してきたり無視したりね。自分の部屋にいる時間も長くなってきたかなあ。おばあちゃんにしかられると部屋にもどって聞こえないように言ってるんだよ。『うるさいんだよ！』とかね。おばあちゃんには全部聞こえちゃってるんだけどね。」

ぼくはニヤケてきた。えらそうにぼくにお説教してくるお母さんにもあったじゃん！反抗期。すると、おばあちゃんは続けて言った。

「でもママは女の子だったからかな。やることはきちんとやってたよ。だから別に心配はしてなかった。あ！お部屋はいつも散らかっていたけどね。」

お？ぼくはますますニヤけてきた。お母さん、片付けが苦手なのは昔からのようだ。ぼくには仕事が忙しいを言

い訳にしているけど、結局、苦手なだけじゃん。お母さんの弱みをにぎったぞ。と思いながらも、なんか納得がいかなかった。「やることはきちんとやっていた」って、反抗期でもいい子じゃないか。

納得いく答えがほしかったぼくはもう一つ聞いた。ぼくのおじさん。　お母さんの弟のこと。

「ああ……あれはひどかったねぇ。」

おばあちゃんは思い出すように話してくれた。

「もちろん、ものすごく言い返してくるし、気に入らないことがあって部屋のかべにパンチして。かべに穴開けたこともあったよ。あれは中二か中三の頃だったかなあ。男の子だから力も強くなっていくし。ご飯も一日に六食ぐらい食べてたんじゃない？かべに穴開けるパワーをためていたのかね。あははは。」

すごいな、おばあちゃん。かべに穴開けられても大きな声で笑ってる。この心の広さをママにも見習ってもらいたいなんて思いながら、このあとに続いていくおばあちゃんのどうでもいい思い出話につきあった。インタビューのお礼代わりだ。

とりあえずわかったことは、みんな反抗期を乗りこえて大人になっているってことだ。人によって多少、時期やそのかたちにちがいはあるけれど、「子供から大人へと成長する中で誰もが通るもの」というのはどうやら本当らしい。

ぼくだって、できることならなるべく素直にしたいけど、なるべく笑顔でいたいけど、どうにもこうにも気分が乗らないこともある。だから、少しはみ出しちゃうぐらいはゆるしてもらいたい。ぼくがウザいとかムカつくとか思ってしまうのは、ぼくばっかりが責められて、言いたいことを言っても全否定される、そんな時だ。このあたりを分かってほしいなと思う。そういえば反抗期は「ストレスで悪化する」とも書いてあった。これはお母さんも知っておくべきじゃないかな。

このあいだ、お母さんが何やら真剣に本を読んでいた。ブックカバーをめくってみると『犯罪心理学者が教える子どもを呪う言葉・救う言葉』というタイトル。高校の

先生をしているお母さんはよく

「本通りにはいかないからねえ。理想と現実は違うからさ。ママレベルになると、この目で判断できるんだから！」

と自まん気に言っている。ところが、今日はこんな本を読んでいる。やっぱママも読むんじゃん。こういう本。と思いながらパラパラとページをめくってみた。目に入ってくる小見出しにぼくはしょうげきを受けた。

「早くしなさい」が先を読む力を破壊する

「何度言ったらわかるの」が自己肯定感を破壊する

「勉強しなさい」が信頼関係を破壊する

ほかにもいくつかあったけれど、これら全ていつもぼくが言われていること。お母さんの口ぐせ。え？え？ちょっと待って。これ、仕事のためじゃなくてオレのために読んでいるのか？最近のぼくの反抗的な態度に悩んでこの本を手にしたのか？

いやいや、ぼくは間違っても犯罪なんて犯さない。そこは心配しなくていい。ただ、今はうるさいことを言わないでほしいだけ。ガミガミ言われると気持ちが混乱しちゃうだけ。たぶん、だだ、それだけ。「うるさいなぁ」と言ってしまうけど、「はぁ？」とか、そっけない態度をとってしまうこともあるけど、でもそれは、よく考えてみると「今、タイミング悪いから、ちょっと待ってて。」ぐらいの意味になるのかもしれない。

「子供から大人へと成長する中で誰もが通るもの」とあったとおり、きっとぼくは子どもから大人に続くトンネルの中を歩き始めたんだと思う。もちろん、まだ出口など見える気配はない。ときには後ろを振り返ってみることもあるだろう。そんなときにはお母さんに甘えたくなったりするかもしれない。そのときは思いっきり甘えさせてもらいたい。いっぱい話を聞いてもらいたいし、いっぱいほめてもらいたい。こう考えると、ただのワガママのようにも思ってしまうけど。それから、そのタイミングが少しでもズレたりしたら、「ウザい」となってしまうのだと思う。そうなると、きっといつもの言い合いやにらみ合いに発展してしまうかも。そんな時にはこ

う伝えてみよう。
「だから、反抗期なんだってば。」
これは、決して言い訳でも逃げでもない。これが今のぼくなんだ。
念のため、ほん訳もしておく。
「このトンネル抜けるまで、もう少し待ってて。」

参考資料
・ウィキペディア
「反抗期」
https://ja.m.wikipedeia.org/wiki/
・ベネッセ教育情報サイト
「反抗期の子どもとの接し方はどうすればいい？」
https://www.benesse.co.jp
『犯罪心理学者が教える子どもを呪う言葉・救う言葉』
出口　保行　ＳＢ新書

中学生の部

大賞

継承 ～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ～

さいたま市立浦和中学校　三年
野田　真秀

一九四五年八月十五日正午、歴史的な終戦があった。曾祖父高田清太郎も戦争に行った。日本では、戦争の記憶の風化が危惧（きぐ）されている。自分も戦争の歴史を学ばなくてはと思い、祖母から送られたビルマ戦の本『渦巻くシッタン　日本海新聞社』『ビルマの名将桜井省三：上條彰氏』『ビルマ・ラムレ島戦記　鳥取二大隊本部：曾祖父と祖母による記録書』曾祖父の日記、当時の新聞記事などをもとに曾祖父の生い立ちやビルマ戦当時の動きを曾祖父の経験をもとに再現し、戦争の恐怖と平和の大切さについて考えていこうと思う。

一九四〇年代前半、ミャンマーはビルマと呼ばれていた。そこは、イギリス領ビルマとして軍事力によって支配されていた。アウンサンウーなどを中心としてイギリスの支配に対抗する勢力ができたのは、日本が南方進出をしたころだった。作中の人物は史実厳守のため実名を使っている。単位は、センチメートルは「糎」、メートルは「米」、キロメートルは「粁」として扱う。

生い立ち

私の曾祖父は鳥取県八頭郡の出身であった。彼が生まれたのは大正七年で、ちょうどスペイン風邪の真っただ中であった。彼の母親は地主の娘で、父親は婿養子として高田家に入った。曾祖父が生まれた十二月、母親は流行り病のスペイン風邪で亡くなり、周囲の人たちは、その赤ん坊（曾祖父）を「つぶそう」、つまり殺してしま

おうと話し合っていた。母親のいない赤ん坊は、育つことができない、可哀そうだから殺してしまおうとのことであった。しかし、彼の祖母は、曾祖父を育て上げることを決心した。当時は母乳の代わりなどなく、米をすりつぶし、かなりの時間をかけて粥にして食べさせた。こうして何とか祖母が育てる中、父親は高田家の財産（山や田んぼ）を当てにし、一向に出ていかず、新しく妻を娶り、高田家に居座っていた。曾祖父の父親は、後妻の間に生まれた子供たちを大事に可愛がり、逆に曾祖父のことは嫌い、きつく当たった。そのため曾祖父は、5歳頃から朝早く山仕事をさせられ、食事の際は、彼の祖母と彼だけ、部屋の隅へ追いやられ、父親たちの食卓とは別であった。身体を酷使し、栄養状態も悪かったせいか、身長は百六十糎を少し超えるくらいのものだった。

しかし、身体は高齢になってもなお、頑強で腕も強く私の叔父（野球をしていたので腕が強かった）が両腕で腕相撲を挑んでも利き腕でない左片方の腕だけでやすやすと勝ってしまうほどであった。（当時曾祖父八〇代）

徴　兵

昭和十八年（一九四三年）私の曾祖父が二十六歳の時に軍司令部により、召集令状を受け取った。彼自身二十二歳の時に徴兵検査を受けたものの当時の徴兵検査の基準（身長百六十二糎だと考えられる）に少し足りなかった。当時の徴兵検査では、上から甲・乙・丙・丁の四段階に分かれているが、彼は第一乙（乙種の一番上）として内地（日本の本州）で出兵の待機をすることになった。しかし当時、日本は東南アジアのさらに南に対して進出しようと試みたが、アメリカ・イギリス軍により敗退、全滅が相次ぎ、戦況は苦しくなっていった。彼は四月三日に部隊編成式を終える。その時の部隊は『鳥取四七部隊』だった。私の祖母によると彼は鳥取砂丘で訓練をし、休憩がてら砂丘に面している海に行って泳いだりしていたそうだ。

ビルマへ

四月六日～十二日の訓練を終え、四月十七日に門司港（福岡県：北九州市）を出港した。同月二十三日には上

海に上陸し、六月一日には陸軍歩兵一等兵の階級証を受け取った。七月一九日に上海を出発し、同月三十日にサイゴン（ベトナム：ホーチミン市）に上陸した。そこには百人が乗れたであろう船五・六隻が真っ逆さまに転覆していた。そこに乗っているはずだった日本兵は誰一人いなかった。フカ（サメの一種）に喰われたようだった。

八月二日にサイゴンを出発し、シンガポールに向かい、そこで八百人くらいが乗れる船に乗り換えてビルマに向かった。その道中は過酷だったらしい。船内には、兵士・兵士・兵士、さらには兵器、そして馬（当時物資の輸送に必要だったと考えられる）も同乗していた。一畳（約一八二糎×九一糎）に人三人が同乗し、寝ころぶことなどできなかった。もちろんそのような環境下では、食事もろくにできず、ずっと船酔いに苦しめられてきた。（ただし、島に寄港した時は元気を取り戻し、食欲もわいてきたそうだった）曾祖父は、船員と仲良くなり、よく梅干しをもらっていたそうだ。梅干を食べると船酔いが収まるようだった。（梅干は乗り物酔いに効くようだ）

九月十一日にラングーン（ミャンマーの旧都ヤンゴンの旧称）に到着し、同月十九日にラングーンからプローム（ミャンマー中部の都市）の前進基地に第二大隊本部の五・六・七中隊が汽車で向かった。その後二大隊本部に所属していた彼もまた、その地へと出発した。

死のアラカン越え

九月二十四日にプローム到着した。そこには数えきれないほどの部隊が大集結していた。（一九四三年に投入されたビルマ方面軍は三十三万人にも及んだ。遠藤美幸氏『ビルマ戦線と憲兵の諜報活動（一九四五年七月）シッタン河突破作戦における石渡憲兵軍曹の証言記録』より）その日、二大隊本部の弾薬班と行李班（こうりはん：物資の輸送相当の部隊）からタンガップ（タウングプ：ミャンマーラムレ島の対岸の地域）に向かうための部隊が選ばれた。弾薬班から高田（曾祖父）と中田が選ばれ、行李班からは三名と松原上等兵、第二機関銃の浜上准尉、中島軍曹と機関銃の兵隊一こ分隊が選ばれた。

九月二十六日にプロームを出発した。そのときの兵隊

は十七～八人だった。翌日には彼の故郷である鳥取の方で大震災が起きたことが無線で知らされた。（九月十日に起きた地震）この地震は、鳥取市内だけでも千を超す死者が出ておりかなり大規模な地震であった。

ところで彼らはタンガップに向かうわけだが、そのためにはアラカン山脈（ミャンマーとバングラディッシュの間を隔てる大山脈）を渡らなければならなかった。アラカン山脈には虎や豹などの危険生物が徘徊（はいかい）していた。その恐ろしさを伝える話にこんなものがある。

トラックに乗ってアラカン山脈を越えている途中、車の故障の為、ある兵長がトラックの下に入って車の調子を直している時、二人の兵隊が車の脇にならんでいたのだが、そのうちの一人がいなくなっていたという。そこで先住民を頼み捜索してもらった所、行方不明になった兵隊の頭だけがアラガン山脈に残っていたのだ。無残にも一人の兵隊は虎に喰われてしまったのだ。

行動をするのは、敵の飛行機に見つからないように夜間であった。そこで彼らは、石油缶を絶えずガンガンたたいて、大きな音を山になりひびかせ、たいまつを手に持ち行動した。この時彼は不気味な暗闇と豹や虎が出没するかもしれない恐怖心で生きた心地がしなかったのだった。

平和で小さな島、ラムレ島

十月五日、近くに住民の家があったので十七・八名はその家でひとまず休ませてもらうことにした。同月九日には、先住民の船頭で七名ずつが乗るくらいの小さな船でベンガル湾（インドとミャンマーの間にある大きな湾）を渡り、ラムレ島（ラムリー島：ミャンマーに面しているベンガル湾北東部の島）に向かった。ラムレ島の広さは瀬戸内にある淡路島ぐらい小さな島で、その中のラムレ街はかなり小さな町で面積は八十平方粁であまり大きくなかった。ところでラムレ島では、第二大隊本部、五中隊、六中隊、七中隊がすでに到着していた。その後ユアテ部落（ラムレ島中央部）に第二大隊本部はおかれた。

十月十八日、ラムレ街に滞在したのち、一日がかりで第二大隊本部に到着した。そこでは、蚊を媒介する感染

症、マラリアが流行(はや)っていた。毎日の猛暑により、ビルマ人の中にもマラリアによって体力が衰えた人が多くいた。もちろん日本兵の中でも流行っていたが、それが原因で死に至った人は少なかったと言われている。身体中に悪寒がはしり、極端に食欲が減退するのがマラリアの特徴だった。また、その時の気温は、三十五度にも上っていたという。しかし、その猛暑の中でも大陸気候のため、風がカラッとしていたのが唯一の救いだったようである。当時のビルマの衛生環境はかなり悪かったと曾祖父は述べていた。家の周りにはハエや蚊がぶんぶん飛び交い、住民の不清潔さは言葉で言い表すことのできないほどだったという。風呂に入らず、鼻汁などは、手でとり、その手を木の肌にこすりつけたりしていた。用便も大人は谷間で済ませるが、子供は、家の床板を一枚はぐり、そこにまたがり用を足していたという。大便の際は竹べらで払い、家の下に落ちた便は犬の餌(えさ)にされていた。入浴は近くの大きな池や川に行って、ランオという素焼きのツボに水を汲(く)み頭からかぶって、身体中の汗や垢を流していた。もちろん曾祖父は、彼らの生活に最初は苦労したそうだが、慣れていき、あまり気にならなくなっていった。なお、曾祖父はもとから免疫力が強かったのかマラリアなどには一切かからなかった。

大隊長の杉岡大尉はビルマ人に対して演説をした。イギリスの支配からビルマを日本が解放したこと、日本人とビルマ人は同じ黄色人種で対等の立場であり、ビルマ人のビルマを守るために協力を頼むとのことだった。ビルマ人たちは、それを聞いて、歓声を上げ、喜んで協力を申し出てくれたらしい。そして、ビルマ人たちのサービス精神でもって日本兵を快く接待してごちそうしてくれたそうだ。

曾祖父は最初ビルマ料理を見た時、気味が悪くて胸がむかついたと述べていた。鶏肉をぶつ切りにして、骨付きのままナッピー（トウガラシや油やエビを蒸して陰干して搗いた調味料）で味付けし、野菜なども一緒に入れて煮込んだ料理を並べられたそうだ。また、ご飯はランオー（取っ手のない鍋、ミャンマー鍋だと考えられる）

で炊き、炊きあがると、皿の上に逆さまにして、ご飯をうつして盛り、それを手づかみで食べるものだった。曾祖父は、見た目に対して不満を感じていたそうだが、戦時中で食料事情が良くなかったため、舌が肥えていなかったためなのかおいしく感じたそうだった。

このように先住民からおもてなしを受けたのち、曾祖父らは、明けても暮れても毎日のように壕を掘り、陣地構築の作業をした。

当時、軍司令部は、ラムレからペヤジー間（ラムレ島の対岸の地区のことだと考えられる）の軍用道路を作ることにした。曾祖父（高田上等兵）は、森木曹長の指揮で中村上等兵。坂田一等兵、中村一等兵、山本上等兵、高橋軍曹とラムレ街からユワテ部落まで二十粁余りの新設道路作業をすることになった。選ばれた六人からさらに三人ずつ二組に分かれ、高田上等兵と山本上等兵、中村上等兵の組と中村一等兵、坂田一等兵、高橋軍曹の組となった。前者の組は、ラムレ街の隣のテンドエイ部落で作業し、残りの組は、テンドエイ部落からユワテ方面に向かって八粁程離れた部落で作業することになった。

将校当番と平和

曾祖父が新設道路作業を開始してから三か月程たった頃、内地から斉木軍医大尉が派遣された。道路作業に従事していた曾祖父は、いきなりユアテ部落にある第二大隊本部に帰るように命ぜられた。斉木軍医大尉の将校当番（将校の補佐役）として使えるように命令が下ったということだった。

曾祖父は、これを「思いがけない幸運」「最高の栄誉」とつづっている。

曾祖父は、骨身を惜しまず前向きでの姿勢で仕えたそうだ。その結果彼はかなり目をかけてかわいがってもらったそうだ。斉木大尉は派遣されて間もなく少佐に昇進された。歳は曾祖父の一・二歳年上で、剣道と囲碁の達人でとても頭のきれる風格のある人だったという。体格は小柄で曾祖父は自分よりも心持が強く感じたそうだった。軍医少佐の秀でた才能と他に類を見ない豪快さに曾祖父は感心していたそうだ。そして彼を尊敬し、信頼し

たのだった。戦争の渦中も常にそばで仕え、苦楽を共にしたそうだ。

ちょうどそのころ大隊長の杉岡大尉が内地に戻り、後任として猪股少佐が大隊長として着任した。その猪股少佐から新設道路作業の出来について曾祖父のいる組だけが称賛され、賞詞を頂いたそうだった。

そして曾祖父は、毎日毎日当番兵として食事の運搬と斉木少佐の身の回りの掃除と洗濯等をしてきたそうだった。それをみていた斉木少佐の心遣いで、地元のビルマ人の使用許可が出て、曾祖父はビルマ人に報酬（給料）を与えて洗濯などをしてもらうことにしたそうだった。ビルマ人は、喜んで仕事をよくしてくれたそうだった。

斉木少佐は来客があると会食のお膳をとって食事をしていた。そして会食の膳はいつも一人余分にとってくるように命じ、その分は将校当番として忠実に仕えている曾祖父への配慮だったそうである。また、斉木少佐は医者なのでビルマ人の病気の治療に励み、そのお礼としてビルマ人から多くの品物をもらったという。少佐はそうした品物の一部を曾祖父にも分けてくれたそうだった。

これらのことからいかに彼が将校当番として一生懸命働いていたのかが分かる。普通将校当番は、三か月を目安に交代され、最悪の場合、なってすぐに外されることもあった。その中曾祖父は、一年以上斉木少佐のもとで将校当番を続けることができていた。また、大隊長の猪股少佐から斉木少佐に曾祖父を当番兵として入れてほしいと依頼があったそうだがそれを斉木少佐は断ったそうだった。大隊長や高級軍医から嘱望され、ほかの兵士（杉軍曹、米原軍曹など）からもかなり評価されていたそうだった。そのような働きぶりは、幼いころからの苦労がもとになっているのではないのかと祖母は話していた。

戦闘、地獄の始まり

昭和二十年（一九四五）一月二十一日午前十一時三十分。ビルマ国ラムレ島キャクピュー海岸（チャウピュー海岸：ラムレ島北東端の海岸・日本は当時、岩寺西方海岸と呼んでいた）に敵が上陸してきた。その時にラムレ島を包囲したのは七十一・三十六旅団、英印二十六師団

であり、そのうち三十六旅団と二十六師団は戦艦、砲艦、巡洋艦、輸送船など三十隻で上陸を展開した。ラムレ守備隊は敵の部隊におされて後退をやむ得なくされた。一方イギリス、インド軍はチャウピュー（岩寺）を拠点にして進軍を開始した。制空・制海権はすでに奪われ、敵の戦闘機は空から、戦艦は海上から絶えず砲弾を浴びせていく。生きた心地がしなかった。

斉木少佐は軍医なので、第一線で戦闘している兵士の応急手当や治療に当たった。曾祖父も斉木少佐の補佐役として動き、働いた。

衛生兵は戦闘救護班として担架で次々と運ばれてくる負傷兵の応急手当のため、壕を掘って壕の中から出たり入ったりして治療をしていた。しかし、砲弾を潜り抜けての治療のため、負傷兵は無残にも負傷した上にまた負傷し、二か所、三か所と治療を要するものが続出しだした。さらに、負傷兵の治療に携わる衛生兵も同じように負傷兵を運んでいる過程で負傷しだした。治療中の負傷兵の中で足の動かせるものは自力で壕に飛び込むが、担架の上で動けない兵士は負傷に負傷を重ね、治療をする衛生兵も大忙しで、手の付けられないほどだった。

このような厳しい戦争を目の当たりにしていると、気の弱い兵士の中には半狂乱のようになった者もいた。二宮大尉は及川隊に行くように命令を受けると、恐怖心から気が狂ったかのようにわめき散らして走り出して行方不明となったという。（ここで出てきた及川隊はイギリス軍上陸の時最前線にいた部隊である）

イギリス軍絶対優勢のなか、日本軍は苦戦していた。第二大隊本部はユワテ部落にあったが、そこでは危険とのことで、五〇九高地（ラムレ島南東部にある少し標高が高い地域）に撤退した。その後、猪股大隊長は無線で各中隊にそこに集結するよう命令し、集結には十日くらいかかった。この高地から見ると海上に多数の敵艦がラムレ島を包囲しているのが見えた。

二月三日、ついに大隊本部は五〇九高地の複郭陣地（臨時要塞）に撤退することになった。

玉砕から撤退へ

二月九日、大隊長猪股少佐は意を決し玉砕をするために連隊長、部隊長、師団長宛に以下の電文をおくりだした。

『ラムレ島守備隊は本二月九日正子を期し全面の敵に総攻撃を敢行し玉砕せんとす。余のいたらざるため陛下の軍隊に多数の犠牲を出し不忠このうえなし山陰健児克く闘い意気益々、軒昂喜んでビルマ全軍の儀表となり御馬前で有終の美を発揮せん。師団長閣下並に部隊長殿の武運長久を祈り最後に部下の功績よろしく願う。大隊長猪股少佐』

連隊本部はこれを受け取るとすぐに返電を打った。

『玉砕待て。二月十一日早朝、民船三十隻和田軍曹の指揮により貴地に到着するお得出発させる。同船に乗り撤退されよ。』

これを受けとった猪股大隊長は

『退路洋上に敵艦船の往来はげしく撤退困難、時期の如く目的を決行せんとす。』

と再度返電した。玉砕しかなかった。

大隊も戦況不利の場合を考慮し、複郭陣地付近水路の要所、要所には民船を徴発して確保していたが、すでに敵の飛行機に察知され、船底には機銃掃射による弾痕が多く使用不能のものが大部分で、使用可能のものは一部に過ぎなかった。負傷者は五十名に及んでいた。

そうした中、軍司令部にいた師団長宮崎閣下（宮崎繁三郎中将）からある電報が届いた。

『緒戦以来絶対優勢なる敵に対し長期克く戦いに圧倒的損害を興え赫々たる武勲を立て、ビルマ全軍の儀表として匪躬の節を尽くせしラムレ島守備隊を最後に到り斯の如き不況に追い込ませたるは小官の徳の足らざる衷心より謝す。人は二十年経たねば役立たず、軽挙を慎み玉砕を思いとどまるべし。二月十九日正子レイダン水路に友軍飛行機一ヶ戦隊派遣、退路の敵軍艦を爆撃せしむ。よって武器を隠匿し飛行機の掩護に膚接し裸一貫にて本土に帰還すべし。尚本土には収容隊を派遣す。師団長』

つまり、兵士は大切だから総攻撃で失うのは惜しく、だからこそ裸一貫になってでも本土に帰って来いという

ことである。師団長直々の為従わねばならない。だが、海から艦砲射撃、空から空爆、陸には敵兵と、もはや日本軍は袋のネズミ状態で危機的な状況にあった。

二月十一日、和田軍曹率いる救助の船が四時ごろラムレ島へ到着した。猪股少佐はこの船に患者をのせて先に救出させようと考えた。一隻の乗員が五名ないし六名の小さな小舟十数隻が、敵艦船に見つからないよう夜に出発した。

出発した船は。何とか島を見つけることができた。そしてそこに近づいてみると一斉射撃を受けて瞬く間に船が沈んでしまった。武器を持たない患者は敵の前に手も足も出なかった。実は、イギリス軍は和田軍曹の救助の船がラムレ島に向かっていることをすでに知っていた。そのため、砲艦を偽装して待ち伏せし、船が近づいてきたら一気に沈めようとしたのである。和田軍曹は、何とか片腕だけになりながら力泳し、マングローブにつかまりやっと帰って敵襲の状況を報告した。船に乗っていた患者は無残にも全滅した。

二月十二日、ラムレ島の猪股大隊の全員はビルマ本土へ向けて転身せよとの命令が下った。日本軍の秘密兵器の防毒面は土の中に埋めて処分した。

斉木少佐は曾祖父に対して、

「この島を脱出して逃げるのは神業だ。ここまで包囲されてしまったら、助かるのはかなり難しい。ところで高田、お前は泳ぐことができるか。」

と聞いた。曾祖父は鳥取県の山奥にいたので、泳げないかもしれないと思ったらしい。しかし。曾祖父は人並に泳ぐことができる自信があった。そして

「まあ少し泳げます。」

と答えたそうだ。いよいよ今夜タンガップに向かって転進する日の夕方四時頃の事であった。

負　傷

敵の艦砲射撃が絶え間なく降り注いでいる中、壕の中で銃を構える。敵歩兵の来襲に備えねば。艦砲射撃は相変わらずものすごい。その瞬間、右腕がなくなっていることに気付く。砲弾の破片が右腕を飛ばしてしまったの

である。その瞬間、身体中がズーンと重くなる。冷汗が体中をほとばしるように噴き出す。そして体をつたる。しかし、不思議と意識ははっきりしている。斉木少佐が傍に来て板田一等兵に

「高田を早くこの下の谷間で治療をやっている第一野戦病院まで連れて行ってくれ。」

と頼んだ。野戦病院は、ラムレ島の南東にあると考えられている。坂田一等兵に連れられ、山から下りて谷間まで歩いていく途中、気は確かなつもりだ。しかしさすがに頭がふらふらし、目がくらみそうになる。そのため、何度か野戦病院までの間休むことにした。

「お世話になります」

こう言って右腕を左手で支えながら差し出す。その腕は左手で右腕の付け根が黒く色が変わるほど固く握りしめて血が噴き出るのを止めていた。固く握りしめていないと血が流れて生命が危うい。やられたばかりの右腕は骨が飛び出し、腕の皮がブランブランと揺れている。

前川内科医が手術を行うことになった。本来なら外科医が担当なのだが、外科医の武田隊長がほかの任務をしていて手が離せなくなったため、前川少尉が手術をすることになった。手術といっても物資不足の戦場でのことだ、機材も薬剤も十分ではなく、消毒用のアルコールだけがあった。消毒も簡単で手術がはじめられた。麻酔薬もなく、飛び出た骨を切るのはのこぎりで、医者もお門違いの内科医であった。前川内科医は汗をボトボト流しながら、右腕関節上部にのこぎりをかけている。骨は木を切るようなわけにはいかない。傍で足立軍曹という人物が流れ出る血をガーゼでふき取ってくれる。右腕を切られている間中何とも言えないほどつらく長い時間の苦しみが続く。

切断手術が終わったときはさすがに気が遠くなった。右足の脛（すね）にも小さな砲弾の破片が二つ飛び散っていたのでこれも取り除いてもらった。

「お世話になりました」

ふらふらと立ち上がり、その場を離れて奥の方へ歩いて行った。

しばらくすると斉木少佐が山から下りてこられた。そして近づいてきて

「治療はしてもらったか。」

負傷した右手を気遣って言われたのだったので、

「はい。」

と答えた。斉木少佐は

「そうか。担架に乗れるように、手配してやる。」

といわれた。普通足を負傷してない人は担架に乗せられないのだが、これは例外らしい。

遭難、そして悲しみ

夕方七時ごろ、いよいよ、タンガップに転進することになった。負傷した兵は曾祖父を含め十一人いた。一人の患者に対して四名の担架兵がつくので、患者十一名と担架兵四十四名、衛生兵七名の合計六十二名の患者部隊が先頭に立って出発することになった。担架兵は患者を担ぐので、歩兵と比べると足並みが遅れがちになる。そのため、先に歩かせる方が無難だという配慮からだった。また、いざという時、患者を見捨てて逃げ出してもいけないからだった。

出発前、少しでも周りの気配に危険を感じた時には前を歩いている兵隊に対して、背中を軽くたたいて合図するようになっていた。こうして患者部隊の後方には、すぐ後ろに五中隊、六中隊、七中隊の順に続いて行軍することになった。

あたりが真っ暗ですぐ前でも見えないくらいだった。大隊長は周りの気配を気遣い、連絡の合図を送った。七中隊、六中隊、五中隊は歩を止めた。しかしなぜか、五中隊の一番前を歩いている兵士が目の前の患者部隊の衛生兵に合図をしそびれた。患者部隊は後続の部隊があるのだと思い懸命に歩いたが、一時間くらい歩いたときにようやく後続部隊がついてきていないことに気が付いた。なんとも心細く、何とも言えない悲壮な気持ちになった。

いざとなったときの自決用の手榴弾（しゅりゅうだん）を皆、各一、二個持っていた。曾祖父は、右腕を負傷しているため、腹の内では自決する覚悟ができていた。

患者や担架兵は行き先について聞かされておらず、唯一衛生兵の専属兵長の三つ葉さんだけが聞いていたようで、

「五〇九高地から三粁程行ったところに橋があり、右に折れたところで行動を起こす。」

ということだった。そこはペチャという部落だった。担架兵に詳しく内容が知られていなかったのは後ろから部隊がついていくので、その心配がなかったからしい。患者部隊は大隊と離れてしまったため、この先が思いやられた。六十二名もの兵隊が一緒に行動しては目立つし、かなりの危険が伴うので、分散していくことになった。患者を除く五十一名は数名ずつに分かれて患者を引き受けることになった。しかし、戦争の真っただ中、患者は担架兵や衛生兵にとってはかなりの負担であった。自分の命でさえ危ない状態なのだ。可哀そうだが患者は捨てていこうということにした。もちろん曾祖父も右手を負傷した患者のため捨てられることになった。曾祖父はいよいよ覚悟を決めた。中村兵長に対し、

「よしわかった。わしはおそらく助からないだろう。無念だがここで自決するから左手の親指を切り取って本土へ持ち帰ってくれ。」

と頼んだ。これはある意味のかけでもあったと思う。兵長が自分を見捨てるか、それとも自決を恐れて引き取るのか。すると急に兵長は顔色を変えて

「今ここで自決されると敵に居場所を知らせるようなものだ。それはやめてくれ。わしらがここを立ち去ってからにしてくれ。」

というのだ。曾祖父は自決するのをしばらく思いとどまることになった。かけの軍配は助かる方に上がった。

三つ葉兵長が夕方いよいよ出発するとき、曾祖父の所へやってきて

「高井兵長が小舟を見つけてきた。何とかなると思うので高田伍長（曾祖父）も一緒に行きましょう。」

と言ってきた。曾祖父は

「そうか。」

とうなずき、捨てられなくてすんだと思った。担架兵に

とって患者は足手まといだが、捨ててしまって自決され、その煙で敵に見つけられるという危険にさらされてしまう。そのため、曾祖父などの自力で歩ける患者はなるべく連れて行こうということになった。

「高田伍長歩けますか。」

の問いかけに対し、

「よし、歩こう。」

その答えは生に対する思いによる答えだったのかもしれない。十二日の夕方、出発した。

二月十三日、朝方になると歩くことができない患者は田んぼに捨てられてしまった。可哀そうだが、連れていくには危険が伴ってしまう。戦争の渦中のこと、仕方がなかった。夜が明けると、歩くことができない。敵に見つかる危険があるからだ。七人の兵士と一緒に曾祖父は行動をすることになった。

二月十四日、明け方の三時ごろの事だった。右前方三粁くらいの所で機銃掃射の発射音が深夜の静寂を破った。見ると活火山の噴火のように花火が飛び出ていた。後で聞いたことだが、道に迷ったことが幸いなことに敵の作戦に引っかからなかったのであった。

生きるという執念

昼間は危険なので二人、三人と分散して山の中に隠れていた。夜になると、みんなで相談してから行動した。いくつものクリーク（水路）を抜けてベンガル湾の河口にきた。

ベンガル湾の最初の河口が三～五粁程あった。この川はなだらかだったので全員無事に泳いで渡った。しばらく歩いていると、再びクリークに出くわす。ほとんどのクリークは三十～五十米の幅であった。曾祖父は、応急手当のままの状態で海水につかりながら泳いだ。「なんとしてでも生きて帰らなければならない」この一心だった。曾祖父は、生きることへの執念は戦争経験のない現代の若者には考えられないだろうと振り返っている。

負傷した右手の痛みは身に染みる。昼といわず夜といわず水につかる。さらには、日が陰って寒くなっても痛い。しかし曾祖父はそんなことは気にしていられなかっ

た。

クリークを渡っている間はずっと飲まず食わずの毎日だった。潮が引いたときにカニを捕まえて食べた。水が飲みたくてたまらなくなりやむなく海水を飲んだ。そして余計に喉が乾く。ベンガル湾河口のジャングルは満潮になると海水で歩けなくなり、ここにはフカやワニが潜んでいるのを時々目にした。いわばここは危険地帯であった。

いくつものクリークを抜けると、四、五粁もある広い河口にたどり着いた。加藤上等兵、三つ葉兵長、高井兵長の三名が木の板に掴まって最初に河口を渡ることになった。流れはかなり激しく、ごうごうとうなりをあげながら流れている。むこう岸では敵艦が待ち構えていた。最初の三人が川に流れみるみるうちに見えなくなってしまった。

三人は一足先に川を渡り向こう岸へたどり着き、部隊がいたら助けにくるように言うからと言って出発したのだ。また、仲間がいれば煙をあげて合図してやるといっていた。

ベンガル湾の急流に飛び込んだ三人をしばらく待っていたが、この急流の中再びここまで迎えに来ることはおそらく無理だろうと考えた。かりに運よく渡り終えても疲れてしまい帰ってくることは不可能だろうとも思った。曾祖父は、自力で泳がなくてはならなかった。迎えを待たないで河口を渡ることになった。前田上等兵、久保上等兵、高田伍長（曾祖父）の三名は最初の三人と同じようにベンガル湾の河口に飛び込んだ。三人一緒につかまっていた袋は流れる急流に流されてしまい、三人とも別々に流されてしまった。曾祖父は、負傷した右手をかばいながら、背泳ぎをしたり腰で泳いだりしてやっと岸にたどり着いた。ここはある河の河口だった。その河口にはワニやフカがおり、更には敵艦が絶えず見張っていた。彼らが到着していたのは偶然そこに敵艦がいない時だった。一緒に飛び込んだ二人と合流し、負傷している曾祖父が急流を無事に泳いだことに彼らは非常に驚いた。

「もうだめだ、動けない」
といい、岸に横たわったまま動こうともしない二人の兵士をよそに曾祖父は、一人ででもわたる覚悟を決めた。
「じゃあ、一人で渡る」
といい、少しだけ休んで、その日の夜、海を渡ることにした。
一人が浮袋の代わりにするため水筒を持ってきていた。曾祖父は、それを貸してもらい再び海に入った。

脱出成功、そして救出

朝方まで河のヘリを伝って泳いだ。満潮だったのか河の流れはそれほど激しくなかった。朝になってひどく疲れたので岸に上がって寝ころんだ。岸に上がって河を見ていると、流れがいきなり激しくなり、ごうごうとうなりをあげて流れていく。川幅は二百米ほどもあった。恐ろしいほどの勢いだ。
寝ころんで静かに身体を休めた。すると鶏の声を聞いた。岸を少し上ってみるとこの岸は河の中にある岸と違ってかなり堅かった。そしてどんどん歩いていくと堤防があった。そしてその向こうには、荒れ果てた民家が一つ立っている。喉が乾いている。水を探してみたがそれらしいものは全然なかった。ふとあたりを見渡す。そこには水牛の足跡がある。視線を変えると丘があり、そこには数軒の民家がある。そこからは煙が出ている。「友軍がいたら煙で知らせる」、先に飛び込んだ三人の言ったことが脳裏をよぎる。最初の三人は川に飛び込んだ後、ここについたはずだ。
「おおい、おおい」
嬉(うれ)しくて力いっぱい大きな声で叫んだ。煙が消えた。静寂がこの大空を包む。
「官等級氏名をいえ。」
向こうから返事が来る
「二大隊本部高田清太郎伍長。」
と叫ぶ。
「そこで待っておれ、すぐ迎えを出す。」
すぐ手前に三十米くらいの河があり、水深はかなり深そうだ。その川の向こうに民家がある。兵士が民家から出

てきて河岸につないであった小舟で迎えにきてくれた。

ここで日本兵を待ってくれたのは、市場中隊だった。この部隊はラムレ島から脱出した日本兵の救護活動をしていたのだった。

曾祖父は、救援場所まで自力でたどり着いたのだった。しかも利き腕を失い、その右腕は痛々しかった。このようなことができるのは並大抵のことではなかった。市場中隊の兵士も助けられた兵士も曾祖父のことに対してひどく感心していたそうであった。曾祖父は、メイという部落の仏教寺院の兵士を収容しているところで包帯を取り替えてもらった。古い包帯は、約十二日間海水につかりっぱなしだったため、血と海水で濡れていた。

言い表せられない喜び

二月十七日、清太郎は当初ビルマ人の案内で奥津軍医の所に行く予定だったが、敵の砲撃に驚き道案内のビルマ人は曾祖父を見捨ててどっか行ってしまった。

道も場所もわからず、三日間飲まず食わずで山をさまよった挙句、民家についたと思ったら日本軍はもう逃げたと告げられた。生米とバナナをその家の住民からもらってまた真っ暗な夜の道路を歩いていった。明かりが見え、後方からトラックが走ってきた。このトラックは独立自動車五十五大隊だった。曾祖父は、そのトラックに左手で軽くひょいっと飛び乗った。最初は暗闇と左手一本で軽々とトラックに乗り込んだため、運転手の兵士にはわからなかったが、しばらくして曾祖父が右腕を負傷していることに気付くとその頑強さに感心し、トラックをアラカン山脈のメザリという地域にある第四野戦病院に向けて走らせた。車で曾祖父は、口では表せない感情でいっぱいだった。何度も死にそうになり、ビルマ人に見放され、河や海を何度も泳いできた彼にとってこの出来事は単純にうれしいのではなく、文字どおりの九死に一生を得た喜びであった。

病院と悲報

二月二十四日、曾祖父はトラックに届けてもらって第四野戦病院に入ることができた。同じころ、ラムレ島の脱出部隊の分隊長青木曹長などが入院してきた。青木曹

長は、曾祖父が将校当番として斉木少佐に仕えていた時に斉木少佐の囲碁の相手をしていた人だった。そのため、青木曹長と曾祖父は互いに互いのことを覚えていた。

病室は山の中で、天井から床までいたるところにシラミがおり、横になっていても全身がかゆくてたまらなかった。青木曹長が石油缶に曾祖父の着ている衣類を入れて、熱湯消毒してくれたことがあった。

とある兵士が小さなはがきの切れ端のようなものを手渡してくれた。その紙切れには斉木少佐の最後の様子が記されてあった。

斉木少佐は右大腿部に砲弾破片を受け、全治二週間程度の傷を負った。彼は医者なので二週間もあればこの怪我は完治することは知っていたが、敵に包囲されている中、自分の負傷によってほかの兵隊に迷惑をかけてしまう。そこで彼は衛生兵にモルヒネ（過剰投与によっては死に至る麻薬・医療用薬）を打つように命じ、命を絶ったとのことだった。将校当番だった曾祖父の事を死ぬ間際まで心配していたそうだった。彼が亡くなる直前、奥さんの安江子さんと母の名前をよんでさよならと言って亡くなられたそうだった。あまりにも無残である。猪股大隊長も亡くなられた。

一か月ばかり野戦病院で生活したのち、移送されて百七兵站病院に入った。

四月十日、この日を境にして日本軍の不利を察したビルマ軍はイギリス軍に加勢して反乱を起こした。そのため、曾祖父は百七兵站病院から再び第四野戦病院に戻ることになった。

自決山、ペグー山系

五月一日、患者はペグー山系に向かうこととなった。ビルマ全域が敵軍に占領されたため、逃げ場を失った日本軍はペグー山系に入って雨季になるのを待つことになった。患者にとって大変なものであった。特に足がやられた兵士は担架から降ろされ、杖や衛生兵にロープによってひっぱってもらうなどで行軍した。

日本軍がペグー山系に入ると間もなく雨が降り出して本格的な雨季になった。土砂降りの雨が毎日毎日続いた。

毎日が夕立のようであった。このような環境下のため、病人が続出した。食事もひどく、筍（たけのこ）と塩をわずかな食料の粥に混ぜたもので、栄養失調で倒れるものも続出した。浴びるほど雨に打たれ、食料が不足しながら病気にならなかった曾祖父は当時自分でも不思議でたまらなかったらしい。

手足を怪我した兵士はたけのこを掘りに行くことができず、手榴弾を胸に抱いて自決する人が日を重ねるにつれて多くなっていった。

死体の先に渦巻くシッタン

七月二十日、五月のはじめからペグー山系に集結した日本軍は一斉に山系を出発し、シッタン平野（シッタン川とペグー山系の間の地域だと考えられる）に降り立ち、シッタン川（ミャンマー中央部を流れる川）を超えてシッタン高原に向かうこととなった。日本軍が山から下りたことを告げる合図が次から次へと伝わっていった。

前を歩いている人に遅れないようにシッタン平野の田んぼの中を泥の中から足を抜きながら懸命に歩いた。弱った患者は田んぼの中で倒れてしまうが、曾祖父も右手がなく、ほかの人を助ける余裕などなかった。

毎日が地獄であった。昼間は敵機が空を舞い、陸では戦車が走り回る。ふと足が重いことに気が付くと大きなヒルが足に吸い付いて血を吸っていたのだった。空からの雨と泥沼の中の行軍で身体中冷えきっていた。

シッタン平原の途中にクン川という三十米くらいの川を渡ることになった。曾祖父にとっては右腕を負傷していても朝飯前だったがほかの者はそうとは限らず、次々とおぼれていった。病気が流行り、自決の音がする。まさに地獄とはこのことであろう。

七月二十四日、シッタン川の岸辺についた。この河の岸辺には芦が生い茂っているため、それを利用して昼間は敵軍の目からそれで守り、隠れ家としていた。

七月二十六日、シッタン川を渡ることになった。岸辺の近くに竹で作った先住民の民家があった。日本軍は先住民の民家の竹を拝借し、三本程束ねて筏（いかだ）の代わりにしてシッタン川に入ることになった。兵士は二人一組にな

って竹で作ったいかだにつかまり泳いで渡った。曾祖父と上田兵長は一緒に川に飛び込んだが、上田兵長は、おぼれ死んだ日本兵の死体をみてぶっぶつ文句を言いだし怒り出した。それに対して曾祖父は、「つべこべ文句言わずに早く泳いでいかんかい」と怒鳴り散らした。

シッタン川の流れは急だ。目の前に渦を巻いている所があるのだが、筏はそこに向かって猛スピードで突っ込んだ。曾祖父は筏につかまりながら渦巻くシッタン川の中を右に左に筏を操った。筏を上手く操るので、さっきまで文句を言っていた兵長はいきなり元気を取り戻し、身勝手に調子よく曾祖父を誉め讃えた。さっきの弱音はどこに行ったのやら…

何とかシッタン川を突破した曾祖父らは機銃を担いだりしながら行軍した。普通機銃などの重い装備を負傷者は持たないはずだが、曾祖父はかなり元気そうだったので頼まれてしまったのである。それほど彼の身体は頑丈だったのだろう。

行軍をしているとそこに見えるのは日本兵の死体であった。このころの戦争は、イギリス相手ではなく、もはや飢えとの戦いであった。周りでは死体が腐乱し泥沼行軍で踏みつける足跡で水田のようになり、腐乱した死体が行軍していると流れてくるのだった。半分ほど腐りかけた死骸や腐りきった遺骨だけが流れたりした。

それでも日本軍は、イギリス軍とも戦っていた。

八月十四日、まだ日本軍は激戦中だった。

終戦、地獄の終わり

八月十五日、無線でぜんざいを食べさせるから元気で行軍するようにとの連絡が入った。ちょうど疲労でくたくたの兵隊は、やっと食べ物らしきものにありつけると思うと、元気さを取り戻した。山のふもとでは本当に後方部隊が、ぜんざいを作っていた。ほとんど飢餓状態の兵士たちは、ぜんざいを見るや否やがつがつと喜んで食べた。久々に食べ物らしいものにありつけた。この時のぜんざいは、大変おいしかったそうだ。

再び元気を取り戻した日本兵は、行軍を開始した。そこへ敵の飛行機がかなり低く低飛行していた。それにも

かかわらず、砲弾を撃つ様子もない。不思議だなと思っていると、案の定日本は敗戦したということだった。軍司令部からも同様の無線が入った。

ドンという部落に集められた日本兵達は第二大隊本部と鳥取県内の郡別に編成されて集まった。そしてパヤジという部落で、九州部隊、広島部隊、鳥取、岡山、東北方面等全国各地の部隊が一斉に集結した。飛行機が終戦のビラをばらまいた。長い地獄のような戦争は終わったのである。

その後日本軍は降伏軍人としてイギリス軍の捕虜として収容された。昼間は兵舎の清掃や山や川辺の溝さらい等の環境浄化作業をやらされた。夜寝るときはテントが張ってあり、下にはわらが敷かれていた。テントは五十人くらいが入って寝起きできるほどの細長い大きなものだった。食事は、イギリス軍から麦粉がもらえるので自分たちで作って食べた。これが一回分の食事となる。娯楽がないので、各部隊は郷土演芸や芝居、浪花節、踊り等の演技を披露し、殺風景な捕虜生活に楽しみを与えた。

患者や弱っている兵士は休養させてもらうことができた。

二か月間収容所にいたのち、軍司令部より患者は早く日本へ送還せよとの命令がきて、曾祖父はラングーンにあるイギリス軍病院に収容されることになった。日本からの船が来るまで、イギリス軍の病院で待機することになった。病院での生活は起床六時で朝の体操をし、コーヒーや果物を食べ、八時になると朝食でカレーを食べた。昼食前の十時頃にはおやつに、スープや肉が出され、食事の量は食べたいだけ食べられ制限がなかった。卵は毎日一個食べさせてもらった。食事の献立はよくカレーだった。

帰還、悲しみ、結婚

十月九日、有馬丸に乗せられた曾祖父らは長崎県の佐世保港に入港した。二週間の検疫検査が行われ、ようやく日本に帰ることができた。その後、病院でしかるべき手術をし、義手を作ってもらいその傍らブローカーとして大儲けをした。その後故郷である鳥取に戻った。しか

し、曾祖父を大事に育ててくれた祖母は、「ビルマ戦での曾祖父は戦死確実」と婿養子（曾祖父の父）に告げられ、絶望し自殺してしまっていたのだ。一番会いたかった祖母の死。その経緯を知った曾祖父は怒り、悲しみに打たれた。時すでに遅すぎた。

時は過ぎ、曾祖父（三十歳）はお見合いをすることになった。お見合い相手のたつ子（二十四歳）の兄、西尾定一准尉は曾祖父と同じでビルマに出征し、そこで亡くなられた方であった。また、第四野戦病院に入院していた時に衛生兵として曾祖父とかかわりがあった扶持本網三さんは彼女のいとこにあたった。そしてたつ子と曾祖父は結婚した。

戦後まさかの奇跡

昭和四十四年、『渦巻くシッタン』を日本海新聞社が刊行した。曾祖父はこれを読んでいると、あるエピソードが目に留まった。このエピソードの題名は『谷間の負傷兵』。足立軍曹の綴（つづ）ったこの内容は、

『ある兵士が右腕をやられてやってきた。当時は医療器具などないからのこぎりで切ることになった。苦痛は言語に絶するものであったろうがそれを耐え、さぞ偉かった。しかし、彼は右腕を失ってしまっているため、ラムレ島から逃げることはできないだろう。』

というものだった。これを見た曾祖父は、驚いた。

その後戦友の助けなどによって曾祖父と足立軍曹こと、足立基さんは四十二年ぶりに奇跡的に再開することができた。この奇跡は日本海新聞（昭和六十二年三月三日）にも取り上げられたほどだった。まさに戦争で生き残ったからこそできた奇跡的な出来事である。

感　想

ビルマ戦をはじめ日本には多くの忘れ去られた戦場がある。その戦場は必ずしも人対人ではない、人対飢餓、人対疫病、人対怪我、人対苦しみなどなどいろいろなものを含んでいる。その中でも生き残った曾祖父をはじめとする人々。彼らの心にも多くの癒（い）えない傷があるのではないのかと思う。戦争は愚かな行為だということは事実だ。しかし、それを盲目的に言うことは危険だと思う。

終戦から今年で七十八年目、私の曾祖父をはじめ多くの戦場を経験してきた方々がなくなられている。彼らの生きざまを過去の記憶として閉じ込めるのではなく、今現在にも伝え、深く理解していかなければならないと思う。戦争での苦しさや悲しさ、痛みを知ることはもちろん大切である。しかしそれだけでは、戦争を始めた人の犯人探しをして、そいつが悪いという方向に傾いてしまう危険があり、それは良くない。それに焦点が行ってしまうと、戦争の悲惨さを知るというよりは犯人探しをするものになってしまう。

戦争の悲惨さをのちに伝えるには、当時の生き残った人々が何を感じ、何に生き、そして何のために生き残ろうとしたのかを考えるべきだと思う。戦争の悪い所はいくらでもいえる。しかし、その戦争のリアルな生の経験をした人には彼らなりの特別な戦争に対する考えがあったのではないのだろうか。私たちは戦争の悪い面をきちんと考えるほかに戦争という存在について学ばなければならない。

リアルの戦争を見た人はもうほとんどいないといっても過言ではない。その声を経験を気持ちを伝える人がいなくなるのである。

私は今まで教科書と本の少しの内容で戦争は悪だといい、それを分かっていた気でいた。しかしそれは大きな間違いだとこれを書いていて気付いた。軍隊自体には何の罪もなかった。むしろ先住民と仲良しだった。司令官の猪股大隊長や斉木少佐、宮崎師団長も部下思いの良い人だった。この戦争の本当の恐ろしさは殺人でも、略奪でもなかった。自分は、戦争の真の恐ろしさは自分が何をしているかがわからなくなるということ、自分の生きるという価値に対して疑問を持つことであると思った。疑問を持った結果多くの兵士が自決した。上層部は戦争をすることにいろいろな根拠を出すだろう。しかしそれは、戦争の渦中で戦い、死に行く兵士に通用するのだろうか。

戦争をしてはいけない理由は、生きることへの懐疑的な疑問と今何をしているのかが分からなくなるという二

点にある。どちらか一方でも欠けてはならない。これがこの作文を作成した私の結論だ。戦争の記憶を忘れてはならない。学ぶだけでなく、伝えなければならない。戦争がない平和な世界ができるように願うのではなく、自分たちが作らなければならない。過去の経験がきっとその糧となる。

未だ世界では戦争で亡くなる方々が後を絶たない。人の生きる価値をなくす戦争を撲滅し、未来につなげるためには過去の戦争を知るだけでなく、記憶として残さねばならない。

中学生の部 優秀賞

隼は征く雲の果て
～おじさんの人生を探して～

神奈川県立あおば支援学校中学部　三年
内田　博仁

【春人おじさんとの出会い】

エンジンの音轟々（ごうごう）と隼は征く（いく）雲の果て…初めてこの曲を聞いた時、僕は勇ましくも美しく強い魂を感じる曲だと感じた。戦時中日本人なら誰でも知り、口ずさんでいた曲だそうだ。この曲は「加藤隼戦闘隊」という軍歌である。「加藤隼戦闘隊」今この名称を知っている人がどれだけいるだろうか。加藤隼戦闘隊とは日本陸軍飛行第６４戦隊長・加藤建夫（死後その活躍で軍神と称えられた）率いる戦闘隊で、太平洋戦争初期に大活躍し、国民にも広く知られていた部隊だ。一式戦闘機「隼」を乗りこなし戦っていたことで「加藤隼戦闘隊」と愛称で呼ばれ、当時の少年達の心を焦がし、飛行機乗りへの憧れを抱かせた存在だった。その活躍ぶりと人気にあやかり陸運省公認で映画化もされ、映画「加藤隼戦闘隊」は昭和１９年最大のヒット作品になった。この加藤隼戦闘隊に僕の祖父の兄が隊員として所属していたと知ったのは今年の春のことだった。そんな凄（すご）い人が身内にいたのかと僕は驚いた。だいたいそんな大伯父がいることも僕は知らなかったのだ。このことを機に存在さえ知らなかった大伯父のことがもの凄く気になり始めた。大伯父のことをもっと知りたいと思った。そして僕は加藤隼戦闘隊の書籍や数々の記録を毎日のように読み、大伯父について調べ始めた。僕の大伯父は和田春人（わだはると　以後おじさんまたは春人おじさんと呼ぶ）

といい昭和１２年から昭和１７年まで加藤戦隊長と共に中国そしてマレー半島で陸軍航空部隊の航空兵として戦っていたことが分かった。そして映画「加藤隼戦闘隊」も見た。春人おじさんは小田少尉という役で出ていた。出演シーンは少なかったが、本当におじさんは加藤隼戦闘隊にいたんだと実感してもの凄く感激した。僕はますます春人おじさんに魅(ひ)かれた。しかし映画では1シーンだけの出演だったし、書籍にはおじさんの名前は時々登場するものの、ほとんどと言っていいくらいなかった。僕はおじさんがどのように戦争で戦い、どのような人生を送ったのか自分で調べてみようと思った。この時からおじさんを知る長い旅が始まったのだ。

この後からは、たくさん読んだ書籍や記録を元に僕の言葉で事実を綴っていきます。

【中国からの危険な大移動】

加藤隼戦闘隊について生き残った方々が数々の手記を残してくださっていた。おかげで少しずつ春人おじさんがどのように戦ってきたのかが分かってきた。

記録によるとおじさんは昭和１６年赴任していた中国から長時間の長旅を経てフコク島ゾンド基地に着任していたことが分かった。中国の広東飛行場から今のベトナムの位置にあるフコク島までの距離は２１００キロもあり、当時今だかつてないほどの航空移動で全５００機のうち４０機もの機体が山脈に突っ込むなどして犠牲になったそうだ。これは無理もなく戦争という非常事態のためまともな飛行地図もないまま（中にはなんと教科書の世界地図を傍らにおいた隊員もいたそうだ）フコク島を目指した為だと思われる。現代のような位置情報が分かるシステムもなく、自分の今いる位置も分からず飛行させるなんて危険だし過酷すぎると僕は思った。国の指導者は若者の命を大切にしていなかったのかとさえ思う。当時飛行兵は少年たちの憧れで高倍率の試験に受かり、厳しい鍛錬、勉強を重ねた優秀な少年、青年ばかりだったという。現在の大学４年間で学ぶ量の知識や技術を僅(わず)か2年間で習得させるため、朝から晩まで勉強や訓練を

させられていたそうだ。そのような涙ぐましい努力までして夢や希望を抱いて航空兵になった若者が、国の安易な移動作戦で命を落としてしまうなんて、何て痛ましいことなのだろうか。僕は調べ始めから戦争というもののリアルな現実を知ることになり、その重みに自分は耐えられるのだろうかと不安になった。でも僕は目をそらすことなく向き合っていこうと思う。

【マレー作戦】

太平洋戦争開戦の前日、マレー作戦と呼ばれる石油などの資源確保を目的にマレー半島に上陸し占領する作戦が始まっていた。加藤隼戦闘隊は5万の兵員を満載した27隻の大船団が、マレー半島に無事到着するように上空で護衛するという最も重要な任務を命じられたのだ。春人おじさんはなんとその7人の一人に選ばれ、それも加藤戦隊長の僚機（ペアになる機のこと）を務めるという大役を仰せつかったのだ。

「和田曹長は、きょうは部隊長の僚機として出勤する、誉れの大任をになっていた」（栄光加藤隼戦闘隊　安田義人著者より）という記述を読み、油にまみれながら愛機を誇らし気に磨き、絶対に任務をやり遂げるのだと忠誠を誓い、堂々と隼の横で佇む春人おじさんの凛々しい姿が、まるでタイムスリップしたかのように僕の目の前に見えてきた。僕の心は時を超え80年前のシンガポールにあった。しかしこのような国の大きな作戦に携わるという責任や重圧はいかほどであったことか。その重みを共に背負うような気持ちに僕はいつしかなっていた。

昭和16年12月7日17時。7機の戦闘機が大荒れのスコールの中飛び立った。常識で考えたら十分な計測器もなく、未知の初めての洋上での夜間飛行。戻って来られない可能性の方が高かったそうだ。おじさんももう生きて帰れないかもしれないと思いながら、夕暮れの中飛び立ったのだろうか。

海上に出発する時は皆浮のう（救命胴衣のようなもの）を装着することになっている。しかしこの時誰一人として浮のうを装着していなかったという。海にはまったら

それまでという決意をしたのだろうか。
「おそらくはふたたび生きて相まみれることはないだろう」と決意しあったという。生きて帰ってくるという思いより、任務を遂行する責任感、使命感が勝つ。日本の国のため、何より家族を幸せにするためとの思いを抱きながら、夕暮れの空へ勇敢に飛び立ったのだ。おじさんにはこの任務が正しいこと、やり遂げねばならないことと信ずる強い信念があったのだろう。何より熊本で待つ家族への不変の愛がそんな勇気や強さを持たせたとしたならば、僕はその純粋な思いとその真っ直ぐな思いに涙が出る。
その日の洋上はホースから水が飛び出すようなスコールや、ヤシの木が折れるほどの風で大荒れだったという。それでも戦隊長他6名は必死で食らいついた。いつ敵がくるのか分からない中、恐怖と戦いながら雲の上に飛び出たり、雲の下に入ったり息詰まるような護衛任務だったという。上空でどんなに極限状態だったか、加藤戦隊長の日記に書かれた記述で分かる。まず酸素不足で苦しかったこと。暗く視界が悪い上に計測器も満足に与えられてなかったので、自分たちの今いる位置が分からないということ。それは本当に壮絶な護衛任務だった。そして加藤隼戦闘隊は人間の持つ極限の忍耐力で命をかけ船団を守りきったのだ。
しかしその後が問題だった。無事任務を終え帰還の途につく時には、すでに海上は暗黒の夜だったのである。夜間飛行で計測器も与えられてない状態では自力での帰途はほとんど不可能と言われていたので、帰りは計測器が充実している重爆機隊（大きな爆弾を搭載した航空機の隊）が誘導してくれる手配になっていた。しかし重爆機隊は合流地点に現れなかったのだ。5万人の兵士を守ってさえすればもういい、というような見捨てられた感覚を僕は感じ、怒りの感情が湧(わ)きあがってきた。暗闇の中一筋の基地の灯りを求めて、ひっくり返るような風と雨の中命がけの飛行を続ける隼戦闘機達。荒波に飲み込まれ、時に海に叩きつけられるように翻弄(ほんろう)され、もはや仲間の姿を確認するのも不可能だったという。僕はなんて

酷な任務なのだろうかと、その過酷な状況にいた7人の苦しみを思うと心が怒りと苦しみで爆発しそうだった。荒波の中まるで木の葉のように翻弄し、必死で操縦かんにしがみついていたという。この時いたはずの仲間が一機、二機、三機といなくなっていった。本来一番輝くべく青春時代を捧げ、その情熱の全てをかけ、何百課程もの課題をこなし、必死で勉強し飛行兵になった方たちなのだ。そんな若い尊い命が海の上で次々と失われていったというのか。彼らの無念の叫び声が聞こえるような気がして、僕の心は張り裂けそうだった。狭いコックピットの中で、酸素も薄く息も苦しい真っ暗闇の中で、仲間がどうなっているのかもはや分からない状況の中、おじさんはどんな気持ちだったろうか。その苦しみは想像を絶するものがある。雷の光が唯一一瞬の光となり、また洋上の船なども頼りに位置などを予想し、必死に基地の灯りを探すしか方法はなかったそうだ。困難と想像を絶する状態の中、加藤戦隊長に必死で食らいついた春人おじさんの極限に達した忍耐力と集中力は、通常の人間の域を超えている。

そしてついに基地の灯りを見つけたのである！スコールに叩きつけられながら必死に着陸したのだ。

１０時４０分。なんと６時間も風と暗闇と恐怖と、何より体力ギリギリの洋上飛行に耐え、奇跡の生還で無事基地に着いたのである。基地では戦隊長と和田春人曹長が戻ってきた瞬間、皆いっせいに飛び出し、安堵（あんど）と歓喜で泣き声に似た喜びの声で叫んだのだという。しかしとうとう3名の隊員は帰って来なかったのだ。加藤戦隊長は空を見つめて「帰ってくる、必ず帰ってくるぞ」と言いながら夜空をいつまでも見つめていたという。もう燃料も切れている。精魂尽きて海に散ったか、スコールに叩きつけられたか。おじさんは共に過ごした貴重な仲間をこの日失ったのだ。ある記述を見て僕は胸が張り裂けるような気持ちになった。

「和田曹長の報告に対して部隊長は静かにうなづくと「和田苦労かけたな」と一言言った。その一言が飛行の想像を超えた苦難を語っていた。和田曹長の双眼からみるみ

る大粒の涙がこぼれ落ちた」（栄光加藤隼戦闘隊　安田義人著者より）おじさんの涙に込められた思いを想像すると僕はたまらなくなった。

仲間を失った悲しみ、悔しさ、極限状態で遂行した任務の壮絶さに心も身体も限界で、悲しみと苦しみが溢(あふ)れ出てしまったのだろうか。どうしてこんなに重い責務を背負わなければならなかったのか。

国のために、家族のために強く立派な態度で空に散った命を思うと、僕は心に血が流れるような苦しい気持ちになった。もしこの隊員さん達が生きていたら、その後結婚して家族をもったかもしれない、そして運動会で子供に声援を送ったり、家族で出かけたり、そんな笑顔溢れる未来があったかもしれないのだ。何故(なぜ)そんな未来を奪われなければならなかったのか。僕の心は怒りの感情でいっぱいになった。そしてここで僕は気付く。僕はこのように過去の事実と向き合うことで怒りや悲しみの感情が生まれた。しかし時が経つとこのような怒りや悲しみの感情さえ生まれる機会が無くなってしまうのではないか。人々の思いが風化され、真実や事実さえ記憶が薄れていくのは恐ろしいことだと僕は思う。僕たちは過去の事実を見つめ一緒に苦しみを分かち合うべきだ。そのために何をすべきか。それはまず知ることだ。何が起こったのかどのように日本の国民の方々が亡くなっていったのか、過去の記録を読み、自分で調べ自分で動くべきだ。何故なら教科書の記録だけでは本当の戦争の姿など分からないからだ。汗を流し、まずは事実を見つめ、共に苦しみ共に悲しみ、一緒に時を超え僕たちも体感するべきなのだ。しかしどんなに全ての記録や書籍を読んだとしても死と向かい合わせでいること、次々と人が死んでいくことがどれだけ辛く恐怖であったか僕には想像できないのだ。でも今この涙を流したおじさんと共に、僕も一緒に痛みたい、苦しみを分かち合いたい、と心から思った。

おじさんがこの戦闘隊でどんな日々を送ったのか、僕の足で調べできる限り（僕は自閉症という障がいを患っているので）話せない僕ではあるが自身で打った質問を代

読者に質問してもらうという形式をとり、自身で精一杯調べ抜くことに今回は力を注ごうと思った。それがおじさんをはじめとした、戦争で命をおとした方々について調べるにあたっての誠意だとも思ったからだ。真剣に誠実に向き合うのだとこの日僕は誓った。しかしなんて過酷で悲惨な時代におじさんは生まれたのだろうか。

【シンガポールを制圧する目的とは】

実際、疲労と戦死した仲間を思い睡眠もじっくりととれないまま次の日、太平洋戦争開戦の日を迎えた。マレー半島に展開する敵連合軍との空中戦が日々続いた。どんどん南下しシンガポール制圧に向けて攻め続けなければならないのだ。ここで僕にそもそも何故日本はシンガポールを制圧しなければならなかったのか、という疑問が生まれた。記録によると日本がシンガポールを侵攻した大きな理由の一つはそのさらに南にあるバレンバン製油所の石油確保を筆頭に、マレー半島、スマトラ島などの資源確保を目的としていたのだそうだ。この頃日本にはずっと石油がなかったのである。バレンバン製油所には50万トンの貯油があったという。当時の日本は石油が枯渇していた。なのでこのバレンバン製油所制圧に向けて南下し攻め続けることは当時の、今後の日本の未来を左右する重大な作戦だったのである。しかし戦争とは複雑な事実が絡み合っていて理解するのは本当に困難である。このように疑問は次々生まれてくる。そのたびにいったん立ち止まり、調べて理解していくしかないのだ。正直この頃僕は、僕の力ではおじさんのことを語るのは無理なのではないかと悩み始めていた。自分はもの凄く深く複雑な問題に取り組んでいるのだと実感し始めていた。しかしおじさんへの溢れんばかりの敬意は、もはやこの頃には抑えきれなくなっていた。また親戚の方々の後押しも僕を奮い立たせてくれた。僕は絶対にやり遂げるのだと自分を叱咤激励(しったげきれい)した。疑問点や理解できないことが出てくる度にその都度調べ、一つ一つ丁寧に理解した。

【ピストン攻撃による激戦の日々】

昭和17年2月15日のシンガポール没落まで、加藤隼戦闘隊独自の活発な作戦「ピストン攻撃」が実行された。それは一回6時間とも言われる出撃を一日に最大で3回繰り返すこと。なんとただでさえ命がけの戦いで、毎回立てなくなるほど、食欲も無くなるほど疲弊するというのに、18時間もの長時間労働を毎日行っていたのだ。嘘のような本当の話なのである。精神的にも肉体的にも限界を超えていたと思われる。その疲労の蓄積が、抜群の技術力と強い精神力で、奇跡的にずっと生き残っていたおじさんに暗い影を落とし始める。

昭和16年12月22日の出撃も朝早くの出発であった。クアラルンプール飛行場攻撃のため、加藤隼戦闘隊が北より到着。いきなり敵の高射砲弾が空を覆うように爆音で炸裂してきた。操縦かんをもぎとられんばかりの爆風で揺れる。このふらついて飛んでいる動きを敵はすかさず見つけて、寸秒も置かずに一斉に攻撃してくるのだ。敵は15機。いもむしのような不気味な外観を持つバッファロー機であった。春人おじさんの編隊はこの敵に向かっていった。弾が当たれば空中で死ぬかもしれない。使命のためなら恐怖心も消えるのだろうか。後ろから敵機を攻撃。敵の編隊はエリート部隊である隼戦闘隊の軽く身のこなしの早い旋回能力に劣っていたのだろう。一斉にちりぢりになった。味方優位を確認した戦隊長が敵機攻撃を命令すると、射撃の名手Y大尉が攻撃、しかしここでトラブルが起こる。弾が出ないのだ。ではこの俺がとE大尉が代わりに攻撃するも5、6発で弾が止まってしまう。まさかのピンチであった。実はこの頃の隼はいくつか問題を抱えていたのだ。弾が出ない、亀裂が見つかる、など故障の報告が絶えなかったという。攻撃力をより高めるため新しい機関砲を取り入れたこと、前述のピストン攻撃による機体の強度疲労、など原因は多々あったそうだ。しかし何年も明野飛行学校で訓練し、技術を磨いた優秀な隊員達のチーム力は群を抜いていた。他の隊員達の猛攻撃で、敵を何機も撃墜したのである。充分な戦果もあげまた故障も相次いだからだろ

うか、加藤戦隊長が集合をかけた。しかしその時、敵を見つけたT中尉がそれに従わず、敵を追い撃墜しようと追いつめようとしていた。敵に50メートルまで近づき追いつめるが、またどうしたことか弾が出ない。衝突しそうになり機体を起こしたのだろうか、そのまま空中分解し地上に激突、爆発した。「中隊長！」と部下が叫んだ。おじさんはこの壮烈な戦死を見て何を思っただろうか。僕には地上に突っ込み、死ぬ仲間を目の前で見るというその残酷な状況がとても想像できない。僕はこの記録を読み、戦争の現実と過酷さに打ちのめされそうになった。昨日まで一緒に食事を共にしていた仲間が一人、また一人と毎日のように戦死していくのだ。それはとても悲しい風景であり辛い日々だったという。戦死したと知らずに箸（はし）や茶碗が置かれた時は、思わず涙ぐむ隊員もいたそうだ。その過酷なまでの辛く悲しい日々に人の心は耐えられるものなのだろうか。いや耐えるしかなかったのであろう。この日一機を失ったものの敵を5機撃墜し大成果を収め、加藤隼戦闘隊の名がまた上がったわけだが、僕は戦争の現実と過酷さに使命とはなんなのだろうか、命を投げ出してまで使命を全うすることに意味はあるのだろうかと考えてしまった。命を犠牲にして生まれる幸せなどあるのだろうか。しかし命の尊さや大切さまでも、その考え方さえも、国は軍兵たちに捨てさせようとしたのだろう。それが戦争という現実なのだ。連日の過酷なピストン攻撃により、難攻不落と言われたこのシンガポールを降伏させ、占領できたのは常に空中から援護し、連日敵機をその高い技術力と鍛えられた経験値で空中を制覇した加藤隼戦闘隊の功績が大きかったといえる。しかしその影では青春をすべて捧げ、国の為に戦ってくださった若い戦闘隊員さん達の尊い命がたくさん失われていたのだ。シンガポール没落を記念し記念切手が発売され、日本ではこの成果に大いに湧いたようだが、実際の壮絶な現実と人々に伝えられる祝福ムードの紙面との大きなギャップに、僕は恐ろしさを感じた。このように国民は日本は勝てる、戦争には意義があると思い込んでしまったのだろうか。

【修武台記念館見学にて起きた奇跡】

夏休みも終わりに近づいてきたある日、僕は埼玉県入間基地にある修武台記念館の見学ツアーに参加することになった。埼玉県入間基地には航空隊員の教育訓練、精神教育及び航空隊の伝統の継承を目的に、修武台記念館という歴史資料館が運営されているのだ。ここは開戦前の昭和１３年に航空士官学校の校舎として建設され、旧日本軍の貴重な資料が展示されている。おじさんの軌跡が少しでも分かるような何か資料や写真などがあるかもしれない。僕は期待で胸が高鳴った。加藤隼戦闘隊について毎日調べているという旨を説明すると、なんと加藤隼戦闘隊の資料や展示物があるのだという。

資料室に向かうと、いきなり加藤戦隊長が実際着用した軍服が目に飛び込み、僕は心で興奮の叫びを発した。横には陸軍軍刀や陸軍軍帽、陸軍飛行靴まである。これらは約８０年の時を隔てて今僕の目の前にあるのだ。その重みと迫力、戦闘隊の信念まで伝わるようなオーラに圧倒され、僕は感動で改めてこの機会、この瞬間に心から感謝した。おじさんも着用したであろう軍服。土色のしっかりとした生地に品のあるワッペン、戦い抜いた歴史の風格がそこにはあった。そして次に目に飛び込んだのは加藤戦隊長の日記だった。なんと直筆だ。僕はまずすぐに日付を見た。「９月２０日　斎藤、河合を連れて天津至りしも作戦任務なく…」加藤戦隊長の直筆に目が眩(くらむ)ほどの感動を覚えながらも、僕は中国だ！中国にいた昭和１３年頃の日記だ、と興奮する心を落ち着かせながら考えた。この頃春人おじさんも共に中国にいたのだ。

自衛官の方が僕の興奮ぶりが気になったのか様子を見に来られ、僕たちが加藤隼戦闘隊の隊員の子孫だと知ると大変驚いて「隊員さんの名前は何と言うのですか」と聞いてこられた。母が「和田春人です」と答えた。僕たちが春人おじさんの子孫だということをこんなに驚いてくださるとは、改めて加藤隼戦闘隊の隊員であったおじさんは、本当に凄い人だったんだと実感し誇らしい気持ちになった。男性のスタッフさんが、あの頃加藤隼戦闘隊

を知らない国民はいなかったんじゃないでしょうか。映画化もされましたし、歌も有名になりましたからと話してくださった。加藤隼戦闘隊は当時国民の英雄だったのだそうだ。また加藤戦隊長はとても部下思いであり、部下のことばかり考えているような方で、いつも一人空にギリギリまで残って、部下が無事かどうか確認する方だったと。おじさんはそんな素晴らしい人格者である隊長のもとでずっと共に過ごすことができて幸せだったのかもしれない。その重い責務や厳しい戦いの中でも、加藤戦隊長にはなにか人間的な温かさ、血のかよう人肌を感じる人情のようなものがあったように僕は感じていた。大きな使命を全うしながらも、人間的な繋がりや絆をおじさんはこの戦隊長に感じていたのかもしれない。

一式戦闘機、隼は写真と文章でしかイメージしてなかったので、次に目に飛び込んできた隼の残骸の大きさにはとても驚いた。ミャンマーに残っていた隼戦闘機の残骸が、ＮＨＫの取材班の情報によって発見され、様々な方の尽力により修武台記念館に展示されることになったのだそうだ。それは隼のプロペラの残骸だった。たくさん戦い抜いた証のように黒く焦げた色をしている。空で多くの敵を見てきたんだという威厳を感じさせた。現物を目の前にして現実がいきなりつきたてられたような気がした。戦争の怖さ、迫力を急に実感して僕は身震いした。多くの貴重なものを見せて頂き、僕はもう胸がいっぱいだった。しかしクライマックスはこれからだったのである。この部屋に展示されているのものは本当に貴重で、機密情報もあるので写真撮影はご遠慮ください、と言われたその資料室で僕は目をみはった。ガラスケースの中にあったのは直立し命令を聞く戦闘隊員の写真だった。何か命令を発動され聞いているのか、これ以上にないほどの直立した姿勢で真剣に聞いているその姿、その隊員さん達の中に春人おじさんがいるかもしれないと僕は大興奮した。こんなに真摯に真剣に人の話を聞く姿を見て、僕は涙が出そうになった。国のためにと真剣に命をかけて日々使命を全うしていた若い隊員の皆さんに敬意を感じずにはいられなかったからだ。そして僕の思いは８０

年の時を超え、あのシンガポールに向かっていた。愛機を油まみれで整備するおじさんや、夜中命からがら帰ってきて仲間を失いぼろぼろ涙を流したおじさんや、仲間とチームを組み空や雲さえくぐり抜け命をかけて戦い抜いたおじさんや隊員さん達の姿が次々と走馬灯のように浮かび、時を隔てて今僕がこの写真を見ている瞬間の奇跡に涙が溢れ出た。写真の隣にある名簿があった。時の重みを感じさせる黄ばみ、その重々しい様に目が惹かれた。それは昭和13年に編成された隊員の編成表だった。数十人は明記があるだろうか。何か特別の作戦での重要な機密文書なのであろう。

その時奇跡が起こった。右の方の主要メンバーらしき数人の名前の中に「和田春人」と名前があったのだ！僕はあまりの感激に頭が真っ白になった。「名前がある！名前がある！」と母が叫んだ。

僕らの尋常ではない様子に何人かの館内のスタッフさんや自衛隊員の方々が集まり「名前がありましたか？」と大変びっくりされ共に感激してくださった。本や手記で見るのとは全く違うこの感動は言葉ではとても言い表せられない。おじさんが生きた証、歴史に名を刻んだことへの証明のような気がして、僕は一生味わうことのない感動をこの時感じたのだ。この目でおじさんが生きた証を確かめられた瞬間を僕は一生忘れまいと思った。この日の経験は僕に大きな刺激となり、何か大きな使命感のようなものを僕に与えてくれた。僕は絶対におじさんの生きた証、おじさんがやり抜いたことを、調べ抜いてみせると心に誓った。日々戦争と向き合うことは正直時に悲しみや虚しさで心が疲弊する。でも僕はこの日、命を懸け日本のために戦ってくださった隊員の方々の魂を感じ、その死を決して無駄にしてはいけないと改めて思ったのだ。

【河口湖飛行館にて感じた隼戦闘隊の信念】

8月僕は隼戦闘機を唯一再現し展示している河口湖飛行館に行った。年に1回、8月だけしか見れないうえに、世界でも現存している隼戦闘機はこの河口湖飛行館にし

かないそうだ。大変貴重な機会に僕は恵まれたのだ。河口湖飛行館は主に1935年から1945年頃の大東亜戦争の期間内に開発、使用された航空機と、その関連部品を収集して公開している。戦争で使われた貴重な航空機及び資料を、後世に残すために修復して保存しているのだそうだ。河口湖は避暑地ではあるが、この日は猛暑で汗が吹き出るような暑さだった。さらに辿り着いた倉庫は航空機ファンの方々の熱気とエネルギーがもの凄くて、僕は圧倒されてしまった。人混みが苦手な僕ではあるが、隼を見るためなら我慢するしかない。

倉庫の天井にそれはあった。本物の隼戦闘機！まずその大きさには驚かされた。天井に吊され堂々と僕らを見下ろす隼はまさに空の英雄だった。戦闘機として伝統を受け継いできた風格と威厳ある美しさが感じられた。こんなに大きな機体が空を駆け抜け飛んでいたのか、空を支配するかのように悠々と飛ぶ荒鷲のような隼の姿がそこにはあった。

そして次に僕の目に止まったのは翼に描かれた矢印だ。加藤隼戦闘隊であることを示すシンボルとして隊員の機体には尾翼に矢印のマークが描かれているのだ。彼らの誇りと信念のシンボルである有名な矢印のマークを生で見れたことに僕はまた大興奮してしまった。しかし僕が何より今回注意深く見つめたのはコックピットだ。機体の大きさの迫力とは対照的にコックピットの小ささと狭さに僕は本当に驚いた。こんなに狭い場所におじさんは何時間もいたのか。敵にやられる恐怖と戦いながら、旋回する時は目の玉が飛び出るような、背骨が折れるほどの圧が身体中を襲うという、そのような苦しみに耐えながらおじさんはあの狭い空間に何時間もいたのだ。日本を、家族を守るという信念のために。おじさんの勇敢さとその立派な信念に僕は敬服せずにはいられなかった。おじさん達の純粋な信念は僕らに大切な問いを問いかけているような気がした。彼らが信念を貫き、無念の思いで空に若い命を落とし、そうまでしても日本の未来を信じたその思いに、はたして僕らは応えられているだろうか。僕らは彼らに恥ずかしくない生き方をしているだろ

うか。
平和で本が溢れ、安心して勉強できる環境の中で僕らはどれだけ日々感謝し、真剣に学べているだろうか。時はつながっていると僕は感じた。時が堆積しても信念は消えはしないのだと。隊員の方々のその純粋で真っ直ぐな信念は、どんなに時がたっても消えやしない。何故なら今僕がこうして感じて受け取っているからだ。戦争を知り学ぶということは、亡くなった方々の思いや信念、無念さ、苦しみ、それでも信じていた希望、様々な思いを受け取ることだと僕は感じた。そして自分に問いかけ、毎回言い聞かせる。僕らは彼らに恥ずかしくない生き方をしているだろうか、彼らに恥じないよう日々真剣に生きなければと。この日僕はまた大切なものを得た。

【多摩霊園にて加藤戦隊長へ伝えたメッセージ】
夏休みが開けても僕は隼戦闘隊の調査を日々地道に続けていた。そして9月某日、僕は加藤建央戦闘長のお墓参りに多摩霊園へ行った。毎日隼戦闘隊の資料を読み、あまりにも日々没頭したため正直この頃僕は少しだけ行き詰まっていた。あらゆる角度から戦争について調べていると、どれが正解なのか分からなくなる。しかし日々知った事実をタブレットで打ち、記録するという作業を続けているうちに、日々理解は高まっていった。多くの事実を知ることができ、僕の夏休みはとても充実していた。今回加藤戦隊長のお墓に伺ったのは、このように書かせて頂いていることへの報告とお礼がしたかったからだ。残暑の熱気の中、加藤戦隊長のお墓は壮大な佇まいで建っていた。僕はまた色々な気持ちが溢れ、敬虔（けいけん）な気持ちになった。墓石の隣の石碑には「加藤建夫陸軍少尉　昭和十七年五月二十二日　ベンガル湾アレサンヨウ沖にて戦死」と刻まれていた。この事実の重みと悲しみが、改めて僕の胸を打ち抜き厳粛な気持ちになる。僕はこのように伝えた。
「日本のために命を懸けて戦ってくださりありがとうございました。今僕たちが豊かで平和な毎日を過ごせているのは隊員の皆さんが空で戦い抜いてくださったからで

す。僕らの未来を良くしようと命を犠牲にしてまでも、信じ抜き戦い抜いたその思いを僕は一生忘れずに感謝の気持ちを持ち、より良い世の中になるように努力していきます。また僕のおじさん和田春人曹長をいつも温かく守ってくださりありがとうございました。おじさんは加藤戦隊長のような素晴らしい人格者の方と一緒に過ごせて幸せだったと思います」

僕はこの日気持ちを新たにした。絶対にやり抜くのだと。戦隊の皆さんのために。伝えるために。

こんなにまで誠意を持って日本のために必死で戦い抜き、空に散った命があったことを忘れぬために。

【運命の日　ローウィン飛行場攻撃】

運命とは何なのだろうか。色々な出来事がまるで運命のように絡み合いそれは起こってしまった。

運命の日の前日、ある送別会が行われた。ベテラン飛行兵はじめ、撃墜王と呼ばれた優秀なパイロットなど４名が隼戦闘隊から転出することになったのだ。優秀に育てて他の場所で活躍してもらうという戦隊長の信念は素晴らしい。でも僕はこの優秀な隊員さん達がもし次の日の攻撃にいてくれたなら、おじさんは助かっていたのではないかと思ってしまう。次の日、運命の日昭和１７年４月８日その日はいつになく霧も晴れ快晴の日であった。久しぶりに整備、点検の日としてゆっくりできると、現場には珍しくのんびりとした雰囲気が漂っていたという。しかし急遽（きゅうきょ）ローウィン飛行場への出撃の命が下る。ローウィン飛行場上空に、敵機２０機が飛んでいるとの報告があったのだ。しかしここで戦闘隊をかく乱、油断させる出来事が起こってしまう。それは捕虜の言葉であった。ローウィンには友軍の戦力はほとんどいない、自軍の戦力はたいしたことがないと、捕虜が偽りの自白をしていたのだ。なんとそれを隊員達は信じてしまった。敵機２０機との報告も、鳥か何かと見間違えたのであろうと思い込んでしまったのである。「おい、今日は慣熟飛行（慣れている人の後ろで飛行して真似（まね）て学ぶこと）のつもりでいこう。初陣の者も連れて行くぞ」とさらに

悪いことに初飛行の部下2名も連れていってしまったのだ。この嘘の自白をした敵の兵が狡猾だったというべきか、加藤戦闘隊員が正直すぎたというべきか、人情深い方々の集まりであった戦闘隊の隙をつかれたというべきか、とにかく悔しい。とにもかくにも、ちょっと偵察にでも行くぐらいの軽い気持ちで戦闘隊は出撃してしまったのだ。そして唯一のベテラン飛行兵として春人おじさんも共に出撃することになったのだ。

約2時間後ローウィン飛行場に到着。高度4千メートルから見た飛行場は不気味なほど静かだったという。実はこの時、老練パイロット達（その撃墜数の多さで賞金を稼いでいる）の集団、米国義勇軍20機が山の影で待ち伏せていたのだ。隼戦闘隊が地上に3機あった敵戦闘機を爆撃炎上させると、上空に敵もいないので上昇、退去しろと戦隊長が指令を出した。しかし何を勘違いしたのか1機が地上に向かって攻撃を始めてしまったのである。そしてそれを見た他の戦闘機までもが連なり始めてしまったのだ。この様子を待ち伏せしていた敵米国義勇軍に発見されてしまったのである。20機が好機来たりと上空から一気に襲ってきた。賞金がかかっている老練パイロット対練習のつもりできた初出陣の新人パイロット。あまりにも形勢は不利であった。襲われる部下を見て必死に庇うように敵に襲いかかる春人おじさん。記録にはこうある。「和田曹長　この人は生来、人の面倒見がよく侠気に富んでいたので、初陣の人達を最後まで救助しようとして奮戦し壮烈な戦死を遂げたものであった」（栄光加藤隼戦闘隊　安田義人著者より）

「侠気」を調べた瞬間、僕の目から涙がこぼれ落ちた。その意味は「弱い者を助けようとする気性」だった。僕は涙が止まらなかった。敵機が襲いかかり死の間際でも、そんな時にも部下を庇い敵に突っ込んでいくその勇敢さ、その正義感に涙が止まらなかった。どこからそんな勇敢さが生まれるのか。どうしてそれほどまでに強く優しい人が死ななければならなかったのか。

おじさんは昭和17年4月8日ローウィンの空に散った。まだ26歳の若さだった。明野飛行学校時代から訓

練に訓練を重ね、勇敢で卓越した技術力で活躍し生き残ってきたおじさんは最後まで勇敢な人だった。もし前日にベテラン航空兵の転属がなかったら、敵の嘘の自白を信じずにいつものように熟練隊員達で出撃していたなら、部下を連れていかなかったら、攻撃が終わり速やかに退去していたなら、おじさんは生き残っていたかもしれない。僕が3歳時、熊本に行った時おじさんに会えていたかもしれないのだ。大きくなったねと優しい眼差しで微笑(ほほえ)みながら。僕は会いたかった。おじさんに生きて会いたかった。僕は運命を憎んだ。そして僕はこの瞬間戦争を憎んだ。

【明らかになった真実】

実は九州の実家にあった春人おじさんの手紙や写真は、熊本の大きな地震で全て流されてしまった。春人おじさんの顔を僕らは知ることができないのかと僕は落胆した。しかし奇跡というしかない。僕が3歳の頃熊本の実家で撮った写真、その後ろによく見ると先祖代々の方々の遺影が飾られているのが写り込んでいたのだ。目を皿のようにして見る、春人おじさんだ！隣には隼戦闘機の写真がある！。僕は感動でしばらく震えが止まらなかった。春人おじさんの端正な面長の、意志の強そうな目と精悍な表情に僕は一瞬で心を奪われた。とても美しくハンサムであったが大人っぽさの中に少し人懐っこさのある優しい表情も魅力的だった。胸にいくつかのワッペンが誇らし気に整然と並んでいて、品格のある佇まいでこちらを見ている。憧れのおじさんに会えた奇跡で僕はもう思いが込み上げてきて胸がいっぱいだった。しかしこの後さらに奇跡が起こる。

写真を拡大しよく見ると下に記述があったのだ。文字は小さくてところどころしか見えない。しかし衝撃的な事実、真実がそこには眠っていたのである。

4月8日ビルマローウィン　攻撃の散弾　ガソリンタンク　敵に突入　爆発　敵に痛手　戦死をとぐ

勲章　陸軍准尉和田春人

おじさんはガソリンタンクに弾を受けダメージを喰らっ

たのだろう。にもかかわらず加藤戦隊長や部隊の仲間、そして何より日本にいる家族を守るために敵に果敢に突入していったのだ。あの老練パイロット達に向かって。最後まで諦めずに。その事実が今僕に８０年の時を超え伝わった奇跡に、僕は涙が止まらなかった。半年以上も調べ、たくさんの著書や記録を読んだ。でも答えは、真実はこの場所に、おじさんが何よりも愛した熊本にあったのだ。僕は写真に向かって語りかけた。おじさん僕に伝えてくれてありがとう。僕はおじさんを誇りに思います。僕は感動で胸がいっぱいでしばらく動けなかった。

【愛されていた春人おじさん】

春人おじさんが生まれ育った熊本の実家（現在は熊本地震で倒壊）に最近まで住んでいたいとこ伯母（春人おじさんの姪にあたる）に今回お話を伺うことができた。僕の用意した質問にとても丁寧に答えてくださった。

《質問》小さい頃はどのようなお子さんでしたか？

「ともかく優秀だった。昔の通知表は1、2、3じゃなく甲、乙、丙、丁でね。オール甲だった。もうそりゃあ優秀だった。ハンサムでね。一重でキリッとしてて。町を歩くとみんな振り返ってたって。」

《質問》何歳ぐらいで軍にいかれたのですか？

「埼玉熊谷ってあるでしょ？、義務教育を受けて１０代で熊谷飛行場に試験を受けに行ったの。自分であの時代に飛行機に乗るなんて、本当意志が強いんですよ。だって長男だから跡継ぎしなきゃいけないでしょ？自分は長男だけど、兄弟が多いから守人（もりと　春人おじさんの弟）がおるって。守人にまかせるけん、自分は飛行機乗りになりたいって自分で志願してそして試験に受かったわけ。凄いじゃない？そこで訓練して操作技術とか何百と過程をこなして。で隼戦闘隊に選ばれた。地元のヒーローよ。」

《質問》春人おじさんから手紙などは届きましたか？

「祖父にいっぱい送ってきた。でも地震ですべて失くしてしまった。内容は元気ですかとか。本当に優しいんですよ。家族の身体を心配して。昔の検閲のはがきに書い

てた。はがきだったら見られるけんね。2か月も3ヵ月も遅れてくるけどね。」

《質問》家を出る時何か言葉などは残したのでしょうか？

「女々しい人じゃなかったからね。国のために戦うって。凛々しいんですよ。覚悟して行ったんだと思う。」

そして「誉（ほまれ）のことがある」とこんなお話をしてくれた。

「隼戦闘隊で編隊を組んで行く時にちょうど真上、この上を、家の上を自分が通るって、知らせる手紙が来たの。家の上を通る時にね、旋回するって。この日家の上を旋回するからねって知らせてくれたわけ。そこでまったろう曾祖父が家の庭にあった大きな松のてっぺんに、上までは登りきらんて庭師さんかなにかに頼んで日の丸の旗をくくりつけたんですよ。そしたら上から見えるでしょう？そうゆうふうにまったろうじいさんがしたんだって。家の上を通る時にその日の丸の旗が春人に見えるって。一番てっぺんにくくりつけたんですって。「孫が通るけんち」って。私、感動したと。涙が出たと。家族っていいなって。だってお金で買えないもんでしょうが。春人おじさんはなんて幸せな人なんだろう。それこそ妻子もいない、結婚もしない、子供もいない、だけど一人ぼっちじゃなかった。みんなから本当に愛されてた。」

僕は感動でしばらく胸がいっぱいで動けなかった。春人おじさんが何よりも愛し、何よりも大切にした家族。戦争というどうにもならない苦悩の時代にあっても愛だけは消えなかったのだ。どんな苦しい時代の恐ろしい波に飲み込まれようとも、愛だけは消すことができなかったのだ。おじさんは本当に愛されていたのだ。そして今も、僕らみんながおじさんを心から愛しているのだ。

【最後に　80年の時を超えおじさんから受け取った思い】

おじさんを知る長い旅はこうして終わった。僕はたくさんのかけがえのない貴重な歴史の事実や知識、戦争への見識を得ることができたし、本当に多くの感情を経験することで、それらの経験は僕を大きく成長させてくれたように思う。この約8か月の間、春人おじさんや加藤隼

戦闘隊のことだけに日々心を浸してきたが、調べる過程においてこんな僕が本当によく行動したと思うし、自ら未知のものを探求し切り開き、発見する価値と意義を知った日々でもあった。「和田春人曹長未帰還」当初はこの一文だけしか分からなかったおじさんの人生が、僕の知りたいという願望、おじさんへの思いの強さの力で起こした奇跡の日々は僕の人生においてかけがえのないものとなった。また与えられた本や資料だけでは、自分の視点や考えも生まれないことも知った。まず僕は加藤隼戦闘隊という視点から戦争を見つめることができた。そこにあったのは戦時中という悲惨な時代においても、全く自由のない状況でも生きることを、人生を諦めなかった戦闘隊員達の懸命に生きている姿だった。教科書の文章でしか知らなかった、歴史の事実としてしか知らなかった戦争という大きな事実の中に、人間味ある感情や、悲しみ、悔しさ、重責を背負い続けた中でも。死と隣り合わせの日々においても、その中でも精一杯人生を生きていた人としての生身の姿がそこにはあったのだ。生き残った方々が著書を書き綴ってくれたこと、遺族の方々が数々の遺品や資料を大切に保存、提供してくださったことで、知りえなかったその姿が、春人おじさんの人生の物語が鮮やかに蘇ったことに心から感謝したい。僕は皆さんが懸命に生き、未来を信じて日々空で戦った姿を一生忘れることはないだろう。戦争という悲劇からは何も生まれない。しかし加藤隼戦闘隊の方々や春人おじさんの生き様は僕の心を動かし、僕に大切な何かを伝えてくれた。人生というものは時にままならないものであり残酷なものである。おじさんは戦争という時代に逆らえない過酷な世の中に生まれた。おじさんとは比べものにならないが、僕も障がいという運命を抱えて生まれてきた。僕はどこかで何故僕だけがこんな酷な運命を背負って生きていかなければならないのかという思いを抱えていたように思う。特に中学生になってからは正直心も荒れていた。人生に対して後ろ向きになっていた。しかしおじさんはどんな状況でも人生を諦めなかった。運命に勇敢に立ち向かい、弱い者に優しく寄り添い、仲間を命

がけで助け、日々大空に向かって使命のために勇敢に飛び立っていった。与えられた運命に決して逆わらず、最後まで短い人生を懸命に生きていたではないか。僕はその生き様にもの凄く心を打たれたのだ。僕も生きている限り精一杯与えられたこの道を生きていこうと、生きていかなければならないのだとそう思えたのだ。おじさんの人生に寄り添い、向き合った日々は僕を確実に大きく変えてくれたのだ。

「春人おじさん、僕は高校に行っても勉強を続けることにしました。通信の高校に通い、勉強を続けようと思います。少しずつ努力を積み重ねて自分で生きる力を身につけようと思います。僕は春人おじさんのように強く優しい人になりたい。与えられた運命を真っ直ぐ受け止め、精一杯人生を生きることができる強い人に僕はなりたい。苦しみから生まれた強さをむしろ誇りに、力にして僕だけにしか歩めない道をしっかりと歩んでいこうと思います」

僕はあれからよく空を見る。雲さえくぐり大空を駆け抜け、立ち向かっていく隼が見えるような気がするからだ。あの隼戦闘隊が、春人おじさんが戦った空と同じ空を今僕は見ているのだと思う瞬間、おじさんと僕は時を超え繋がっているのだと胸が熱くなるからだ。時は繋がっている。信念は生き続けている。だから僕はこの夏大切なものを受け取ることができたのだ。

【参考文献】
隼戦闘隊長加藤建夫　檜　與平　著
栄光加藤隼戦闘隊　安田義人　著
ビルマ航空戦　梅本弘　著
実録撃墜王秘伝加藤隼攻撃隊世界最強の戦闘機部隊
田辺節雄　著
太平洋戦争の肉声　文芸春秋

【協力】
修武台記念館　及び案内スタッフの皆さん
河口湖飛行館
熊本の親戚の皆さん

中学生の部
優秀賞

シュトルパーシュタイン

Jakob-Fugger-Gymnasium　二年
チャケ・レオン

それは朝から時折雪が降り、冷たい空気で手が痛いと感じる程の寒い日だった。

この日は両親と一緒で車の点検のために普段は行くことはない場所に向かった。待ち時間が二時間ほどあったため、私達は身体を温める目的で散歩をする事にした。

途中に父が大好きな『万葉』というアウグスブルグで有名な日本食レストランがあり、そこで少し早めの昼食を取る事にした。店主の温かいもてなしと美味しい食事で満足感一杯に店を出た。

そこから車を取りに向かう間の出来事だった。突然足元に金色に輝く数センチ四方のプレートが目にとまり踏まないように避けようとして突っかかり転びそうになった。

よく見ると何か文字が刻まれている。

【ここにはヨハン・ザッティンガーさんが住んでいました。一八九二年生まれ。拘束日は一九三七年三月十一日。拘束の理由は反社会的という烙印（らくいん）を押されたため。収容場所はダッハウ。一九四三年二月十九日にダッハウで殺害される】と記されている。

拘束され殺害される…？彼の住まいはここだった…？

あまりに突然の衝撃的な言葉で頭が思考停止になるような感覚に陥り事態を把握するのに暫（しばら）く時間がかかった。それと同時に大好きな日本食でお腹を満たし幸福感で一杯だった浮かれ気分が一瞬で消し飛んだ。

プレートに降り積もり始める雪を無意識に手で払って

いた。

「これ、シュトルパーシュタインだね。実際には初めて見た。」と母が言った。

元々母はドイツの歴史に興味があり色々自分で調べたいというのも一つの理由でドイツに来た。母に聞けば簡単に事が済むはずだった。いつもの自分なら、そうしていたと思うがこれはそうすべきではないと思い母の言葉をスルーした。そして何故なのか上手く言えないけれど、彼が住んでいたという集合住宅をただじっと見て立っている事しか出来なかった。

彼の事が頭から離れず、家に帰って部屋にこもりシュトルパーシュタインとは何なのか調べることにした。

シュトルパーシュタインとは「躓きの石」という意味がある。一九九二年にドイツ・ベルリン出身のグンター・デムニヒという芸術家が始めたナチスによる犠牲者の為の追悼プロジェクトで、真鍮製の四角いプレートに（ハンマーとポンチを使って手作業で文字が打ち込まれている。そしてそれを辺の長さが九十六×九十六、高さが百ミリメートルのコンクリート立方体で支えられている。

ドイツはもちろんヨーロッパの多くは石畳の道が多い。一見素敵だなと思いがちだが、第二次世界大戦時に迫害されていたユダヤ人達の大切な家族の墓石を壊して使用していたりしたので作者は敢えてモニュメントをこの形にし、石畳に溶け込ませるという表現方法をとった。また、シュトルパーシュタインは道に埋め込むため、故意に踏みつける事も可能になるし、現在その場に住んでいる住民からすれば不快だと感じる人もいるらしい。こういった複雑な背景もあり、この運動は賛否両論あり、思うようには活動が進まないそうだ。それでもオーストリア、ベルギーやフランス、イタリアなどヨーロッパ各地に活動は広まり、二〇二三年五月の時点では十万人目のシュトルパーシュタインが埋め込まれた。

私が暮らすアウグスブルグにも活動を支援するグループがあった。コンタクトを取ってみると、アウグスブルグの何処にシュトルパーシュタインが埋め込まれているのかが分かるマップをくれた。そしてさらに犠牲者個人

の置かれた詳しい状況の情報の資料も貰うことができた。そしてこれらはネットででも公開されている。

私は真っ先にザッティンガーさんのページを探した。

彼は一八九二年一月十七日にドイツとチェコの国境近くの小さな町アムシャムで生まれた。父はレンガ職人で母は主婦だった。小学校を卒業した後それ以上の教育は受けていないと思われる。終戦間際の一九一八年十月三日、カタリーナさんと結婚。その後直ぐに二人の娘が生まれアウグスブルグに来た。

一九二〇年から一九二三年にかけて彼は幾つかの犯罪を犯してしまう。一九二〇年三月三十一日に窃盗の罪で逮捕された。また八月にも密輸の罪で逮捕され八か月投獄される。その後再び不法侵人の罪で六か月服役している。これにより、妻と二人の娘は養護施設に送られる事となった。

服役後、長男と娘が生まれ、四人の父親になったが生活が苦しく市などが運営し、未亡人、病人、単純労働者など低所得者が入る集合住宅に移り住んだ、

一九三三年十一月二十四日に危険な常習犯に対する法律及び安全と矯正の措置が可決された事により、過去に二度有罪判決を受けた者は予防拘留される事、一九四一年からは死刑を科す事までもが合法となった。

これによりナチスの標的となっていた彼は一九三七年三月十一日に逮捕され十三日にダッハウ強制収容所に送られた。

ここで考えてみてほしい。彼は犯罪者だ。しかし果たして彼を何度も再犯を犯した社会のクズだと言えるのだろうか？

当時のドイツは第一次世界大戦で敗北し、多額の賠償金の支払い、ハイパーインフレ、高い失業率などで社会が混乱していた。彼も仕事をしたくても見つからず、妻と五人に増えた子供に与える食事を確保する事も難しかっただろうというのは簡単に想像がつく。

窃盗。いったいどこから物を盗んだのか。町ですれ違う同じ苦しみを持った一般市民からなのか？ナチスのために用意された物に溢れた倉庫からなのか？密輸、不法

侵入に対しても同じことが言えるが、記録には窃盗としか記載されていないので詳しいことは分からないのがとても腹立たしい。

彼の遺族が提供した第一次世界大戦ごろのものと思われる写真の中の彼からは私にはどうしても記録にあるような犯罪者には見えないからだ。

ダッハウ強制収容所では彼はブロック八に収容され、キャリア犯罪者として緑色の三角形の印を着け、一一九〇二番という番号で管理される。

一九三八年五月に設立されたフロッセンブルグ強制収容所（一七四番）、一九四二年七月十八日からはラーベンスブリュック強制収容所（二四五二番）で一九四二年十一月三日に再びダッハウ強制収容所に戻るまで採石場で過酷な労働を強いられた。

帽子、コート、ズボン、ベスト、シャツ二枚、靴下二足、手袋一組、写真二枚だけを所持する事が許された。また囚人たちは安全対策が行われていない中、天候がどうであれ決められた工程の作業をしなければならなかった。そのため事故は日常茶飯事で、寒さ、不十分な食事による栄養不足、親衛隊員による無差別な武力行使により多くが死亡した。

このような過酷な生活で彼も体力を無くし人格を傷つけられた。それは「反社会的者である」という烙印を押された彼らは囚人の中の階層の中でも最下位の扱いだったからだ。

収容所職員はもちろん同じ囚人仲間からさえも信頼されず中傷や侮辱、偏見と拒絶をもって扱われた。

強制収容所は司法当局のいかなる制御も及ばなかった。囚人の生命、生存は親衛隊の管理下にあり彼らの気分次第だった。絶望と恐怖しかない世界だ。

そんな過酷な環境の中でも彼はなんとか生き延び、囚人番号三八五〇六としてダッハウに再び戻ることができた。

しかし、わずか二か月後に病棟に送られてしまう。そしてダッハウに送還されてから三か月半後の一九四三年二月十九日、彼は生涯を終える。

彼の死亡診断書には「腹部チフスによる心臓と循環器系の機能不全」と書かれている。

彼が最後に送られたのはブロック十三、チフスの患者などが押し込められる病人用バラックだった。治療なんて全くされていないだろうという事は簡単に想像がつく。

遺体は焼かれ、骨壺はアウグスブルグ西墓地の墓地番号二十九、列十五、二百七十五の三十四番に埋葬された。

戦後一九五〇年一月八日、未亡人になった妻のカタリーナさんと五人の子供たちは国家賠償庁に「生命と経済的損害」に対する補償を申請した。

ところが一九五五年七月二十八日、彼女と子供達は「故人が当時亡くなっている為あなたの請求に対し答える責任を持ちます。

入手可能な公式文書に基づくと、故人は社会的行動を理由に予防警察に拘留され、一九三七年三月十三日にダッハウ強制収容所に送られたことは明らかですが、あなたの主張には迫害措置との関連性がありませんので資格要件を確認するまでもなく完全に拒否されるものとします。」という決定を受ける。

これが記録されていた彼の人生だった。

最後まで会えないままの妻や子供の事を思い、無念でたまらなかっただろうし生まれた時代が違っていたならもっと違う実りある人生だったかもしれない。自分が今いる環境が如何(いか)に幸せであるのか思い知らされる。

私があの日、彼のシュトルパーシュタインを見つけた事にはきっと何か意味がある。そう思って彼の家族とコンタクトを取りたいと思ったが、彼の家族は誰とも一切のコンタクトはしたくないと表明していた。

そういった理由も深く理解できる。彼の死を受け入れなければならない上に敗戦国となったドイツに被害者として補償などされるはずもなく見捨てられ、世間からは非社会人として偏見と侮辱を受けながらひっそりと暮らしてきた事だろう。今尚残された家族たちはドイツという国に、社会に深く絶望しているのだ。そっとしておいて欲しい。ただただその気持ちなのだろう。

だから場所がわかっているので彼のお墓参りに行くこともできるが、やめておく事にした。お墓は家族のものだから。

ただ私の心は複雑なままだった。彼の事をどうしても整理できないまま時間が過ぎたがミュンヘン郊外にあるダッハウ強制収容所を訪れてみようと決心した。

先ずダッハウという町はミュンヘンの郊外にある小さな町。ダッハウ強制収容所に行くには駅からバスに乗る。閑静な住宅街を抜けると風景ががらりと変わり長い道沿いを走ると着く。

強制収容所とは刑務所や捕虜収容所、難民収容所などとは違い、政治的な理由で裁判を行うことなく強制的に収容するための施設の事。最も有名なのはポーランドにあったナチスドイツのアウシュビッツ強制収容所だが、こういった施設はソ連やアメリカにもあって多くのアメリカ日系市民も収容されていたという事も心に留めておく必要がある。

ダッハウ強制収容所はナチスによって作られた強制収容所の中では最も古い強制収容所の一つで、その後に作られていく沢山の収容所のモデルとなった。

何故ダッハウだったのか。そこは第一次世界大戦時には廃工場を利用し火薬工場だった場所だ。この土地を政権掌握直後にナチ党がSSのために購入したものだったが、強制収容所の設置をヒムラーが記者会見発表したのが始まりだった。

最初の囚人は六十人の政治犯だった。二代所長のテオドー・アイケによって被収容者に対する罰則、管理体制が整えられた。彼が全強制収容所総監になった事によって一気に体系が統一されていく事となる。

【ダッハウ強制収容所を訪れて】

太陽が眩(まぶ)しく爽やかな風が吹きジャケットを持っていくかどうか悩むほど気持ちのいい日だった。

強制収容所の入り口の門に

「ARBEIT MACHT FREI」の文字

アルバイト・マハト・フライ。労働は自由を呼ぶとい

った感じだろうか。強烈な違和感を持たせる言葉だ。
建物は少しだけ残っているからなのか、中に入るとかなり広いと感じた。そして日が当たり静かな空間がそこにはあった。
少し進むと管理棟として使われていた唯一当時の建物があり今はミュージアムとなっている。中に入ろうとした時「十二歳以下の子供には中に入る事をおすすめしません」と書いてある文字が目にとまった。
私はちょうどその十二歳だ。入るかどうか散々迷ったが、私は目から入った情報が脳に鮮明に焼き付いてしまい、それが悪夢となってうなされるという事が多々あるためミュージアムに入る事は断念した。
その代わりに説明文と衝撃的ではない写真を父に撮ってきてもらうことにした。
内部の一部が当時のままの状態で残されており、くすんだ壁には喫煙禁止と書かれている。これは当時連れてこられた囚人達が最初に集められる部屋で、服を脱がされ髪をそり落とす準備をするための場所だったからだ。外は明るくすがすがしいのに対して薄暗くところどころ剥げている文字の感覚が私を何とも言えない気分にさせた。
被収容者の識別用ワッペンの表の写真。赤は政治犯、緑は職業的犯罪者、黒は障碍者、薄紫は新興宗教の信者、ピンクは同性愛者や性的異常者、茶色はロマ。どの場所にどう付けるのかまで細かい指示がなされている。ザッティンガーさんが付けさせられていた緑のワッペンに目がとまる。ダッハウに来て彼を近くに感じた瞬間だった。
強制収容所だった現在の敷地は主にミュージアム、モニュメントがあり並木道を挟んで左右にずらっと並ぶバラック跡地、奥に教会と焼却炉がある。そして周囲は有刺鉄線で囲われている。
どこの収容所にもあった点呼広場跡を見ている。この場所ではどんな天候であれ必ず朝と晩に点呼が行われた。約一時間直立不動の状態で立たされる。体力を無くし倒れる人がいても助ける事は出来なかった。また、死者を数えるために遺体を引きずって点呼場まで連れて来

なければならなかった。

囚人の数が記録と合わない場合や、脱走を試みようとした者がいれば全員が何時間もの間立ち続ける事を強いられ、罰を受ける者は皆の前で拷問を受け続けた。

見学することができるバラックやトイレなどは戦後に再現されたものではあるが、プライベート空間など何も存在しないトイレで一〇秒足らずで用を足さなければ処罰の対象となった。また蚕棚のように見える粗末な木製ベッドに五人以上で休まなければならないという窮屈さなど自分もその場に居るかのような感覚をリアルに想像できた場所だった。

私はザッティンガーさんが収容されていたブロック八と亡くなった十三を探した。現在は番号の付いた基礎土台のコンクリートだけが残っている。その場で私は静かに彼のために手を合わせた。

当時バラックは三十六棟あり、彼が最後に入っていた病人用棟や人体実験用棟もあったという。

ダッハウ強制収容所は終戦間際には沢山の一般ユダヤ人も送られてきたが、ユダヤ人の囚人は三分の一程だった。

ダッハウでは主に過酷な労働とドイツ空軍のための人体実験が行われていた。

例えば高度の低気圧にどこまで耐えられるのかといった実験やパイロットが海に不時着などした場合に冷たい海水の中でどれだけの時間耐えられるのかなどに加え、救命するためにはどういった医療処置が行われるべきかという実験だ。

そしてこれらの実験にユダヤ人を選んでいる。記録は細かく収められており現在の医学に実際役立てられているという事実が何とも皮肉な話だ。

バラックの向こうには監視塔がある。収容所の周りを有刺鉄線で囲っているが、内側にある芝生のグリーンゾーンに侵入した時点で射殺された。

毎日地獄の日々で疲れ果て精神に異常をきたし、もう死にたいと願い自ら有刺鉄線に飛向かって飛び込んだ囚人も多かったのではないかと思うと胸が痛い。そんな囚

人たちの気持ちとは対象的に監視員は高台から狩りを楽しむかのようにわざと外しながら時間をかけて射殺する。こんな惨い事がほんの数十年前に私が今立っているこの場で実際に行われていたなんて虫唾(むしず)が走る。

囚人達が植え、短い自由時間に集まる場所だったバラックの間にあるポプラの並木道を抜けて最後に向かった場所は焼却炉だった。

私の心はもう耐えられない程ギリギリだったが、ザッティンガーさんはその場所で焼却されていると読んだ資料にはあったので覚悟を決めた。

川の上に鉄線が張られている。小さな橋を渡り木立に囲まれているためまるで隠されているかのように見える。

この建物は当時バラック×と呼ばれておりガス室と焼却炉がある。

建物の奥にはトラック用のコンテナのような空間の両側に鉄の扉が付いていた。この場所ではツィクロンBというガスを用い収容所内で深刻な問題となっていたシラミ媒介チフス対策のための消毒処理が行われていた。

その隣の待機用の部屋、脱衣所を抜けると「BRAUSEBAD」と書かれた頑丈な鉄製の扉がある。ブラウゼバートと言ってシャワーバスという意味だ。

しかしシャワー室というにはかなりの違和感がある。囚人がパニックを起こさないためにと偽のシャワーヘッドが付けられ、一見窓に見えるものは内側が網目の鉄枠で外側には何かを入れるための鉄製の引き出しが付いていた。

反対側の扉を抜けると死体安置の部屋があり、遺体を焼却する焼却炉室へと続く。

シャワー室の手前の部屋で服を脱ぎ、シャワー室という名のガス室で殺される。そしてそのまま焼却される。

このバラック×は一九四三年に完成している。このことから推測するにドイツの戦況がまずくなる一方の時期だった。そのため敗戦後に備えナチスは残り少ない限られた時間の中で多くのユダヤ人が置かれていた環境の事実を隠す必要があっただろうという事だ。そう考えれば

恐ろしいほど合理的なシステムを作り上げている。

元々空軍のための人体実験や強制労働が主な収容所だったため、一般のユダヤ人は少なかったという事も関係しているかも知れないが他の強制収容所とは違い、ダッハウ強制収容所ではガス室による大量殺人はなかったと言われている。

だがこれは一般市民のユダヤ人が送られてきたのが敗戦間際だったためガスが不足していただろうし、ナチスの管理体制も崩壊しつつあり計画を遂行する時間も統制も取れていなかったという可能性が高いからではないかと推測する。

ダッハウ強制収容所の囚人の多くは人体実験に利用されたユダヤ人を除き、主に過酷な労働による過労や栄養失調、チフスなどで命を落とした。ザッティンガーさんもそのうちの一人だ。

焼却炉では二十四時間フル活動で複数の遺体を同時に焼いていた。

だがそれも戦争がドイツ不利に向かうにつれ収容所内の衛生状態が悪化し、チフスの流行と飢えで亡くなる囚人が一気に増え遺体の焼却が追いつかなくなった。

ダッハウは一九四五年四月二十九日にアメリカ軍によって解放された。この時彼らが見たものは至る所に山積みになった遺体で吐き気を催す惨状だったという。

火葬という言葉は死体を焼いて残った骨を葬る事、荼毘（だび）という意味で焼却とは焼き捨てる事。犠牲者はみな弔われてなどいない。火葬などしてもらっていないのだから私は敢えて焼却という言葉を使う事とする。

ザッティンガーさんはアウグスブルグ西墓地で眠っている…はずだが。

彼は一九四三年初めに亡くなっている。確かドイツは一九四三年の後半には完全な劣勢の立場だったはずだ。彼がダッハウに戻った時には既に衛生状態のコントロールが効かなかったのかもしれない。

そう考えると疑問を持ってしまう。たとえ遺灰だったとしても家族の待つアウグスブルグに帰ることが出来たのだろうか？

ただせめて彼はアウグスブルグに戻れたのだと願いザッティンガーさん家族のために涙を流す事しかできなかったが、私の心の区切りはついたように思う。

正直に言えば今の私には背負いきれない重すぎる経験だった。見学中は皆無言で家族と会話をすることさえなかったが、ドイツ人である父はどんな思いで付き添ってくれたのだろう。できるなら避けたい場所だったかもしれない。

ただ、父に限らずドイツ人は皆いずれ向き合わなければならない。

私の学年ではまだプログラムに入っていないが、生徒は事前にクラスで十分学び、討論した上で必ず訪れる場所だからだ。

ダッハウ強制収容所が解放された後、SSなどの収容者は生き残った囚人達にリンチで殺されたりアメリカ解放軍によって銃殺、絞殺されたりした。また、ダッハウの市民が集められ、亡くなった無数の囚人達の埋葬や片付けを強制された。

この時、ダッハウの市民は虐殺があった事は知らなかったと抗議したそうだが受け入れられなかった。

本当に知らなかったのか?信用し難い。

毎日毎日焼却炉からでる腐敗臭のする煙に対し抗議していたではないか。銃声だって何度も何度も聞いていたはずだ。

ドイツ人は皆今度は自分たちが追われる番だという事をわかっていただろうから身を守ることに必死だったのだろう。

戦争とはそういう空しいものだ。

だが今は違う。　戦後から今まで長い時間をかけてドイツは過ちを認め謝罪し賠償金を払い終えてもなお国全体で過去の負の遺産と向き合っている。各国間での賠償金の問題や、犠牲者とその家族からの許しについては解決する日は決してこないだろうが、ドイツには向き合う姿勢と努力を見せ続けていく義務がある。

あの日、偶然ザッティンガーさんのシュトルパーシュタインを見つけた。ミュージアムに入る事さえできなか

った私にはナチスドイツの蛮行と向き合うにはまだ早すぎたように思う。だけど、これから先ドイツが犯した罪と向き合わなければならないという覚悟のようなものは持てたとはっきり言える。

最後にナチスドイツの犠牲となった方々のご冥福をお祈りいたします。

参考資料

Stolpersteine-Liste-Augsburg
KZ Gedenkstätte Dachau

中学生の部
選考委員特別賞
あさのあつこ賞

人生作家

上越教育大学附属中学校　三年
林　翠恋

人はよく、「生きていれば何とかなる！」、「あなたが死んだらみんなが哀しむ。だから死なないで！」と、よくネットで発信していると思う。

だけど、スイはどの答えも「違うな～」って思う。納得できる答えが見つからない。

だから、スイが今までの人生を通して、自分なりの答えを見つけ出してみようと思う。

中二の五月。下校中の空は青かった。空の青さに見惚(と)れていると、今までずっと心の奥底に隠していたものが、ブワッと心の容器から溢(あふ)れ出した。その瞬間、目からこぼれ落ちそうな程の、涙が湧(わ)き上がってくる。

なぜ？どうしてスイはないているの？ちゃんとした理由が見つからない。でも、「寂しい」と言う言葉だけが、頭の中を支配する。

その時思い出したのは、今は亡きかか(母)の姿だった。

新学期が始まり、新しいクラスに慣れるのに必死で、自分のストレスなんて考えている余裕はなかった。

知らず知らずのうちに溜(た)まっていったストレスにより、かかの温もりが恋しくなったのだと思う。スイはいつまで経っても、かかが大好きな赤ちゃんのままだった。

周りには下校中の中学生が大勢いる。バレないように、涙がこぼれ落ちないように、また青い空を見上げて歩き続けた。

昨日下校中に泣いてから、憂鬱(ゆううつ)な気持ちが収まらない。

どうしようもなく学校に行きたくない。

でも、それをどうやってトト（父）に伝えよう。普通に「行きたくない」だけじゃ、休ませてくれない。

小学五年生の時も、学校に行くのが辛くて、毎日のように、

「学校行くのヤダ」

「行きたくない！」

と、トトに訴えていた。それなのにトトは理由も聞かず、ただ、

「行け」

とスイに言うだけ。辛かった。

だから、今回はどうやって訴えればいいのか分からない。そう考えているうちに、家を出る時間まで、あと五分しか残されていない。

洗面所でトトが顔を洗っている。言うなら今しかない。スイは扉から少しだけ顔を出して、トトを呼ぶ。

スイは「学校に行け」と絶対に言われたくなかったので、何も言わずに泣いてみた。そしたらトトが心配そうに、

「ん？どうした？」

と言ってきた。トトの言葉は、思いのほか優しかった。

「えっ、どうしよう。どんな言葉を発すれば、この気持ちが伝わるの？」最初は軽い気持ちで泣いてみたのに、どんどん悲しくなってくる。

もう声なんか出ない程、涙が止まらない。昨日は目から溢れないように、我慢できたのに。何でこんなに泣いているんだよ。

トトにどうしたいのか聞かれても、何も答えなかった。ただ、

「学校やめとく？」

と言う求めていた言葉が出た時は、首を縦に振った。今日は学校を休む。

家にいるジジ（母方の祖父）、ババ（母方の祖母）にバレないように、静かに階段を上り、子供部屋に入った。体が思うように動かず、ベッドの手前で座り込んでしまった。

数分後、玄関にあったスイの靴を見つけたババが、部屋の扉を叩いてきた。
「ドンドンドンッ！」
今にも鍵をこじ開け、中に入って来そう。怖い。怒られてしまう。
スイは泣き続けることしかできなかった。
翌日の朝。トトにしつこく
「何か嫌な事あった？」
「学校でいじめられた？」
と質問攻めされた。
何がスイをここまで追い詰めたのか、自分でも分からない。ちゃんとした理由なんてものはない。だけどあまりにもトトがしつこくて、何か答えないと一生聞き続けられるかもしれない。
だから、スイは何となく「友人関係」とだけ答えた。嘘はつきたくなかったが、こんな答えしか思いつかない。
罪悪感と共に、今日も休んだ。

三日ぶりに学校に行った。授業が大分進んでいて、よくわからない。
昼休み。担任の先生に、話があると呼ばれた。何を聞かれるのか、内心少しワクワクしながら後をついて行く。誰も居ない部屋に入り、椅子（いす）に座った。
「仲良い友達いる？」
と担任が聞いてくる。その時思った。「あ、父親のヤツ、担任にチクりやがったな？」
「余計な事しやがって！」と言う気持ちは抑え、
「はい、います。」
と質問に答えた。すると、
「じゃあ、一番仲良い子は誰？」
みたいな事を言ってきた。ん？どういう意味？理解ができなくて、自分の耳を疑った。
スイはこの質問に、どうしようもなく腹が立った。担任に悪気が無いのは分かってる。でも、「そういう事じゃないだろ？」と思ってしまう。
一番の子を聞いてどうするのか。スイは友達に順位を

つけるのが嫌で、ずっと黙っていた。でも担任も、スイが答えるまでずーっと持っている。

この地獄みたいな空気が怖くて、今にも泣きだしそうになる。何なら、後ろにある窓をぶち破って、逃げ出してやろうか。

この質問から担任の事が大嫌いになった。この一件は、トラウマになり、スイの心に黒いモヤとして残ることになる。

嫌いな担任を、なるべく見ないように生活し、一学期が終わった。夏休みになれば、嫌いな担任に会わなくて済む。それが一番嬉しかった。

夏休みは毎日部活三昧。夏休みなのに全然休めない。

三年生が引退して、二年のスイ達が部活を回さなきゃいけない。部長を決めるために、毎日交代で仮部長の役割が回ってくる。正直にいうとめんどくさい。

スイは毎日部活に行くのが、より一層憂鬱になった。いつスイに仮部長が回ってくるのだろう。

その頃家では、ギスギスした空気が流れていた。スイは家を引っ越さなきゃいけない。

かかが死んでから、家族仲は最悪だった。ジジ、ババ、トトの喧嘩が増えた。

かかが居た時、トトは一人じゃなかった。でも「かか」と言う守護者が消えた事で、トトは誰にも守ってもらえなくなった。

ある日、父方の親戚達と夜ご飯を食べる約束をしていた。夜外食するから、トトが

「夜ご飯はいりません。」

とババに連絡したらしい。

でも、学校から帰って来ると、キッチンのテーブルには、オムライスが家族全員分ある。あれ？ちゃんと連絡してなかったのか。

「トト、オムライスあるよ…」

スイは少し気まずそうな顔をし、小声でトトに告げ口し

た。
　すると、トトのスイッチが「カッチーン！」と入ってしまった。キッチンに大股で向かい、テーブルに居るババに向かって言う。
「今日いらないって言いましたよね？」
少し怒り口調のトト。そこまで怒ることじゃないから、スイは怖かった。
　制服から私服に着替える為に、二階に上がる。予め決めていた服に着替え終えると、ジジ、ババ、トトの言い合いがヒートアップした。
　さっきまで今日の夜ご飯の話をしていたのに、いつの間にか、トトへの悪口に変わっている。
「いつもそうだ！〇〇君は何も言わない。大事な事を話さない！」
　ジジが大声で怒鳴っている。この声を聞いた時、心臓が一瞬跳ね、体が動かなくなった。
　ジジの熱は治まらず、熱がババにも飛び火して、トトを責め立てる。
　耳を手で塞ぎたい。喧嘩を止めたい。トトを守りたい。でも、スイの体は全く動かない。トトを助けてあげられない。今スイが耳を塞いだら、トトは一人ぼっちになってしまう。
　それだけは絶対にできない。トトを一人にしたくない。だからちゃんと聴かないと。聴き続けないと。
　家族がどんどん腐って行く。暴言を発する度に、黒紫色に染まって行く。
「もう出てけ！この家から出てけ！」
ジジが言い放った。後先考えず、一時の感情に任せて言い放った。
「ああ、出て行きますよ！」
トトは考える間もなく、スパーンッと言い返した。
　スイ達は邪魔なの？もういらないの？我慢していた涙が零れ落ちる。
　後で言った事を後悔しないのか。スイはジジが心配になった。
「やっぱり出て行かないで！」と引き止めてほしかっ

た。スイはその言葉を待っている。
でも、ジジは何も言わなかった。

家族が壊れた。何で?どうしてこうなったの? ぐるぐると頭を回転させ、答えを探す。

「あれ?スイのせいじゃん。」
スイがトトに、オムライスの事を告げ口しなければ、こんな事にはならなかった。後先考えずに発言したのは、自分だった。
ジジじゃなかった。悪いのはジジじゃない。スイが全部悪いんだ。

トトはもう、出て行く気満々だった。そんなにこの家が嫌いだったのか。弟は
「本当に出て行くの?」
と不安がっている。でもトトは意見を曲げない。トトもジジと同じで頑固だった。

スイは本当は出て行きたくない。この家が大好きだ。でも腐った家族とは、一緒に住みたくない。もう喧嘩する声を聞きたくない。トトの悲しい顔は見たくない。
スイが我慢すれば、トトは笑ってくれるかな?
スイ達はじいちゃん（父方の祖父）、ばあちゃん（父方の祖母）が住んでいる、トトの実家に引っ越すことになった。人生初の引っ越しで、ちょっと楽しみ。
あの喧嘩の日以降、トトは着々と引っ越しの準備を進めている。引っ越し先の家では、一人一つ自分の部屋が持てる。でも、
「壁が黄ばんでいて嫌だ!」
とスイがわがまま言っちゃった。
そしたら、壁をペンキで塗装してくれた。スイの好きな水色に! 小汚いカーテンも、可愛(かわい)い水色の新品に変えてくれた。スイは好きな色に囲まれて幸せだった。

最後の荷物を取りに、ジジ、ババの家に戻った。もうほとんど物が無くなっている。

スイは掃除機で、子供部屋のごみを吸い取っている。思い出まで吸い取られて、消えて行く。もう何も無いよ…

帰り際、ババに早めの誕生日プレゼントと言われ、一万円を貰った。

だけど、素直に喜べない。顔を見て「ありがとう」と言えない。ハグをされたが、両手で突っぱねてしまった。ずるいよ。やっぱり恨んでしまう。トトを傷つけた事。「出てけ」と言われた事を根に持ってしまう。

モヤモヤした気持ちを抱えながら、引っ越しが完了した。

部活の日に、引っ越したことを友達に話した。腐った家族の事は話せるわけないので、引っ越した理由は言わない。

スイの部屋の自慢。キラキラしたところだけ、笑って話した。だって、綺麗なままのスイでいたいんだもん。

真夏の部活は焼き焦げる程に暑い。夏休みは自分の種目、ハードルの練習が多い。

一年の頃はずっと最下位。でも二年になると体力がついて、少しだけ足が速くなった。

ハードルは人気がなく、部活内ではスイ一人だけ。なので練習中の話し相手がいない。何度も何度も同じ練習を繰り返すので、段々と気が狂ってくる。

ハードル間の歩幅を少なくする練習をしているが、なかなか上手くいかない。

顧問の先生がたまに見に来るが、「成功させないと！」と言うプレッシャーに押し潰される。先生にアドバイスを貰っても、難しいものは難しい。

「ぁぁぁぁー！もう、何でできないんだよぉぉー！」と心の中で叫ぶ。そうすると悲しくなったり、イライラしてくる。感情のジェットコースターに乗って、涙が運ばれてくる。

みんなに泣いているところを見られたくないので、タオルにうずくまる。

部員のみんなは走り続けている。みんなは暑い中頑張っているのに、スイは日陰で泣いてるだけ。仲間の辛そうな顔をみると、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

引っ越しから約一か月。この家も、家族も嫌いになりかけている。

この家は「ご飯は必ずみんなで食べる！」と言う決まりみたいなものがある。だから毎食、

「ご飯だよーーー！」

と大声で呼んでくる。スイはそれが苦しく感じてしまう。

食事中も気が休まらない。ばあちゃんは、

「これもあるよ！」

「これいる？」

と食べ物を勧めてくる。自分のペースが崩されてしまう。

そして、じいちゃんはクチャラー。「もぉ、うるせーよ！」って叫びたくなる。

でも引っ越して来た者の分際で、文句なんか言えない。生活させてもらって、ご飯まで作ってもらっているんだから。

じいちゃん、ばあちゃんの機嫌を損ねさせてはダメだ。いつ「出てけ」なんて言われるか分からないから。

じいちゃんを嫌いになった、決定的瞬間。弟が朝、じいちゃんが見ていたテレビを横取りした。じいちゃんはスマホを構いながら、テレビを聴いている。

じいちゃんがスマホに気を取られている時、弟がアニメを観ていいかと聞いた。

「あぁ。」

とじいちゃんは曖昧（あいまい）な返事を返した。弟がアニメに変えると、

「何で変えたんだ！じいちゃんテレビ観てたのに！」

と弟に注意した。でも弟は

「さっきいいって言ったじゃんｗｗ」

とじいちゃんを煽っている。これは反抗的な態度をとった弟が悪い。

じいちゃんが弟に、大声で怒鳴り始めた。感情のまま

に、怒りを弟にぶつける。じいちゃんがこんなに怒るのは初めてだ。

弟も反論するが、じいちゃんの圧によって潰される。半泣きで自室に逃げて行った。

トトが外から帰って来ると、じいちゃんがさっきの事を、トトに告げ口した。多分自分が有利になるような証言をしたんだろう。トトが弟に、下に降りて来るよう呼んでいる。

じいちゃんが、

「目上の人にする態度じゃないだろ！」

と弟に怒る。ん？矛盾してないか？

じいちゃんは六十歳も年下の子供に対して、大人気ない怒り方をしていたじゃないか。自分の感情を何の惜しみもせず、弟に投げつけた。

おかしいでしょ？弟が先に吹っかけた喧嘩だけど、大人ならちゃんと「叱り」なさいよ。怒るより先に、叱りなさいよ。

「このジジイの方が子供じゃないか！」と、スイまでイライラしてくる。

だが、言い争いは終わらない。二階にいるスイがイヤホンで耳を塞いでも、割り入ってくる大声。

やめてくれよ。大きな声出さないで。喧嘩しないで。家族が腐っていくのは、もう見たくない。前の家での大喧嘩と重ね合わせてしまい、悲しくなってくる。

もう泣かせないでよ。

憂鬱な二学期が始まった。嫌いな担任との再会。難しくなっていく勉強。定期テスト。授業中ゲームをしている男子達。記録を伸ばしたい部活動。帰りたくない家。

できる事なら学校には行きたくない。だけど、行かなきゃダメらしい。

二学期の定期テストでは、なかなかに良い点数が取れた。結果をトトに自慢するが、イマイチな反応しか返ってこない。

「凄いでしょ!?スイ凄いでしょ？」

と、無理矢理にでも「凄い」という言葉を引き出させよ

うとする。そしたら、ちゃんと褒めてくれた。

スイにとって定期テストは、誰かに褒めてもらうための、道具なのかもしれない。

テストで良い点数を取ったら、ジジもババも、

「凄いじゃん！よく頑張ったね！」

と本気で褒めてくれる。それがスイは本当に嬉しかった。

でも引っ越した事により、ジジ、ババの言葉が直接聞けなくなった。ＬＩＮＥの文字だけでしか「凄い」と言ってくれない。

スイの頑張りが全然評価されていない気がする。心の隙間が埋まらない。

もっと頑張らなきゃダメなのか。

九月、十月はたくさん学校を休んだ。引っ越しによる、ストレスを溜め込みすぎたのだと思う。

何日か休んで学校に行くと、授業が大分進んでいる。特に数学と理科にはついていけない。

理科は自分で考えて、答えを見つける授業だった。難し過ぎて意味がわからない。ネットで調べても、理解ができない。

他の子は、友達と意見を言い合ったりしている。何だかスイだけ置いてきぼりにされているみたい。みんなよりできていないのが悔しい。全くわからないのが怖い。

段々涙が出てきて、目から溢れさせないようにするので必死だった。泣いている弱いスイは見せたくないから。

数学では、一人ずつ順番に答えを発表する時間があった。答える順番が、どんどん近づいてくる。みんなはスパッと答えられている。

スイに順番が回ってきたが、答えに自信がない。先生がヒントをくれたが、緊張して声が出ない。

早く言えばいいのに。でも今声を出せば、一緒に涙まで出てきてしまう。みんなに注目されながら泣くのは嫌だ。

スイは結局何も答えられなかった。授業の数分を無駄にしてしまった。

先生や、みんなの求めていることができない。今すぐにでも、この教室から出て行きたい。誰も居ない場所に隠れたい。でも今は授業中。逃げる事は許されない。

数学の先生の言っている事が頭に入ってこない。

「何でできないんだよ！」

「この出来損ない！」

「お前なんていらねぇよ！」

クラスのみんなが、スイを睨(にら)みながら罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びてくる。

でもこれはスイの被害妄想で、現実では誰もこんな言葉を発していない。妄想だと分かっているが、スイを責め立てる言葉は止まらない。妄想上の罵詈雑言で、スイの頭は支配されている。

数学が終わり、次の授業が始まる。グループワークで、四人向かい合って座る。

みんなで意見を言い合っていたが、スイは全然頭が回らない。数学の事を引きずって、気分が晴れない。何を聞かれても、曖昧な返事しかできない。

ずっと暗い気持ちでいたら、勝手に涙が出ていた。「あれ？何で泣いてるの？」自分でもよく分からない。

斜め前に座っている男子が、スイの方を見ている。

「ヤバイ！泣いちゃダメ、泣いちゃダメ！」

どんなに自分に言い聞かせても、涙は消えてくれない。

恥ずかしい、スイの姿を見せてしまった。あの男子はどう思っただろう？

全ての授業が終わった。放課後になると、いつもならすぐ部活に向かうが、今日はトイレに急いだ。

一番奥の個室に入り、押し殺していた感情を全て出す。何が悲しいのかよく分からないが、とにかく泣きたかった。生まれたての赤ん坊の様に、わんわん泣きたかった。

体中の水分が枯れるまで泣くと、少しだけスッキリした。

十五分くらい経つと、スイ以外の人はトイレからいなくなっていた。

部活を初めてサボった。みんなスイの事を心配してい

るだろうか？顧問の先生は怒っているかな？…そんなわけないか。スイはいても、いなくても変わらないもんね。忘れられているよね。ちょっと寂しいな。

秋のトイレは結構寒い。手は冷たくなり、紫色に変色している。地面にしゃがんで、体をギュッと小さくする。こっちの方が、立っているよりも寒くない。

これからどうしよう。部活には行きたくないし、帰りの車はまだ来ない。んー、保健室に行くか。保健室なら、スイを匿ってくれるかもしれない。

廊下に誰もいないのを確認して、トイレから脱出した。保健室には保健の先生が居て、

「どうしたの？」

とスイに聞いてくれた。スイは保健の先生に頼んで、スクールカウンセラーさんを呼んでもらった。

スクールカウンセラーのKさんとは、前に少し話した事がある。Kさんにだったら相談できるかもしれない。

Kさんに今日の出来事を話した。Kさんは

「うん、うん。そっかぁ。それは辛かったねぇ。」

と優しく話を聞いてくれた。

スイの言う事全てを肯定してくれる。こんなに優しい人と会うのは、生まれて初めて。

家族に何か話しても否定され、馬鹿（ばか）にされてきた。Kさんは家族以上の優しさで、スイの全てを受け入れてくれた。

Kさんと話していると、暗い気持ちが少し和らいだ。Kさんがスイを笑わせてくれるから。

数学の時間で、スイが答えを言えなかった事をはなすと、

「わからないって言ってもいいんだよ。」

とKさんが教えてくれた。

スイ以外の人はこの事を、「当たり前だろ？」と思うかもしれない。でもスイにとってこれは、大きな発見だった。

スイは絶対に間違った答えを言いたくない。それに「わかりません」と、みんなの前で発表して、

「こんな簡単な問題もわからないのかよ！」
と、馬鹿にされないか不安だった。だから「わからない」って言えなかった。
でもKさんのおかげで「わからない」と思う自分を、少しだけ受け入れる事ができた。

土曜日。久しぶりに部活に行った。最近学校を休んでばかりで、体が鈍っている。
ハードルの練習では、体が重くて上手く跳べない。できない自分にイライラしてきて、指をぐしゃぐしゃ動かし、親指を引っ掻き続けた。
ハードルを三、四台跳んだ後、スタート地点まで歩いて戻る。その時、誰かから見られている気がした。誰もスイを見ていないが、謎の圧迫感が迫って来る。黒いモヤに囲まれている感じ。
怖い。胸を張って歩けない。息を吸っても吸っても、酸素が入ってこない。
怖くなったスイは、頭からタオルを被(かぶ)って深呼吸をした。上手く跳べれば、こんなにイライラしたり、過呼吸になる事はないだろう。
全ては上手く跳べない自分が悪い。

五分程休憩すると、気持ちと呼吸が落ち着いてきた。
また跳び始めようとした時、顧問の先生がスイの走りを見に来た。先生に見られながら跳ぶのは怖い。失敗なんかできない。上手く跳ばなきゃ。成功させなきゃ。
先生がいる時間は、地獄の様だった。

長かった部活の練習が終わり、帰る準備をする。
いつもならみんなすぐに帰るが、今日は女子達が長話をしている。一緒に帰る友達もみんなと一緒に盛り上がっている。一人で帰るわけにはいかないので、終わるまで待つことにした。
数分後、またイライラが始まってしまった。女子達は楽しいそうに笑っているが、スイは全くの無表情である。
「早く終われ！。終わってくれー。」と心の中で念じる

が、話は一向に終わる気がしない。

もうやばい。もうやばい。頭がパンクする。体をゆらゆら揺らして、何とか気を散らそうとするが、全く意味がない。もう無理。もう耐えられない。

スイは逃げる様にその場から出た。

「あぁぁぁぁ！」とその場で叫んでうずくまりたい。「助けて」と誰かに助けを求めたい。でもそんな事をしたら、周りから変な目で見られる。

後ろを振り返ったら、友達が追いかけてくるかもしれない。怖い。捕まりたくない。

恐怖心からスイは走り出した。

人生で一番速い全力疾走をかます。走っても走っても、恐怖心は追いかけて来る。スイとの距離をどんどん縮めてくる。

警察に追いかけられている。殺人犯の気分だ。息が上がって辛くなるが、走るのは止めなかった。足を止めれば捕まってしまう。

この日を境に、スイは学校に行く気力を無くしてしまった。

休日が終わり、月曜日になる。この日は耳が痛くて病院に行き、学校に遅刻した。

学校に向かう車内でスイは、

「学校行きたくない」

とトトに言う。でもトトは

「だめ。行きな。」

とスイを半強制的に学校に行かせた。

校舎に入っても、全然気分が上がらない。教室には誰も居なくて、移動教室の授業だった。

誰も居ない教室で、スイは考えた。みんなの所に行こうか、授業をサボろうか。みんなの所に行くのが正しいが、「行きたくない」と足が前に進まない。

ボーッと窓の外を眺めていると、変な事を思いついた。

「窓から飛び降りているところを、動画で撮影しよう」

教室には飛び降りを止める「人」が居ない。

絶好のチャンスだと思った。窓に近づき、よじ登ろう

とする。その時、廊下を歩く先生の足音がした。やばい！見つかる。スイは咄嗟に、机の陰に隠れた。

邪魔をされた事により、冷静な自分に戻ることができた。どうして飛び降りようと思ったのだろう。まるで、誰かにマインドコントロールで操られている様だった。

授業の終わりのチャイムが鳴った。このままだと教室にみんなが戻ってくる。姿をみられたら、逃げるチャンスを失う。スイは急いでトイレに隠れた。

十分間の休み時間が終わるが、スイはまだトイレに籠っている。これからどうしよう。今更教室には戻れない。

あーでもない。こーでもないと考えていると、誰かがトイレに入って来る音がした。

「翠恋さんいるー？」

学年主任の先生だ。スイは人感センサーに反応されないように、動きを止めた。

どの個室にも電気が点いていないのを見て、学年主任はトイレを出て行った。

緊張から解放されて安心すると、少し動いてしまった。すると、パッ！とスイの個室の電気が点いてしまった。

やらかした。しくじった。もう一度トイレに戻って来た学年主任にバレてしまった。

「翠恋さん…翠恋さんいる？大丈夫？翠恋さん⁉」

と問いかけてくる。スイは何も答えなかった。

そしたら「ドンドンドンッ！」と、ドアを叩いてきた。驚きと怖さで、体が氷の様に固まる。

借金の取り立てに来たヤクザかと思った。もっと優しくドアを叩けばいいのに。

先生がスイの捜索をしているんだから、流石に出頭しないとヤバい。

トイレから出た時、カウンセラーのKさんと保健の先生が居た。スイを見つけると近くに寄って来て、スイの背中をさすってくれた。

「心配したんだよ。」

Kさんがスイに言う。Kさんの顔はものすごく不安そうだった。でも本当に心配してくれているから、スイは少し嬉しかった。

そのまま学校を早退して、家に帰った。もう何もやる気が出ない。制服のままベッドに崩れ、眠りに落ちた。

この翌日から、スイは学校に行かなくなった。近々定期テストがあるが、もう諦める。テストを受けなければ、中途半端に悪い点数を取ることはない。初めからやらなければ、何も残らない。

スイは毎日、ベッドの上でスマホを構っている。「不登校」や「精神的な病気」などを検索して、自分が当てはまるか確認した。

憂鬱感や勝手に涙が出る症状は、「精神的な病気」に当てはまった。

「スイは悪くない」「全部病気のせい」と思うと安心できる。誰かに認めてもらえた気がする。

「不登校」についてSNSなどで調べ、同じ様な人を見つけると、少し嬉しくなった。「スイは一人じゃない」ってなぐさめられている感じ。でもこれは、自分に都合の良い情報ばかりを切り取って、現実から逃げているだけ。

わかってる。わかってるよ。でも逃げたいんだ。

十一月二十二日。トトがスイの敵だと知る。夕飯の時、トトが学校の話をしてきた。「テストを受けた方がいい」って。どうにかスイに、テストを受けさせようと、言い包めてくる。

「勉強が嫌な人はいっぱいいる。」

スイと他人を比べてきた。スイの気持ちを考えてくれなかった。裏切られた気がして悲しくなる。

この時「もうこいつはダメだな」と、スイは諦めた。トトに何を言っても無駄だ。

スイは自室に逃げ鍵を閉めた。家族にスイの苦しみを理解してもらえない。誰も助けてくれない。床に土下座をするようにうずくまり、泣いた。

するとトトが部屋の前まで来た。扉には鍵をしてあるから、入ってこないと思った。

でもトトは違った。鍵を開けて中に入って来た。

何を言われるか分からない恐怖で怯え、耳を塞ぐ。トトはスイの心の中に土足で上がり込んできた。この世の全てがスイの敵。もう誰にも頼らない。

もう誰にも…頼れない。

この世の全てが敵に変わると、スイの被害妄想はより一層酷くなっていった。

トトが扉からではなく、ベランダから侵入してくるのではないか。じいちゃん、ばあちゃんがスイの悪口を言っているのではないか。笑顔で話しているが、スイに死んで欲しいと思っているのではないか。…こんな事ばかりが頭を埋め尽くす。

次第に現実と妄想の境目が分からなくなり、幻聴、幻覚が始まる。

誰も話していないのに、「ごはんだよー」が、カエルの歌方式で聞こえてくる。耳を塞いでも、その声は聞こえ続ける。

幻覚では、人の体に漫画の吹き出しが付いていて、そこにスイの悪口が書いてある。思い込みかもしれないが、スイにはそう見えた。

おかしな事が毎日続くから、イライラや、モヤモヤした黒い気持ちが溢れてくる。その黒いモヤモヤを消す為、スイは物理的に取り除こうとした。

いわゆる「自傷行為」と言うやつだ。

顔、首、腕、指を引っ掻く。頭、顔、腕、腹、机を殴る。そんな事をして、自分に傷を付けた。

感情が爆発すると、無意識的に行なってしまう。痛くて辛いが、その分心が軽くなる。

これしか、スイを救う方法は無かった。

十二月になると昼夜逆転し、深夜の爆食が始まった。夜は唯一、スイが生きていてもいいと思える時間。みんなが寝ていて安心できる。

ドラマを見ながら、お菓子を食べる。最高の時間だ。食べている間は何も考えなくて済むもん。

毎日こんな生活を送っていたら一、二ケ月で五～八キ

ロ程太ってしまった。体中に脂肪が付き、動きづらい。顔も肉で膨れている。今のスイはものすごいデブだ。スイが一番なりたくない姿になっている。

鏡に映る自分を見る度に、「太ったスイは生きてはいけない。痩せていないスイに、価値はない。」と思うようになった。

一月の終わり頃。久しぶりにスクールカウンセラーのKさんに会うことになった。前よりも太ったスイを見せるのは嫌だ。でもそれ以上に、スイの苦しみを聞いて欲しかった。

久しぶりの学校は怖くて、ずっと下を向ていた。でもKさんは変わらずに優しかった。言葉に詰まるスイの話を、最後まで聞いてくれた。スイの考えを否定しないで、寄り添ってくれる。世の中の全てが敵でも、Kさんだけは唯一の味方でいてくれた。

Kさんなら助けを求めていいかもしれない。そう思えた。

三月になり、修学旅行が近づいてくる。前からずっと楽しみにしていた。でも、今の情緒不安定なスイは行けそうにない。

それに、太ったデブのスイを見られたくない。みんなの記憶には、綺麗なままの姿でいたい。スイには謎のプライドがあった。

結局修学旅行には行かなかった。でもやっぱり行きたかった。

みんなが笑って、楽しんでいる写真を見ると、羨ましくて仕方がない。スイ以上に幸せそうなのが、憎くて許せない。

トトや嫌いな担任を恨んだ。スイが今泣いているのは、コイツらのせいだと。

でも人のせいにするのはダメだ。スイの自分勝手な気持ちで、他人を傷つけることはできない。

そう…全部スイが悪い。スイの心が弱いから。泣き虫だから。出来損ないだから。自分で自分を責め続けた。

どんどん苦しみが蓄積され、自我を保てなくなっていく。どんなに泣いても、頭を殴っても、苦しみから解放されることはなかった。

ベッドの上に体操着のズボンがある。スイはズボンの両裾に手を伸ばし、吸い込まれるように首に巻いた。もうこれしかない。苦しみから解放される方法は…これしかない。

スイは思い切り、両裾(すそ)を引っ張った。

首がどんどん絞まっていく。ドクンドクンと心臓が動くのを、圧迫された首から感じる。

二十秒程すると、段々苦しくなってきた。死ぬ時も苦しまなきゃいけないのか。

「死」とはこの事を言うのだと、納得できた。

やっぱり死にきれない。死ぬのが怖い。スイにはできない。ベランダから飛び降りる事も考えたが、やっぱり怖い。死ぬ勇気なんて、スイには無かった。

スイは死ぬ勇気も、生きる勇気も持ち合わせていないのか?そんな事を考えると、スイは生きていてはいけない人間に思えてしまう。

ボロボロに泣いていると、トトの顔が思い浮かんできた。その瞬間スイは、

「早く死ななきゃ!」

と突発的に口に出していた。「死」がスイの頭を埋め尽くし、それ以外考えられなくなっている。

トトに見つかる前に、殺される前に自分で死ななきゃ。早く早く早く!死ね死ね死ね。

もう取り返しがつかない程に、スイは病んでいた。弱っていた。この先の人生一生暗いままだと絶望した。

ふらふらと無気力なまま、スイはスマホで色々な曲を聴いた。どうにかしてこの暗い気持ちを晴らしてほしい。そう願って聴き続けた。

すると、ある一曲に出会う。優里さんと言うシンガーソングライターの、「ビリミリオン」と言う曲だ。

この曲を聴いた瞬間、スイの黒いモヤがパッ！と晴れて消えた。優里さんの歌詞が、「死」に囚れたスイの心に、「生きていていいんだよ」と優しく寄り添ってくれた。こんなに心に響く曲は生まれて初めて。

スイはこの曲に救われた。ほんのさっきまで人生のどん底にいたのに、一瞬にして景色が一変した。

羨ましい。こんなにも、人の人生を揺り動かせる優里さんが羨ましい。羨ましいを通り越して、妬(ねた)みさえも出てきてしまう。

死にたい気持ちは何処へやら。一つの曲に、あっさりとスイの人生を変えられてしまった。

人生は意外とすぐに変えられるのかもしれない。

春が過ぎると、スイはどんどん元気になっていった。学校には相変わらず行っていないが、前よりも笑う回数が増えてきた。

ジジやババにも、久しぶりに再会することができた。今までの恨みなんかは消えて、純粋に再会を喜ぶことができた。

腐っていなかった。目の前にいる二人は、昔の優しい姿に戻っていた。本当に幸せだ。

でも、元気になった代わりに「摂食障害」になってしまった。

「太りたくない」と言う気持ちが抑えられなくて、過食嘔吐(おうと)をしてしまう。

食べ物を粗末にしてしまう罪悪感。喉(のど)に指を突っ込む苦しさ。勝手に涙、鼻水が出て来て、ゲロと一緒に便器の中に流れ込む。

吐くのは苦しいし、辛い。でもそれ以上に、太るのが怖い。デブなスイには戻りたくない。そんな気持ちで毎日、毎食繰り返してしまう。

スクールカウンセラーのKさんに相談すると、

「なるべくしてなった」

そう言ってくれた。スイが生きる為にしている事だと、全肯定してくれた。

突き放されないか不安だったが、Kさんはこんなスイにも優しくしてくれた。

Kさんや、保健の先生の勧めで、精神科の病院を受診する事になった。

病院では色々な体の検査をした。MRIを受けるのは初めてで、大きな音が鳴ってビックリした。でもその音がビートを刻んでいて、ちょっと面白い。

一時間かけて体の隅々を検査したが、何処にも異常はなかった。

ここでもカウンセラーのAさんと話をした。スイの過食嘔吐や、精神的に不安定な事。スイは早く治したいから、口ごもらずハッキリと話した。

AさんもスクールカウンセラーのKさんに似て、とても優しかった。スイがどんな人間なのか理解してくれた。本当のスイを引きだし、気づかせてくれた。

本当のスイは、ヤバいくらいに自己犠牲の精神を持っていた。

トトや友達に相談したくても、相手に心配かけさせたり、悲しくさせるのが嫌だった。相手の悲しむ顔を見るくらいなら、スイが苦しめばいい。他人に迷惑をかけるくらいなら、スイが我慢すればいい。

自分より相手の事を優先し、自分を傷つけていた。

えっ!?スイってめちゃくちゃ心の優しい子じゃね？

今こうして不登校になり、摂食障害になっているのも、スイの根本の性格が関係しているのだと思う。スイが弱かったからでも、泣き虫でも、出来損ないだからでもない。

「林翠恋」と言う一人の人間だったから。良くも悪くも、自己犠牲をしてしまう性格だったから。たまたまこうなってしまったのだ。「ものは言いよう」とはまさしくこの事。

今までの出来事は全て無駄じゃなかった。全ての出来事には、ちゃんと理由があった。

そう考えると、スイの人生って案外悪くないのかもし

れない。嫌な事も沢山あったがそれも全て、スイしか味わったことのない、大切な財産だ。

人生のどん底に落ちた人間にしか分からない、苦しさや、辛さを味わえた。

もしかしたら、「人生のどん底」ではなく、「人生の経験」だったのかもしれない。

考え方を変えれば世界の見え方も、人の人生も、三百六十度まるっきし変わる。

これを半年前のスイに言っても、全く伝わらないと思う。

「何言ってんだこのボケ！」

って言い返されちゃうと思う。

でも、変わるんだよ。良くも悪くも、人生変わるんだよ。ちょっとした事でね。

この世界には辛くて、苦しくて、もう何も考えられない人が大勢いると思う。

今すぐにでも、死のうとしている人もいると思う。

でも、もう少し待ってみたらいいと思う。数年単位じゃなくて…数分。数秒だけ。

ひょっとしたら、死にたくなくなるかもしれない。やりたい事が見つかるかもしれない。眠たくなるかもしれない。お菓子が食べたくなるかもしれない。好きな人が見つかるかもしれない。

生きたいと思えるかもしれない。

だから死ぬのはその後でいいと思う。スイは「死ぬな！」って事が言いたいんじゃなくて、「悔いなく死ねよ」って事が言いたい。やりたい事をやりきれずに死んでも、死にきれないからね。

まぁ、こんな綺麗事ばっかり並べてるけど、結局のところ他人は他人。人の人生なんて、スイは知ったこっちゃない。

人には「生きる権利」もあれば「死ぬ権利」もある。スイが人の人生に、口出ししていいわけがない。

だから、さっき言った事は全部忘れていいよ。理解し

ようとしなくていいよ。

「悔いなく死ねよ」これはスイが見つけ出した、スイだけの答え。この答えはスイだけにしか分からないし、スイだけにしか伝わらない。

そしてこれもまた、スイが生きている、スイだけの人生。どう死ぬかは自分で決める。

スイはやりたい事全部やって、全財産使い果たしてから死んでやる。遺産を一つも残さずに死んでやる。

こんな死に方なら「悔いなく死ねよ」って言う目標を、達成できる気がする。

死に方は決まったが、今後どうやって生きていくかは決まってない。

んー、そうだなー。有名人ってのに憧れるな。

でも、他人に良く見られようと、じゃらじゃらした宝石で着飾る「インフルエンサー」にはなりたくない。

有名人になれば他人の目が気になるけど、ずっと美しく着飾っているのは、疲れちゃうと思う。

スイはありのままの自分を受け入れたいから、他人からの意見や視線はちょっと邪魔かも。

やっぱり…スイは自分の為に生きたい。自分の体に花を植えて、じょうろうで水浴びをさせたい。心にタニシを住まわせて、余計な汚れを食べてもらいたい。

こんな風に自分を大切にできたら、もっともっと自分の事が好きになると思う。

んー…よし！そうだな。

自分の人生を考え、創作する、

「人生作家」にスイはなりたい。

中学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

失敗を乗り越えて

和歌山県立桐蔭中学校　三年
宮﨑　大輔

僕は中学校で男子硬式テニス部と科学部を掛け持ちしている。僕は中学校三年生でこの夏にどちらも大きな大会を控えていた。

僕は中学校受験をして和歌山県立桐蔭中学校に入学した。受験に合格する前から科学部に入りたいという気持ちがあった。こうして入学したが、運動することも好きだったため、硬式テニス部にも入部した。この学校は兼部が可能だったため、自分としてはとても助かった。

自分が所属している科学部は主にプログラミングをしたり、ロケットを自分たちで飛ばしたり、それを教えたりしている。そのロボットの大会によく出ている。自分が出ている大会は主に二つある。RCJ（Robo Cup Junior）とWRO（world robot olympiad）いう大会に出ている。

自分が出たRCJという大会の中でもいくつかカテゴリーに別れていて、一年生の時には二輪の自立したロボットにプログラミングをしてサッカーのようなことをする、「ビギナーズ」という競技に参加していた。二年生三年生では、四輪ロボットを作ってプログラミングをしてサッカーのようなことをする「ライトウェイト」という競技に参加していた。また、僕はWROという大会にも出ていて、LEGOブロックを使ったロボットを使います。この大会もいくつかのカテゴリーに分かれている。一年生と二年生の時は「ミドル」というロボットにプログラミングをしてオブジェクトを運んでゴールする、ミ

ッション形式の競技に参加していた。

一年生のときから二つの大会に出場していて、どちらも同級生のNくんとチームを組んだ。一年生のときにWROでは校内予選を勝ち抜き、和歌山県予選で四位を獲得したが全国には程遠く、自分たちの実力の差を感じた。その悔しさを活かして次こそは勝ちたいという気持ちが出てきた。一年生の冬にRCJの「ビギナーズ」部門の大会に出た。校内大会ではあまり調子が振るわず三位となってしまったが、関西ブロックという次の大会に駒を進めることができた。関西ブロックでは先輩との対戦もあり、不安があったが二位で終えることができ、名古屋で行われるロボカップジュニアジャパンオープンに出場できる権利を獲得した。しかし、願いも虚しく新型コロナウイルスの影響で中止が発表された。しかし。全国大会の代替大会が行われた。そこでついに自分たちにとって初めての全国大会があった。ロボカップジュニアけいはんなという大会が京都で行われた。結果的にはあまり良くなかったが、全体順位の真ん中あたりで終了した。満足とはいかなかったが、自分にとって良い経験になったと思うし、この悔しさをこれからに活かしたいと思った。

二年生になってからは、テニス部での活動が忙しくなったことからWROのミドル部門のみの出場となった。今回は同じテニス部と兼部しているSくんと二人体制でチームを組むことにした。チームメイトを入れ替えて臨んだ。去年より点数もよく、一一〇点満点中、満点を取れたりと準備はできていて、全国大会も狙えるところまではきていた。そうして迎えた本番、自分たちの点数は九十点と高得点を獲得した。しかし、同級生のチームが満点を取り、タイムでは競っていたものの、自分たちの一つのミスが大きく響いてしまった。こうして、浜松で行われる全国大会への切符を手にすることはできなかった。勝ちきれないことが自分の中でも悔しかった。

こうして、三年生となった。三年生になったというこ

とで、自分たちは下級生を引っ張っていく立場となった。自分は部長補佐兼ＷＲＯ担当という役職についた。仕事が多い訳では無いが、下級生にＬＥＧＯの使い方を教えたり、プログラミンの方法を教えたりしたり、校内予選の開催を手伝ったりと忙しかった。

自分は今年もＷＲＯの大会に出ようと考えていた。しかし、いくつかのルール変更が発表された。それはミドル部門で過去に予選会に出場したことがあった場合ミドル部門には出場することができないという内容だ。そこで自分はどの競技に出ようかと考えた。これまでにやってきたミドル部門に似ているエキスパート部門にするのか、他の競技にするのか、とても迷ったが、自分は他の競技をすることにした。出場する競技はRoboSportというカテゴリーでロボットでスポーツをするという内容だ。今年はロボットでテニスをするようだ。なぜ、RoboSportにしたかと言うと、この競技にはこれまでに学校の先輩方も出場していた経験もあり、何かあった時には色々質問もできるからです。また、先輩たちが過去に世界大会に出場したことがある競技でもう一度、桐蔭中学校として世界大会に行きたいと思ったからだ。そして、出場するカテゴリーは決まったが、誰とチームを組むかを決めていない。まず、去年一緒にＷＲＯに出場したＳくん（通称あおい）を誘った。すると快く受け入れてくれた。しかし、これまで経験してきた上でチームメイトは多いほうが良いと思ったのでルールの範囲内の三人のチームを組もうと考えた。そこで、同級生のＫくん（通称しば）を誘った。すると、こちらも快く受け入れてくれた。ちなみに、なぜしばと呼ばれているのかというと、髪の毛が直毛で芝のようだからだ。ここまではかなり順調だった。しかし、自分たちはこのカテゴリーに初めての挑戦なので知らないことが多かった。なので、できることはたくさんやろうと思った。

まず取り掛かったのはルールを熟読することだ。二月、三月くらいから発表されていたが、読み始めたのは四月となっにていた。このルールはすべて英語で書かれてい

て理解するのに時間がかかった。学校ではレベルの高い英語の授業を受けているが、それでも知らない単語が多いので翻訳サイトを使って解読した。そして、代替の大まかなルールは分かった。

ルールは各チーム、ロボットが二台あり、ボールをより多く相手のコートに打ち返すというルールだ。ボールは全部で八個あり、オレンジのピン球を使う。時間は一マッチ、二分で一試合で三マッチある。この三マッチの合計点で勝敗が決まる。コートは半分に分かれていて片方には段差があり、もう片方には色がついたスロープがある。また、相手のコートに自分のロボットが侵入したら即敗北となる。一見簡単そうだがそのようなことはない。常に状況が変わっていくので予測することができないのでそれを予想してプログラムを組む必要があるからだ。この競技は全国的に見て、競技人口は少ない方だがその分レベルが高い。

今は四月の下旬で、まだ国内大会の詳細については公表されていない。だが、これまでの大会は七月に開催されているので大体の時期は分かっている。四月は「出会いの時期」と言われることがあるが我々中学三年生からすると新たに後輩を迎えて、多くの出会いを迎えていた。しかし最高学年としてしなければいけないことが多い。そのため、忙しい日々を送っている。

まず初めにチーム状況を説明する。チームはプログラムを担当する「ソフト」と言われる人と機体を作成する「ハード」という役割に分かれる。さらに細かく分けると、チームのマネージメントをする人もいたりする。

自分

ソフト担当（最終確認）・（ハード担当（すべての機体作成）の二つの仕事と、マネージメントをしていて、キャプテンとしてチームを仕切っている。

K君

主に自分の手伝いをする。S君と簡単なプログラムのみ担当している。また、大会の直前に準備をしたり、コートを作ったりと裏で頑張ってくれている。まさに縁の下

の力持ちといったところだ。ロボットのことに関しては勉強中だ。

S君

S君も主に手伝いをしていて、K君と簡単なプログラムを担当している。ロボットを作成するときに部品を集めてくれたりと色々なことを嫌がらずにしてくれる優しいチームメイトだ。

このようなチーム編成になっている。少し自分の負担が大きい。しかし、そんなことを言っていては勝てるはずがない。できる限りチームを引っ張れるようになりたい。少しの不安と大きな期待が自分の頭の中にあった。

五月になりロボットの作成に取り掛かった。ロボットが無いと試合にも出られない。できる限り早く完成させたいところだ。ボールを前に送る・ロボットと、段差を超えてボールを送るロボットが必要となる。まずは比較的簡単なボールを前に送るロボットを作ろうと思う。使う材料はたくさんある。その中のマイコンはLEGO mind storm ev3というものを使う。WROでは使える素材が決まっている。今回使うev3はいくつかの縛りがある。それはモーターが四つまでとセンサーが四つまでしか使えないという縛りである。この縛りの中で完璧なロボットを作ることは難しい。

ロボット制作にあたって色々な部品を集めた。その中でもこだわったのがpixyカメラである。pixyカメラはAIが搭載されているプログラムで制御できるカメラだ。自分たちは去年の競技の映像を見て、勝つためには必要だと思い迷わず使うことを決めた。少し値段は高いが部費のおかげで金銭的には困らなかった。なぜカメラを使うかというとカメラでボールを検知することでプレースタイルが広がるからだ。

そうして、ロボット一台目は完成した。スペックについて軽く説明する。二輪のロボットだ。反則負けを防ぐためにマットの色を読み取るカラーセンサーを二つ搭載している。またボールが入るポケットも作った。そのポケットに入ったボールを送り出す為にモーターをもう一つ取り付けた。そして、カメラを搭載している。

自分がロボットを作成している間に、あとの二人は別の作業をしていた。それはテニスコートの作成だ。コートのマットは公式のショップで販売されているが、このコートにはまわりの枠とスロープが必要でそれは販売されていないので自分たちで作成しないといけない。この作業もかなり大変だ。かなり苦戦していたが材料は買えていたので、順調ではあった。こうして、気付けば五月を過ぎていた。　六月に入って大きな発表が公式からされた。それは大会の開催についてだ。大会の名前は「ＷＲＯ西日本大会」で、この大会で上位入賞すると東京で行われる決勝大会に進めるという大会だ。予定日七月十五日の土曜日と十六日の日曜日だ。そして、自分たちは大会にエントリーした。チーム名はチームメイトの芝の推しが由来の「Toin　桜」となった。個人的にはいい名前だと思っている。開催場所は奈良県にある帝塚山中学校、高等学校の講堂だ。期待もしていたが不安もあった。

ついに、二台目のロボット作成に取り掛かった。二台目には一台目以上のことが求められる。勝つためにはモーターを使わずにボールが段差を超えられるようにしたい。ゼロからの作成なのでかなり難しい。ＬＥＧＯは少しもろいので、そこも補わなければいけない。ボールが段差を超えたと思ったら、ロボットが車検を通れなかったりとかなり頭を悩ませた。本当はチームメイトに作ってもらいたいが自分の仕事だからやりとげるしかないという気持ちで三週間かけて何とか完成させた。搭載しているモーターは二つで、センサーはジャイロセンサーのみの最低限のものしか搭載していない。しかし、これが限界のようにも感じた。やっとの思いで機体作成を終わらせ、ついにプログラムに取り掛かった。これまでにやってきたプログラムとは桁が違うくらい難しい。関数を駆使して、定数や変数も使った。難しい用語を使うと、Ｐ制御や比例制御、ＰＩＤ制御といったプログラムも作っていた。

しかし、大会三週間前にチームメイトのしばが新型コロナウイルスに感染してしまう。それだけでなく、大会

二週間前に自分としばが所属しているクラスが新型コロナウイルスの流行によって学級閉鎖になってしまった。この危機的な状態になってしまったが、特別に許可を取り、家にロボットを持って帰ってくることができた。しかし、一台だけだ。この状況をチャンスにしようと、一日六時間はプログラムをくむ時間にあてるようにした。また、先輩方の力を借りることにした。同じ桐蔭中学校科学部に所属していたことがあり、WROで世界大会に出場した経験のある大学生に質問したり、高校生の去年、同じ競技に出場した先輩からアドバイスを頂いたりと他人の力を借りるようになる。高校生の先輩は日中に学校があるので質問はできないが、大学生の先輩には何度も質問し、たくさんのアドバイスを頂いた。その時にたくさんのプログラミングも学んだ。先ほど言っていた、PID制御をするには微分積分を理解する必要があるが、それを先輩に教えてもらいつかえるようになった。ほかにも、ロボット強化のために範囲や計算のプログラムを組むこともできるようになった。こうして自粛期間も明けて大会一週間前に突入した。ここで大会運営から連絡があった大会が日曜日の一日のみとなり、前日の土曜日は予選となっていたが自分たちは和歌山県に住んでいて和歌山県から出場するチームが自分たちしかいなかったため予選がないことが判明した。

しかし、ここでも事件が起きた。チームメイトのあおいが所属するクラスが新型コロナウイルスの流行により学級閉鎖になった。しかも、あおい本人も感染してしまった。しかも、土曜日までと分かった。そのことが分かり、しばと二人で頑張るしかなくなった。ここら辺から、大会に間に合わなくなりだしたので、ロボット二台目はしばがプログラムを担当することになった。正直、一台目も完璧な状態にもっていけるかさえ、不安だ。こうして毎日放課後にプログラムをしていたがそれだけでは時間が足りず、間に合わないため家でもプログラムを夜遅くまでやるのが日課となっていた。それでも、めげずに練習をしてついに前日の十五日、土曜日になった。ひとまず、最低限のことはできた。当日、全国に行けるかは

五分五分というくらいまで押し上げることはできた。
しかし、まだ仕事は残っていた。一つ目はあいにく、当日は顧問のF先生という先生が高校の科学部の大会で串本に行くため、当日は不在となる。そこで、W先生という高校の科学部を担当している先生が引率してくれることになっている。その先生が奈良までもっていってくれる荷物を用意できていないという点だ。もともとはあおいがする予定だったが、
コロナウイルスに感染してしまったので準備ができていなかった。これについては自分が少し準備していたのでパッキングするだけだった。二つ目はロボットの運送だ。ロボットに関しては先生の車に乗せていると、部品が欠けてしまうかもしれないので自分たちで持っていくことが決まっていたがどのようにして持っていくかを考えていなかった。結局のところロボットをタオルでくるんで衝撃を抑えて、バックに入れて持っていくことにした。三つめは会場までどのように行くかである。電車で行くことは確定していたが、三人とも最寄り駅が違うためどこで集合するか考えなければいけない。チームの中では一番電車に乗っている自分が道のりを出すことにした。自分とあおいはJR和歌山駅で合流してから、紀州路快速に乗って天王寺駅に行ってから乗り継いで鶴橋駅に着いて、そこで集合してから近鉄奈良線に乗って学園前駅まで乗るというルートになった。しばは最寄り駅が南海和歌山大学前駅なので、特急サザンに乗って難波駅まで行って、乗り換えて鶴橋駅まで行って、自分とあおいと合流して近鉄奈良線に乗って学園前駅に行くというルートになった。こうして、しなければいけない仕事は終わった。しかし、家でのプログラムの修正は夜まで続いた。翌日は朝五時の電車に乗るにもかかわらず夜までパソコンと向き合った。そして、ベッドで横になったが、一向に眠気が無かった。明日の緊張と不安が襲ってきた。しかし、どうすることもできなかった。

朝になった。朝から自分のパソコンとロボットなどを持ち、家を出た。和歌山駅に着いたが、あおいが中々来

ない。そんなことを考えていると列車が発車する三分前にやってきた。寝坊をしてしまったらしい。あおいは病み上がりということで、味覚と嗅覚が機能しないらしいが、朝ごはんを食べていないらしいので予備として買っていたパンをあげた。あおいは「味はしやんけどおいしい」と答えた。久しぶりに見る仲間の元気な姿にすこしほっとした。すると、しばから電車に乗ったというメッセージが送られてきた。とりあえず、全員出発していることに安心した。電車に乗っている間はいつも学校に行っている時のように音楽を聞いて時間をつぶした。そうこうしていると天王寺駅に到着した。久しぶりに見た都会の光景がいつもよりまぶしく感じた。ここ最近は県外への外出も減っていることを改めて実感した。そして、鶴橋駅に着いた。しばと同じホームにいるはずなのにやっぱり都会だなと思うほどの人の多さに圧倒されて中々合流できなかった。でも、メッセージを送って居場所を伝え合って何とか合流することができた。三人でこうして対面で会うのは久しぶりだった。そのせいか、すごく会話がはずんだ。

学園前駅で降りた。会場は駅の目の前にあってすぐ目についた。そして会場入りする。受付を済ませて中に入ると、若松先生と合流することができた。会場では洋楽が流れていた。今日は三十六チームが西日本のトップ、全国大会の切符獲得を目指して戦うのだ。少しずつ緊張が高まる。手も震えだす。しかし、これまでしてきたことをするしかない。最初に予選リーグがあって、そのあとに決勝トーナメントがある。予選は四チーム中三チームが突破することができる。その予選リーグの抽選をした。対戦相手が決まったようだ。しかしまだ選手は分からないようになっている。パドックに戻って、ロボットの試運転を行う。自分たちが使っているカメラは照明の明るさによって値が変わってしまうので調整しなければならない。こちらは順調だったが、なにやらしばとあおいのロボットのジャイロセンサーが壊れたらしい。新しいものに付け替えたが初戦には間に合わなさそうだ。

そうして、初戦を迎えた。初戦の相手は帝塚山中学校

のチームだ。これまでにみたことのないロボットを使っていた。カメラを駆使してスピードも早く格上だと悟った。そうして試合が始まった。開始三十秒は互角な戦いをしていたが、しばとあおいがプログラムを組んだ二号機が壁に引っ掛かり故障してしまった。そして実質一台で戦ったが、第一マッチはゼロ対八と大敗した。次の第二マッチでも二号機が少しおかしい挙動を見せて、不安があったが一号機の検討もあり二対六と得点を挙げた。第三マッチも、第二マッチと同じような戦いとなり二対六となり、試合には負けたが次につながる結果となった。予選リーグの同じ組のもう一つの試合も終わり、得失点差で何とか三位に滑り込み決勝トーナメントに駒を進めた。

お昼をまたいで、決勝トーナメントが始まった。まず、一回戦は他のブロックの二位との戦いだ。相手チームは中学生でロボ団という団体に所属していた。負けたら終わりなので緊張していた。そして、試合がスタートした。第一マッチは相手の機体が停止してしまったので七対一と勝利した。第二マッチは、二号機が午前中と打つて変わり大活躍して八対ゼロと大勝した。第三マッチも五対三と勝利し、二回戦に進んだ。

二回戦は他のリーグの一位のチームとの対戦。プログラボという教室に所属している小学生との対戦。第一マッチはなんと逆転勝利の六対二。第二マッチは相手の反則負けにより八対ゼロと勝利して第三マッチも六対二と勝利して、準々決勝に駒を進めた。（変則なトーナメントなのでベスト十）

準々決勝の相手は中学生のチームとの対決だ。これに勝てば全国大会というところまできた。ここまで無敗のチーム相手に戦えるのか不安で仕方ない。試合が始まった。想像以上に互角な戦いをしている。しかし、終了間際に押し込められず、第一マッチを三対五で落としてしまう。第二マッチも瀬戸際で押し負けてしまい、第二マッチは二対六と落としてしまった。第三マッチは四対四と奮闘したが負けてしまった。しかし、ここで全国大会の切符は途切れなかった。順位決定戦で全国の切符を手

にするチャンスがあるのだ。順位決定戦は少し複雑だが二試合する。できるだけ多く勝てばよいのだ。

そうして、順位決定戦を迎えた。一戦目の相手はまさかの三輪ロボットを駆使する中学生チームでプログラボに所属している神戸に住んでいるそうだ。対戦前から話しかけてくれる優しいチームだ。だから、対戦も楽しみだった。第一マッチは防戦一方となってしまい、一対七と負けてしまう。しかし、第二マッチに持ちこたえて四対四と第三マッチに持ち越すことができた。しかし、第三マッチは三対五と競ったが負けてしまった。悔しくて仕方なかったが切り替えるしかなかった。

そして、順位決定戦二試合目を迎えた。対戦相手は中学生で、東大寺学園中学校に通っているらしい。なんだか賢そうな雰囲気が漂っている。この戦いは相手の洗練された機体作りで劣勢となってしまいすべてのマッチで二対六になって完敗してしまった。そして、全国の切符を手にすることは叶わなかった。最終結果は西日本九位タイで八位までが全国大会に出場する権利があった。この一チームという小さな差でこれくらい喜びと悲しみが分かれるのかと実感した。

自分の目には涙が出そうになっていた。悔しい気持ちでいっぱいだった。言葉では表せないくらいの努力をしてきた、なのに、勝てなかった喪失感を覚えた。まずは家族に結果を電話で報告した。報告した後も頭の中は真っ白で何も考えられなかった。仲間と全国大会という舞台に立てなかったことが非常に悔しい。上も向けないくらい落ち込んでいた。でも、そんな自分を仲間は「よくやってくれた」や「ここまで連れてきてくれてありがとう」などと自分を責めたりはしなかった。このときにやっと、自分の感情を取り戻すことができた。すべて自分のせいだと自分を責めていた時に慰めてくれて、とても助かった。

僕はこの大会、科学部の活動を通してかぞえきれないことを学んだと思う。まずは仲間の大切さについてだ。これまで、科学部の大会は二人チームを組んでいたが、今回初めて三人チームを組んだ。やっぱり仲間は多い方

が良いと感じた。チームは自分だけではないのだということを思い知らされた。これまで、一人でできないならみんなでやろうという考え方が自分にはあまりなかったのだと思う。チームワークがないと試合に勝てないのだろうと思った。学んだことはそれだけではない、準備の大切さも学んだ。いつどこで何があるか分からないことを実感した。大会直前にアクシデントがあれほど続くこともあるから、いつかやろうではなくて今やるべきなのだと思った。これから生きていく中で、ＷＲＯをすることは無かったとしても、この悔しさを別のことにも活かせるようにこの思い出を忘れてはならないと思う。悔しくて、悲しい思い出だけどこのことを忘れてしまうと自分の心に響かず、何も残らないと思うので、この経験は良い経験だと思っていたい。

中学生の部
選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

ありがとう、ベイリー

東福岡自彊館中学校　三年
清武　琳

令和二年十月一日、ベイリーが死んだ。
ベイリー、ベイリー、ベイリー。
心の中で何度も名前を呼んだ。
真っ白でふわふわで、あたたかだったきれいな毛並み。
じっとぼくを見上げてくれた、穏やかな黒い瞳。
ぼくは絶対に忘れない。
ベイリー、ありがとう。大好きだよ。

初めてベイリーのことを知ったのは新聞記事だった。平成三十年十月二十五日、ぼくは学校の図書館でたまたま見た、毎日小学生新聞一面の記事に目を奪われた。それは日本初のファシリティドッグ、ベイリーの引退を伝える記事だった。

「病院に犬がいる？」

そんなバカな。衛生管理が厳しい病院に犬を入れるなんてありえない、と驚いた。実は新聞を見る数ヵ月前、母から病院で働く犬がいるらしい、と聞いたことがあった。でも、その時は、そんなことあるはずがないと思って気にもしなかった。それなのに、なんだこの犬は。病院にいるじゃないか。

その日から、ぼくはベイリーに夢中になった。ファシリティドッグを病院に派遣しているＮＰＯ法人「シャイン・オン！キッズ」に手紙を書いて、資料を送ってもらった。出版されている本は全部買って読んだ。ベイリーのことを知れば知るほど、ぼくはファシリティドッグの

ことで頭がいっぱいになった。

ファシリティドッグとは、病院に勤務する犬のことだ。セラピー犬のように時々訪問するのではなく、職員として同じ病院で毎日働く。ベイリーは日本で初めて導入されたファシリティドッグ。真っ白なゴールデンレトリーバーだ。ファシリティドッグの仕事は入院している子どもたちに寄り添い、励まし、笑顔にすること。手術室まで付き添うことも、ＩＣＵに入ることもできる。

ぼくは脊柱側弯症のため、五歳の時から半年に一度入院している。手術はこれまでに十八回受けた。何度目でも入院はつらい。手術はこわい。手術の前夜は、消灯時間になって電気が消えると、なぜだか涙が止まらなくなる。手術当日の朝は、緊張でどんどん熱が上がり、体が震えだす。そんな時にベイリーがそばにいてくれたらどんなに心強いだろう。

入院中、ソフトバンクホークスの工藤監督（当時）が病院を訪問してくれたことがあった。ぼくは痛みのため、前日まで起き上がることもできなかったが、監督に会いたい一心で、自分で歩いて会場まで行った。歩けと言われても歩けない。歩きたいと思ったから歩けたのだ。

ベイリーと一緒なら苦い薬も飲める。ベイリーと一緒なら辛いリハビリも頑張れる。ベイリーと一緒なら手術室まで歩いて行ける。ぼくには、入院している子どもたちの気持ちがよくわかる。無理やりやらされるのではなく、自分でやりたいと思うことなら、子どもだって頑張れるのだ。しかも、ファシリティドッグは常勤だ。苦しい時にはいつでもそばに来てくれる。

こども病院には絶対にファシリティドッグが必要だ、と思った。どうすれば、ぼくが入院している病院にも、ファシリティドッグを導入してもらえるのだろう、と考えた。

令和元年夏、ぼくは院長先生への手紙をもって入院した。手紙には、病院にファシリティドッグを導入してほしいこと、病院の人たちに、ファシリティドッグについての意見を聞きたいことなどを書いた。もちろん、取り寄せた資料も同封した。病棟の図書コーナーにベイリー

の本を置いてください、と図書カードを寄贈した。

手術の二日後、院長先生はわざわざぼくの病室まで返事を持ってきてくださった。ぼくは期待に胸をふくらませて手紙を読んだが、返事の内容は想像していたものとは違っていた。手紙には直接書かれていなかったが、母から、病院の人たちが話し合った結果、ファシリティドッグの導入は難しいという結論が出たそうだ、と聞いた。ショックだった。目の前が真っ暗になった。ファシリティドッグは絶対にいた方がいい、だから、きっとすぐにでも導入してくれるはずだ、と思っていたからだ。

手術後、退院まではすることがない。ベッドの上で、痛みと闘うだけの日々だ。今まで一生懸命やってきたことがばかばかしくなった。これからどうしようなんて、考える気にもならなかった。

そんなぼくに、母が総務課の職員の方から聞いた話をしてくれた。

「琳君に伝えるかどうかは、お母さんにお任せします。」

と言われていた、という話を、全部教えてくれた。

院長先生はじめ、総務課の皆さんは、ぼくの手紙を読んで真剣に考えてくれたそうだ。

体力のない重症患者や小さい子どもたちが入院している病院に犬を入れるのは難しい。動物アレルギーのある子どもも多い。それに資金面にも問題がある。犬を入れるとなると長期間にわたって資金が必要だ。一度導入れば、お金がないからもうやめますとは言えない。それだけのお金があるなら検査機器にあてた方がいいのではないか。かわりにアクアリウムはどうだろう。ロボット犬なら導入できないか？

院長先生は、ぼくの気持ちを考えて、三度も手紙を書き直してくれたそうだ。

ぼくはうれしかった。ぼくの手紙で、たくさんの人が、忙しい時間を割いて、本気で考えてくれたことに感謝した。同時に、ファシリティドッグの導入が簡単なことではないと思い知らされた。

病院の事情はわかる。でも、ファシリティドッグはあきらめられない。ぼくは考えた。そうだ、本にも書いて

あった。いつか日本中のこども病院にファシリティドッグを、と。ベイリーが活動を始めて十年、ぼくはベイリーのことを知らなかった。ファシリティドッグはまだあまり知られていない。けれど、盲導犬や介助犬のように、もっと存在が広く知れ渡れば、導入する病院も増えるのではないか。ぼくが入院している病院だけではなく、日本中の病気と闘う子どもたちのためにぼくにもできることがあるのではないか。そう、ぼくは、その方法を知っている。

当時、ぼくは西日本新聞社のこども記者として活動していた。認証式でいずれは自主取材をして記事を書くこともできると聞いた。新聞社で行われた勉強会の後で、ぼくは編集長さんに、いつかファシリティドッグの取材をしたい、と話した。ぼくが書いた記事が新聞に載れば、たくさんの人にファシリティドッグのことを知ってもらえる、と思ったからだ。編集長さんは、こども病院の取材を担当しているN記者に話しておきます、と言ってくれた。

その日から、ぼくは活動を始めた。夏休みには、五つの作文コンクールに応募した。もちろん、テーマはすべてファシリティドッグについてだ。ぼくが入院している病院は福岡市立なので、市長にも手紙を書いた。そしていつかベイリーの取材に行けるように、少しずつ貯金も始めた。ベイリーに会いたい。その思いがぼくの小学五年生の夏休みの全てだった。宿題の自由研究は「ファシリティドッグ導入計画書」。集めた資料や手紙のやり取りなどをまとめてファイルにした。活動したことはメールや手紙で担当してくれたN記者に報告した。N記者はぼくの手紙を読んで、自分でもファシリティドッグについて調べてくれた。

「ファシリティドッグの導入は、簡単ではないと思うけどがんばって。いつか取材できるように応援しています。」

という言葉に勇気をもらった。

秋になり、作文コンクールの結果発表が始まった。届く知らせに一喜一憂する中、日本新聞協会から封筒が届

いた。

「小学生の部最優秀賞」

その時の気持ちをあらわす言葉が見つからない。うれしかったとか、興奮したとか、そんな単純なものじゃない。横浜だ。ベイリーがいる横浜に行ける。結果を知って最初に頭に浮かんだのはそのことだった。

「いっしよに読もう！新聞コンクール」は新聞を読むことで社会への関心や気づきを促し、考えをまとめて表現する、という新聞協会主催のコンクールだ。前年こども記者の宿題で応募していたぼくは、表彰式が横浜で行われることを知っていた。招待されるのは最優秀賞に選ばれた人だけだということも。

横浜は遠い。小学生のぼくには、あまりに遠い、いつかは行きたいと願っていたはるか彼方の場所だった。貯金はわずかしか貯まっていないけど、表彰式に呼ばれたら、旅費は新聞協会が出してくれる。もしかしたら、ベイリーに会えるかもしれない。

それからは、夢のような日々が続いた。記事を引用した毎日小学生新聞の編集長さんからお祝いの電話をもらった。毎日新聞、西日本新聞はもちもん、朝日新聞、神奈川新聞、ＮＨＫ福岡局からも取材の依頼があった。母はぼくのマネージャーとなり、各社の担当者と連絡を取り合った。

表彰式が近づくにしたがって、ぼくの願いが形になってきた。日本新聞協会、毎日新聞社、西日本新聞社、シャイン・オン！キッズそして、神奈川県立こども医療センターの皆さんのおかげで、表彰式の前日に、ベイリーが活動していた病院を訪問できることになったのだ。しかも、病院の中に入って、ベイリーの妹分で現役ファシリティドッグのアニーと、ハンドラーの森田さんの取材もできることになった。いつかファシリティドッグの取材をしたい、というぼくの夢を、たくさんの人たちが協力して叶えてくれたのだ。

Ｎ記者も、福岡から横浜まで同行してくれることになった。与えられた時間は三十分。ぼくはＮ記者とメールやＦＡＸで連絡をとりあい、アドバイスをもらいながら、

取材の準備をした。事前に準備した質問は二十問。時間が足りないかもしれないから、ジャンルごとに優先順位をつける。お小遣いでボイスレコーダーも買った。それから、ベイリーとアニーへのプレゼントも。取材は、ベイリーの誕生日の前日なのだ。ベイリーはもう引退しているのでその日は病院にはいないと言われていた。でも、ベイリーは森田さんと暮らしているから、きっと渡してくれるはずだ。ペットショップに行き、悩みに悩んで、丈夫そうな太いロープのおもちゃを選んだ。少しでも長く遊んでもらえるように。

当日は、ぼくがファシリティドッグの取材をしているところを新聞社とテレビ局が取材する合同取材、ということになった。母が新聞協会の方にお礼を言ったら、

「琳君のジャーナリスト魂に、記者の皆さんが初心を思い出したみたいですよ。」

と楽しそうに話してくださったそうだ。

令和元年十二月十四日。まだ真っ暗な早朝に家を出た。新幹線を選んだのは、富士山が見たかったから。残念ながら、雲に隠れて富士山は見えなかったけれど、車内販売のアイスクリームを食べたり、窓の外の景色をみたりして、旅行気分を味わった。

午後、横浜のホテルでN記者と合流した。大きなクリスマスツリーが飾られたホテルのロビーで、最後の打ち合わせをした。

質問事項の確認。

交換用の名刺と記者証、腕章の準備。

メモ用ノートとボイスレコーダーの確認。

ベイリーとアニーへのプレゼント。

写真はN記者に撮ってもらう。

病院へ向かうタクシーの中、ぼくの緊張はピークに達した。初めての場所。初めて会うたくさんの大人たち。家族は取材が終わるまで別の場所で待っている。周りの誰も博多弁を話さないなんて初めてだ。大丈夫かな。失敗しないかな。

午後三時。病院に着いた。予想通りの大きな病院だった。正面玄関を入ると、ロビーがなんだかにぎやかだっ

た。

「ついさっきまでサンタクロースが子どもたちにプレゼントを配っていたんですよ。」

と聞いても、うらやましいと思う余裕もない。長い廊下を通って事務局へ向かった。

事務局に入り、最初に目に入ったのは、黄緑色のソファだ。何度も写真で見たことがあるソファ。ああ、ここにベイリーがいたんだと思うと、それだけで胸が熱くなった。やがて、待ちに待った森田さんがやってきた。一緒に入ってきたのは、アニーと・・・

「ベイリーもいるんだよ!」

森田さんの声を聞く前にわかった。

いないはずのベイリーがそこにいた。真っ白な長い毛。真っ黒な瞳。ベイリーだ。

会いたいとずっと願っていたベイリーが、目の前にいた。ベイリーと対面させてくれたのは、ぼくへのサプライズだったそうだ。長いしっぽをゆらしながら、悠々と歩いてくるベイリー。緊張してこわばっていた体から、一気に力が抜けた。思わず笑顔がこぼれたぼくを、周りの大人たちが温かいまなざしで見つめてくれていた。

取材の間、ベイリーとアニーはぼくの足元に寝そべって、おとなしく待っていた。二頭とも、長い毛はつやつやでとてもきれいだった。三十分の取材でたくさんの事が聞けた。ファシリティドッグを導入した時の苦労やベイリーとアニーの性格の違いなど、森田さんの話を一言も聞き逃さないように、必死でメモを取った。

取材の後には、さらなるサプライズが待っていた。ベイリーの誕生会だ。ベイリーとアニーの前に特製のケーキが置かれ、ぼくは、

「よし!」

と合図をする大役を仰せつかった。それまで、カウンターの奥で仕事をしていた大勢の職員の方たちが、みんな集まってきてベイリーとアニーにスマートフォンのカメラを向けた。その優しい笑顔に、二頭が誰からも愛されていること、そして病院の仲間として認められていることを実感した。

「よし！」

と言った瞬間、アニーがパクっとベイリーのケーキを食べてから、自分のケーキを食べ始めた。ベイリーは怒ることなく、ゆっくりとケーキを食べた。その様子に、大爆笑がわき起こった。ベイリーは、じっとぼくを見上げてくれた。

「アニーがぼくのケーキを食べちゃったんだよ。ぼくの誕生日なのに。」

と言っているようだった。

病院を出て、森田さん、ベイリー、アニーと一緒に公園を散歩した。取材で一番意外だったのは二頭が「普通の犬」だったことだ。もちろん病院での勤務中は、数多くのコマンドに従う、訓練された特別な犬だ。ところが公園では、森田さんを引っ張ったり、二頭が別々の方向に行ってしまったり、かなり自由に行動していた。ぴったり足元について歩くと思っていたので、ちょっとびっくりした。森田さんによると仕事中と遊ぶ時のオンとオフの切り替えが上手なことも、ファシリティドッグの適性には必要なことなのだそうだ。

とはいえ、写真を撮るときにはちゃんとカメラ目線でじっとしているし、他の犬に吠えられても気にもしない。さすがだ。ぜひ爪の垢(あか)をいただいて、我が家の愛犬に飲ませたいものだと思った。

帰りのタクシーに乗る頃にはもう薄暗くなっていて、ずいぶん遅くまでベイリーと一緒にいたと思ったが、時計を見るとまだ5時だった。そうか、横浜は日暮れがこんなに早いのか、とずいぶん遠くまで来たことを改めて感じた。まるで夢の中にいるような、ぼくの人生で最高の一日だった。

翌十二月十五日の横浜は、上着がいらないほどの暖かさだった。表彰式は午後だったので、午前中は山下公園から赤れんが倉庫まで観光名所を散歩した。ちょうどクリスマスシーズンだったので、街中が華やかに飾り付けられていた。ぼくは、記念に真鍮でできた舵輪形の方位磁石を買った。横浜に来たのはもちろん表彰式に出席するためだが、前日に全力を出し切ったぼくは、それほど

緊張もしていなかった。晴れ渡った青い空と青い海のように、ぼくの心もすがすがしかった。

とはいえ、表彰式の会場に入るとさすがに緊張した。たぶん、とても偉いんだろうな、という感じの大人がたくさん。でも大丈夫。ベイリーが一緒だ。ぼくはブレザーの胸にベイリーの缶バッジを付けていた。前日、取材の間に母が病院の売店で買っておいてくれたものだ。ぼくは人前でしゃべるのが苦手だ。登壇するのははずかしかったが、ベイリーのおかげで、無事に表彰式を乗り切った。

表彰式の後、毎日小学生新聞、シャイン・オン！キッズの皆さんと別の部屋で会った。そこでまだ公表されていないビッグニュースを聞いた。なんと、日本でファシリティドッグの育成が始まったというのだ。まだかわいい2頭の子犬。ラブラドールレトリーバーのマサ。そして、ベイリーによく似たゴールデンレトリーバーのタイ。それまで、ファシリティドッグは、ハワイの訓練施設から連れてきていた。ハンドラーもハワイで犬と一緒に研修を受けなければならない。それが日本でできるようになるなんて、すごい。これからは、きっと日本でもファシリティドッグが普及していくはずだ。ぼくは期待で胸がいっぱいになった。

横浜では思っていたよりずっと多くの体験をした。そして一生忘れられない思い出と、たくさんのお土産をもらった。最優秀賞の賞状と盾はもちろん大事な宝物だ。でも、ぼくはシャイン・オン！キッズの方たちにいただいた大きな写真の方がうれしかった。ぼくとベイリーとアニーが写ったその写真は、今でも額に入れて部屋に飾っている。

帰りの新幹線でシウマイ弁当を食べた。絵はがきのように美しい富士山も見えた。西に向かって進む車窓には、驚くほど長い時間、真っ赤な夕焼けが見えた。博多駅には青と白のイルミネーションが輝いていた。

ベイリー、アニー、森田さん。たくさんの優しい大人たち、バースデーケーキ、囲み取材、中華街の焼き小籠包、青い海。ぼくにとって、横浜は特別な場所になった。

取材後年末までの二週間は、横浜に行く前よりも忙しくなった。年明け一番の手術を予定していたので、年内には記事を書き上げなければならなかった。N記者と連絡を取り合いながら、十日ほどで何とか記事を完成させた。表彰式後はいろいろな新聞に記事が載ったり、NHKのニュースで映像が流れたりした。福岡ローカルでニュースが流れたのはクリスマスイブだった。ぼくの特集の後で、アナウンサーが

「今日はクリスマスイブですが、今も病院に入院している子どもたちがいます」

とコメントしてくれた。ぼくにとっては、最高のクリスマスプレゼントだった。

令和二年。年明けの入院で、一つ心配なことがあった。それは、ぼくの活動で病院に迷惑がかかっていないか、ということだった。前回の入院で院長先生に手紙を渡してから半年、いろんなことがあった。テレビや報道では病院名も出たので、もしかしたら、病院にも電話や手紙があったかもしれない。ドキドキしながらそのことを尋ねると、やはり、病院への苦情があるらしいことがわかった。ぼくが書いた取材記事が掲載されるのは一月下旬の予定だったので、N記者に、病院が悪いと思われるような記事にならないようにしてほしい、と頼んだ。小さいころからずっとお世話になっている病院は、ぼくの大切な場所なのだ。ぼくのせいで病院の方たちが辛い思いをするのは絶対に嫌だった。N記者のおかげで、掲載された記事は、ぼくの病院への感謝の気持ちが伝わる内容になっていた。

ぼくが入院する病院にも犬がいてほしい、そう思って始めた活動だったけれど、いろいろな病院の事情を知り、全国のどの病院でもいいから、少しずつでもファシリティドッグが普及してほしい、と思うようになった。そのためにぼくができるのは、一人でも多くの人にファシリティドッグを知ってもらうための活動だと思っている。

そして春。思いがけない敵がやってきた。新型コロナ

ウイルス感染症。あまりにも突然の休校。街からは人が消え、店の棚からはマスクが、カップラーメンが、トイレットペーパーが消えた。

コロナ禍でも、ファシリティドッグの活動は続いていた。導入が進まない理由として、感染症の不安がある、と言われていたが、皮肉にもその安全性が証明されたのだ。犬から人にうつる病気はほとんどない。それに、清潔に保ち、健康を守るため、毎日ハンドラーの手厚いケアを受けている。ベイリーとアニーに会って、よくわかった。二頭とも、長い毛はサラサラでツヤツヤでフワフワだった。うちの犬（外飼いのビーグル）は、雨が降ると古いラーメン屋のにおいがする。もちろん豚骨だ。

ファシリティドッグを育成、派遣しているシャイン・オン！キッズの主な資金源は寄付だ。コロナに負けず、ファシリティドッグは活動しているが、それを支えるための資金を集めるイベントは次々に中止となった。ぼくは一度だけ、ベイリーのためにお小遣いをためて寄付をした。でも、もちろんぼくにはそんなにお金がない。両親も、寄付は自分で稼いだお金でするものだと言う。お金はない。でも、ぼくにできることは他にある。

令和二年夏の入院中に、シャイン・オン！キッズはクラウドファンディングを実施していた。コロナ禍に入院している子どもたちへリモートでも楽しめるイベントを行えるように、病院にタブレットや機材を贈るためだ。コロナ禍の病院、特に病棟は、それまでとはずいぶん変わっていた。入院中の楽しみなことが、すべてなくなってしまったのだ。

ボランティアさんが来られなくなり、保育士さんとの読み聞かせや工作教室もなくなった。デイルームで、ほかの子どもたちと一緒にご飯を食べることもできなくなった。

ぼくが入院しているのは整形外科なので、車いすだけどめっちゃ元気、という子もたくさんいる。リピーターも多いから、仲良くなった子ども同士で、

「次、いつ入院？今度もいっしょになったらいいね。」

なんて会話も聞こえてくる。車いす、松葉づえ、スト

レッチャーの子どもたちが、携帯ゲームを持ち寄って遊んでいたと思ったら、エスカレートしてケンカになった、ということもある。でもコロナで変わってしまった。みんなお母さんや看護師さんに、

「いいかげんゲームをやめなさい。」

と怒られているけど、ほかにすることなんかないじゃないか、と言いたくなる。

休校中の子どもたちのストレスが問題になっている、という話を聞くたびに思った。

友だちに会えない？外で遊べない？

家に居られて、家族と過ごせて、好きなものが食べられて、毎日お風呂に入れるならそれだけでうらやましい。感染症対策のため、家族との面会もできなかったのだ。

ぼくは、コロナ禍での入院生活のレポートを書いた。日本中のみんなが大変なのはわかっている。犬どころじゃない、と言われても仕方ないかもしれない。でも、入院している子どもたちが辛い思いをしていることも知ってほしいという思いがあった。

ぼくのレポートは、西日本新聞に掲載された。紙面では、シャイン・オン！キッズのクラウドファンディングのことも紹介された。

新聞に記事が載ると、編集部に応援のメールや手紙が届くことがある。ぼくの記事で初めてファシリティドッグのことを知った、というメールや、ぼくを応援している、という手紙を読み、今までやってきたことが無駄ではなかった、と思った。同時に、新聞がつないでくれるたくさんの人たちとの出会いに、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

この入院中にはとてもうれしいことがあった。２頭（？）のアイボが病院にやってきたのだ。茶色い瞳が夢ちゃん。青い瞳が太陽くん。保育士さんが病室につれてきてくれたのは、手術の二日後だった。

かわいい！とてつもなく、かわいい！

院長先生に手紙を渡した後、ロボット犬はどうだろう、という意見が出たと聞いた時は

「アイボ百台より、ファシリティドッグ一頭の方が良

い。」

と言った、あの時のぼくに言いたい。

「アイボもいいぞ！」

もちろん、アイボがどんなにかわいくてもベイリーにはかなわない。でも、今、ここにいてくれる。夢ちゃんがいてくれたから、一番嫌いな尿道カテーテルを抜く処置も、いつもほど辛くなかった。保育士さんの話では、アイボは小さい子よりも中学生や高校生に人気だそうだ。付き添いの家族もなく、看護師さんとも話をせず、一日中一人で過ごしている中高生も、アイボとなら一時間でも話をすると聞いて、なるほど、そうかもしれない、と納得した。

ファシリティドッグの導入は難しい。でもすぐにアイボをぼくたちにプレゼントしてくれた病院の方たちの優しさがとてもうれしかった。そして、これはきっとファシリティドッグの導入へ向けての第一歩に違いないと思った。

夏休みのない夏が終わった。春に三ヵ月の休校があったため、ぼくが通っていた小学校の夏休みは、ほんの数日しかなかった。

十月二日、日暮れが早くなり、塾に迎えに来てくれた母が、帰り道を歩きながら、ぼくの顔を見ずに言った。

「ベイリーが、死んじゃったんだって。」

ショックだったが、不思議と涙は出なかった。フェイスブックで元気な姿を見たのは何日前だったろう。具合が悪いなんて知らなかった。でも、横浜で会って、もうおじいちゃんなんだ、ということはわかっていた。最初に頭に浮かんだのは、森田さんの顔だった。ベイリーをハワイから連れてきて以来、毎日二十四時間一緒に過ごしてきた森田さん。日本初のファシリティドッグとハンドラーとして、辛いことも楽しいこともいっぱいあったと思う。森田さんの気持ちを考えたら、たった一度会っただけのぼくが、悲しいなんて言ってはいけない気がした。

母と相談して、弔電と花を送った。ぼくは電報という

ものを初めて知った。ベイリーが旅立った日は、中秋の名月だった。ぼくはこれからもきっと、満月を見るたびにベイリーを思い出すだろう。

もう二度とベイリーに会えない。それはとても悲しいことだ。でも、天国には、ベイリーが見送ったたくさんの子どもたちがいる。きっと、ベイリーを抱きしめて、再会を喜んでいる。ずっとベッドの上でしか過ごせなかった子も、天国でならベイリーと走り回って遊べるはずだ。

だからベイリー、寂しくないよね。これからも、ぼくたちのことを、空の上から見守ってくれるよね。

あの楽しかった誕生会が、ベイリーの最後の誕生日になった。

もし、あの日の新聞に気付かなかったら、ぼくはベイリーに会えなかった。

病気に生まれて良かったと思ったことは一度もない。でも、もしも病気でなかったら、ぼくはベイリーに会えなかった。

病気だからできないことがたくさんある。でも、病気だからできることを見つけた。ベイリーが、それを教えてくれた。

ありがとう、ベイリー。大好きだよ。

あれから三年。あの時小さな子犬だったタイとマサは立派なファシリティドッグとして静岡と東京の病院で働いている。そして今は新たな候補犬としてニック、トミー、ミコの三頭が様々な研修を受けている。少しずつ、でも確実にベイリーの後輩犬が育ち、ファシリティドッグの活動は拡がっているのだ。

ぼくは中学生になった。学校の勉強は、小学生の時とはくらべものにならないくらい難しくなった。科学情報部に入り、新しい友達もできた。自由な時間は少なくなったが、毎日がとても充実している。ぼくは今でも、時間を見つけて新聞への投稿や作文の応募を続けている。今年から始まった、こども家庭庁の「こども若者★いけんぷらす」のメンバーにも登録した。こどもや若者の意

見を聞き、その声で社会を作っていく、という新しい取り組みだ。果たして本当に声が届くのかどうかは疑問だが、何かを始めなければ何も変わらない。個人の活動には限りがある。ぼくがやっていることは、なんの効力もないのかもしれない。でも、できる限りのことはやってみたい。天国にいるベイリーのために。今も病気と闘っている、仲間たちのために。

ぼくの手術は、背骨の成長が止まったら終わる。主治医の先生からは、あと一回、最後の手術をしたら卒業だと言われている。ぼくが患者でいる間に、入院している病院にファシリティドッグが来ることはないだろう。でも、ぼくはあきらめない。いつか、日本中のこども病院で、ファシリティドッグが活躍する日がくると信じている。

麻酔科医になって、ベイリーの後輩犬と一緒に働く。新しい夢へ向かって、ぼくの挑戦はこれからも続く。

小学生の部

受賞作品

大賞

ある少女の記録
能美　にな　福岡県　明治学園小学校　4年

優秀賞

ブタはなんのために生きるのか
高橋　杏　東京都　日本女子大学附属豊明小学校　2年

わたしといたずらっ子
田之上　心乃花　鹿児島県　南九州市立宮脇小学校　2年

選考委員特別賞

あさのあつこ賞
よっちゃんの居場所～治せない病気～
小川　彩有里　大阪府　高槻市立大冠小学校　5年

最相葉月賞
災害後の人の「心の輪」の再構築について
中川　瑞祥　福岡県　朝倉市立杷木小学校　6年

リリー・フランキー賞
だから、反抗期なんだってば
川口　颯　埼玉県　西武学園文理小学校　6年

学校団体賞

西武学園文理小学校

最終候補作品

私は今日も海を飛ぶ　坂井　美咲　福岡県　6年
想像の翼　野入　桃子　福岡県　5年
緑色の弟子日記　古川　ひなた　福岡県　5年
おれの取りあつかい説明書　川名　岳大　埼玉県　5年
ハワイにかかる七色の虹のなぞ　鈴木　愛渚　東京都　3年
留学体験記　～自然から学んだこと～　熊谷　やえ　長崎県　5年
二ひきの「もぐちゃん」の話　澁谷　楓斗　福岡県　2年
ちび太との絆について　別所　詩野　大阪府　5年
さがは、がばいたのしかばい　熊本　友哉　愛知県　1年
戦争なんていや　岡本　采佳　岡山県　4年

中学生の部

受賞作品

大賞

継承 ～戦後七八年、戦場に生きた人々の証しを残せ～
野田　真秀　埼玉県　さいたま市立浦和中学校　3年

優秀賞

隼は征く雲の果て～おじさんの人生を探して～
内田　博仁　神奈川県　神奈川県立あおば支援学校中学部　3年

シュトルパーシュタイン
チャケ・レオン　ドイツ　Jakob-Fugger-Gymnasium　2年

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　**人生作家**
林　翠恋　新潟県　上越教育大学附属中学校　3年

最相葉月賞　**失敗を乗り越えて**
宮﨑　大輔　和歌山　和歌山県立桐蔭中学校　3年

リリー・フランキー賞　**ありがとう、ベイリー**
清武　琳　福岡県　東福岡自彊館中学校　3年

学校団体賞

（五十音順）

さいたま市立浦和中学校
淑徳巣鴨中学校
和歌山県立桐蔭中学校

最終候補作品

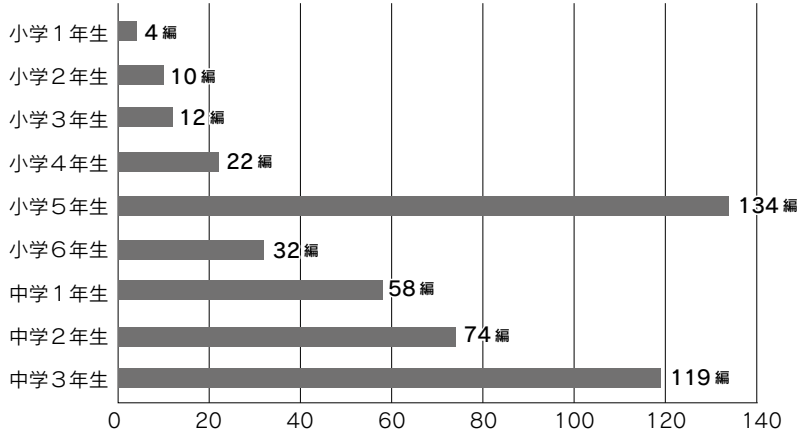
十年後の医療を考える
～救急医療と地域医療の現場から～　田村　萌梨　鳥取県　2年
真珠のように輝く弟へ　石井　鷲　和歌山県　3年
七枚分の悔しさ　大島　珠妃　岩手県　3年
存在意義　﨑山　莉紗　和歌山県　3年
最先端ファミリー　津田　初季　和歌山県　3年
吸って、吸って、吐く　堀　琴心　和歌山県　3年
音の旅　里　百合愛　福岡県　1年
二日の記憶　佐々木　すみれ　岩手県　2年
笑う門には福は来るのかどうか　南　希歩　和歌山県　3年
原爆ドームから世界へ　泉山　桜　東京都　1年
うちの兄は今日も元気　山本　さくら　東京都　3年

（令和５年度）第15回　子どもノンフィクション文学賞応募状況

◎応募者受付数 465 編

小学生 **214 編**（昨年 253 編）／中学生 **251 編**（昨年 207 編）

◎応募者学年別構成



◎応募者地域別構成

地　域	応募数			九州内訳（再掲）	応募数		
	小学生	中学生	計		小学生	中学生	計
北　海　道	1 編	4 編	5 編	福　岡　県	35 編	28 編	63 編
東　　北	0 編	10 編	10 編	（うち市内）	(23) 編	(8) 編	(31) 編
関　　東	75 編	92 編	167 編	佐　賀　県	0 編	0 編	0 編
信　　越	3 編	4 編	7 編	長　崎　県	1 編	0 編	1 編
北　　陸	0 編	0 編	0 編	熊　本　県	0 編	6 編	6 編
東　　海	4 編	1 編	5 編	大　分　県	1 編	0 編	1 編
近　　畿	87 編	103 編	190 編	宮　崎　県	0 編	0 編	0 編
中　　国	4 編	1 編	5 編	鹿 児 島 県	1 編	1 編	2 編
四　　国	0 編	0 編	0 編	沖　縄　県	2 編	0 編	2 編
九　　州	40 編	35 編	75 編				
海　　外	0 編	1 編	1 編				
合　　計	214 編	251 編	465 編	合　　計	40 編	35 編	75 編

事前選考委員　（五十音順）

相本 倫子　石橋 聡　伊藤 和人　岩渕 邦夫　上野 浩昭　神村 恭子

第15回子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

二〇二四年三月二十三日　発行

編集・発行　北九州市立文学館
〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内四―一
電　話　〇九三―五七一―一五〇五
ＦＡＸ　〇九三―五七一―一五二五

印刷・製本　有限会社 青雲印刷
登録番号　北九州市印刷物登録番号第２３１０１０３Ａ号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。

子どもノンフィクション文学賞

主催：北九州市　北九州市教育委員会　協賛：日本児童図書出版協会

後援：朝日学生新聞社　公益社団法人全国学校図書館協議会　公益財団法人海外子女教育振興財団

北九州市印刷物登録番号第 2310103A 号